贅沢な願い事

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
贅沢な願い事

【Ｎコード】
Ｎ４４９４Ｆ

【作者名】
飯野こゆみ

【あらすじ】
「ようっ、久し振り」１０年ぶりに再会したのは中学時代の同級生だった。目元のホクロ以外面影が無いほどの変わってしまった彼。何度目かの偶然の後２人は付き合う事になったのだが――帰り際のキスや背中を向け帰っていく彼に振り向いて欲しいと願うのは贅沢なのかな

昔の面影

「じゃあまたな」

「うん、気をつけて帰ってね。」

進み始めた足を止める事無く”おう”と一言だけの返事。
段々と小さくなっていく彼の背中に私は呟く。

振り返れ、振り返れ

と。
でも願いは虚しく、結局彼は背を向けたままあの角を曲がってしまった。
やっぱり私だけなのかな……

彼、徳山俊平は小、中学校の同級生だった。
同じ学校にいた頃は、仲の良い同級生ってだけで特別の感情なんてなかった。
その頃の彼は、背も私より大分小さくて、格好いいって言うより可愛いって表現がぴったりだった。
そんな彼と再会したのはつい最近、中学を卒業して１０年の月日が経っていた。
いつものように会社へ向かう為、駅のホームに立っていた時に急に肩を叩かれた。

「久し振り」って。

振り返ると私の目線より遥かに上、唇の端を少し上げた男の人がいた。

誰？私の記憶を辿ってみてもそれらしき人は思い出せない。
人違い？！だってこんなグッとくる声聞いたら忘れないでしょ、絶対人違いだ。
私は、彼の正面を向いて曖昧に笑ってみた。
どう？これくらいはっきり顔を見たら、勘違いって分かるよね。
我ながらいい案だ。私はもうおしまいとばかりに元のようにクルリと前に向きなおした。

「お前な、久し振りに会った同級生無視すんのかよ。香也ってそんな奴だったっけか？」
低い声が尚更低くなって、ちょっとムッとしているのが分かった。
って今”香也”って言った？同級生って？慌てて振り返るとそこにはやっぱりさっきの男の人でして。
思わずマジマジと顔を見つめてしまった。

「もしかして、俺の事忘れちゃったって言うんじゃねえよな。香也ちゃんよぉ。」

ん？んん――

見覚えがあるかも。
この目元の小さいホクロ。

「もしかして、俊平君？」
半信半疑で聞いてみたら

「マジで分からなかったんだ。ちょっと俺ショックかも。」

なんて、全くそんな事を思っていなそうな、ちょっと意地悪そうな顔をした彼。

この再会から私達は頻繁に駅で会うようになったのだった。
同級生だからといっても１０年もの月日は人を変えるのには十分な時間だった。
あの頃の印象とは全く違う彼。
見上げる程の身長と低い声。
あの頃の大きい目も度の入った眼鏡で細く見える始末。
変わらないのはあの目元のホクロだけだった。

強引で、それでいて冷めているような。
あの頃とは似ても似つかない俊平。
教室で大きな口を開けて笑っていた俊平はもういない。
静かな笑み、それが今の俊平だ。
優しい人がタイプだったのに。
だけど私は、何度か会ううちに俊平にどうしようも無いほど惹かれてしまったのだ。

そんな私を見透かしたように何度目かの偶然の後、俊平は言ったのだ。

「どうせ誰もいないんだろ。俺と付き合うか？」

思わず頷いていた私。

そんな私を

「犬みたいな奴だな」

と言った俊平。
そうして私達は付き合い始めたんだ。
でも付き合ったっていってもそっけないんだよね。

今日だってそうだよ。
別れ際のキスや振り返って手を振って欲しいって思うのは、贅沢な願い事なのだろうか。
付き合い始めて3ヶ月の私達、初めっからそんな甘い別れ際なんて存在しなかった。
彼の見えなくなった曲がり角を暫くの間見つめてしまうのが私の習慣。

じゃあまたな

なんて言ったって、次の約束があるわけじゃない。
突然やってくるメールで待ち合わせて、食事をして。
家族と住むこの家に送ってもらってそれで終わりなのだから。

短大を出て隣町の小さな会社に就職した私とは違い、大学を卒業して、大きな会社へ就職した俊平は1年の本社研修の後、東北へ2年勤務そして今年また本社勤務になったそうだ。
きっと、バリバリのコースを歩んでいるだろう俊平の邪魔はしたくは無かった。

逢いたくても逢いたいと言えず、声を聞きたくても我慢をしてしまう。
もう駄目かな、そんな時決まって俊平からのメールが届く。
まだ大丈夫、まだ大丈夫。

いつの間にかに占領された私の心。

明日は土曜だけど、こんな時間に帰った挙句、明日の約束もない私達。
これって付き合っているっていえるのだろうか。

翌日、私は美容室へ出掛けた。
メールを待つだけの一日なんて堪えられなかったから。

彼に触れられるこの髪が好き、だからさらさらな髪にしておきたくてまだ早いかなと思ったけれど縮毛をかけようと思った。
何だかんだ言ったって彼のことを考えてしまう自分に苦笑してしまう。
順番を待つ間雑誌に手を伸ばした。

ペラペラと捲ったところに飛び込んできた文字。

――彼が自分に冷めてきたと思ったのはどんな時

そこにはいろいろな事が書いてあったけれど、最後の方に書かれた言葉に心臓がトクンと波打った。

別れ際に振り向いてくれなくなった時

そう書いてあった。
そうだよ・ね。
私の場合初めっからなかったけれど、やっぱりそういうことなのかも知れない。
私は店員に声を掛けた。

「よくお似合いですよ。」
私の髪を切ったその人は言ってくれたけれど、きっと失恋したと思われたのかな。
励ましてくれたのかもしれない、鏡に写った私の顔は今にも泣きそうな顔だったから。

ごめんね

色付き始めた街路樹の間を意味もなく歩いていた。
秋は失恋の季節って誰が言ったのだろう。
まだ決まったわけでもないのに別れの予感がするのだろうか、風に舞う葉を眺めていたら鼻の奥がツンとしてきた。

カバンの中から、音がした。
携帯の着信音。

俊平

たかが雑誌、されど雑誌。
私は彼の声を聞く事が何となく怖くて、携帯を見つめる事しか出来なかった。
１０コールした後、その音は止んだ。
再び静寂を取り戻した携帯をそっと開くと其処には４通のメールと５回の着信があった。
１件自宅からの着信以外は全て俊平のものだった。

メールは開く事が出来ずにまず自宅へと電話をした。
すると直ぐに母親がでた。

「もしもし私、何かあった？」
と聞く私に

「香也、今日は俊平君と一緒じゃなかったの？」
と声を上げる母親。

「今日は、違うよ。何で？」
どうしてそこで、俊平の名前が出るかな、折角復活した鼻が、また怪しくなってきちゃうじゃない。

「いや、だってほら今日随分とめかしこんで出掛けたから、デートなのかと思って。」
どぎまぎした声に尻つぼみの言葉、明らかに動揺しているのが分かった。

「それで、用事は？」
ちょっと冷めた声が出た。

「ん、いや俊平君から電話があってね。それで母さん思わず言っちゃったのよ、その……いつもの倍、お洒落して出掛けましたよ。待ち合わせ場所にまだ着いていないのですか？って。」

あまりの衝撃に言葉が出なかった。何て事言ってんの母さんってば。

「ごめん。」

その言葉の後はこの無機質な物体からは連続する電子音が流れ始めた。
あまりの衝撃に言葉がでなかった。

暗くなった画面。
深呼吸をして、親指でボタンを押すと画面にはまだ着信あり、メール有りの表示がある。

ドクドクと動く心臓を掴みながら、恐る恐るメールを開いてみる。
初めのメールは午前８時、丁度朝食を食べていた頃だろうか。

――出掛けるぞ。１０時に駅前の噴水な。――

なんて俺様な。
でもきっとこれが昨日送られたきたのなら見えない尻尾を大きく振っていたかも知れない。
違うな、それが何時だってメールに気がついていたら、尻尾振ってたな。

次のメールは待ち合わせ時間丁度の１０時、この頃私は電車に乗っていたかも。

――遅い――

これまた、俺様な。
自分で呼びつけて5分と待てないのかしら？
でもふと思う、私は彼を待ったことがないかもと。
初めての待ち合わせも１０分前に着いたのに俊平は既に其処にいた。
次は１５分前に行ってみた、でも其処にもまた。

段々メールを見るのが恐くなってきた。
次のメールは１１時だった。

――連絡しろ――

俺様男は何処まで行っても俺様なのだろうか。
きっと痺れを切らせてこの後に直接携帯に掛けたのだろう。
続けて2回の着信がある。

そして、その着信の5分後には

――連絡して欲しい――

俺様は何処かに行ってしまったようだった。
この頃私は美容室にいた。
携帯に気づけなかったのだけれど、結果的には無視をしてしまった事になるんだよね。

俊平はどんな気持ちで電話してくれたのだろうか。
ちょっとでも心配してくれた？
俺様口調でない俊平に違和感を覚えてしまった事に自分自身が一番驚いた。
今の時間は午後2時を回っている。
まさか、いないよね……。

私は俊平の携帯のアドレスを開いた。

なんて書こう、取りあえず謝った方がいいのかな。
震える手でボタンを押した。

ごめんね

そこまで打って続きを考えてしまう、メールに気づけなくってと書くべきか、美容室に行っていたと書くべきか、それとも母が変なことを言ってと書くべきか。

その時、足にトスンと衝撃が。
足元には幼稚園くらいだろう男の子がしりもちをついていた。
慌ててその男の子を引き上げた。
びっくりして目を丸くさせたそのこは何となくだけど、彼の小さい

頃に似ているような気がした。
「すみませんでした。」
みると、ベビーカーを押したこの子の母親が男の子の頭を下げさせている。

「いえ、私も突っ立っていましたから。」
そう言いながら男の子にも大丈夫だった？と声を掛けた。

男の子は恥ずかしそうに
「大丈夫、お兄ちゃんだから。」
と笑ってくれた。
本当にその顔が段々あいつに見えてきて……。

お辞儀をして分かれた後、握り締めた携帯に気がついた。
メールを打っていた画面はもう其処にはなくて。
もしかしてと、送信画面を見てみると、題名もなく、ただのそっけない”ごめんね”だけの文字。

送っちゃったんだ。
メールの続きをとも思ったのだけれど、何を書いても言訳にすぎず、結局電源まで落として携帯をカバンにしまった。

未練がましく仲の良い2人組ばかりが目に入る。
肩を組む人、腕を組む人、手を繋ぐ人。
私はどれも出来なかった。

オープンカフェでカフェオレを飲んでも、お気に入りの洋服を買っても、私の気分は晴れることが無かった。

久し振り

あそこ、行ってみようかな。
電車に乗って地元の駅まで戻ってきた。
歩いて帰る家への道。
途中私はいつもは通らない懐かしい小道を入った。
そこは、私の通学路。
こんなにも近くにあるのに一本違う道だけにここまで来たのは久し振りだった。
一歩一歩踏みしめて歩いた。
段々と見えてくる大銀杏の樹。
少しだけ色付いた銀杏の葉っぱ。
その光景はあまりにも懐かしくて。
もう１０年も経ったのか、時の流れの速さを感じた。
楽しかったあの時代、恋に焦がれた中学生の私。
こんなに苦い恋をするなんてね、それもあの俊平と。
考えられなかったな、本当に。

校門の前まで来ると、扉は閉ざされたまま。
土曜の夕方だから当たり前なのかもしれないがひっそりしていた。
折角だから大銀杏でも写メに残しておこうかな。
カバンの中から携帯を取り出し、勇気を出して電源を入れた。
着信もメールも届いていなかった。

カシャリと一枚撮ってみた。

自然と泪が零れだした。
終わっちゃったかなって。

日も落ち風が冷たくなってきた。
今まであった髪の毛が無くなったのも手伝ってか急に体も冷えてきて、私は懐かしい通学路を通って家路を急ぐことに。
途中には美佐子の家があった。今でも仲の良い幼馴染だ。
思わず美佐子の家の前で足を止めてしまった。
もし、いたのなら話聞いてもらおうかなと。
でもそれはかなり都合の良い話。
だって、あの頃の私と彼を知る人には恥ずかしくって付き合い始めたことさえ言えなかったのだから。
報告が別れそうだって話なんて、おかしいにも程があるよね。後ろ髪を引かれつつも美佐子の家の前から立ち去ろう、そう思った時だった。
さっき使ってから電源を切らなかった携帯が鳴り出した。
メールの着信音、美佐子と書いてあった。
彼女の部屋を見上げつつメールを開いた。

何、人の家の前で突っ立ってるの？早く入ってきなって。

そう書いてあった。
いたんだ、美佐子。

踵を返し再び美佐子の玄関の前に立った。
呼び鈴を鳴らすまえに美佐子が顔を出した。

いらっしゃい、と。

久し振りだね。
うん、久し振り。

そんな挨拶に美佐子が噴出した。

私も釣られて笑ってしまった。

美佐子の部屋に入ったのは何時振りなのだろう。
定期的にメールでのやりとりをし、外で会ったりはするのだが……。

お茶を取ってくるねと美佐子が出ていき一人残された、美佐子の部屋。
毎週行き来をしていた頃とは大分感じが変わっていた。

そっか、カーテンか。
一番違和感を感じたのは部屋の雰囲気。
確か、あの頃は美佐子の好きな淡い桃色だったけ。

少しだけあいた窓から揺れるカーテンは若草色だった。

お待たせっ

そう言って両手いっぱいいろいろなものを抱えた美佐子が戻ってきた。
ペットボトルのコーラ。
これは相変わらずなんだね。

グラスに注がれたコーラを持って何になのか分からないが乾杯をした。

プハーっと息をつく美佐子を久し振りにみた。
これも変わらないんだ。さっきまでのささくれた気持ちが少し穏やかになった気がした。

「いつ連絡くれるかと思ってたんだよ。」

と拗ねたような口ぶり。

「この前いつだっけ？先週？」

はて？メールの履歴に残っているかな。そんなことを思っていたら。

「ふーん。そう言うこと。もう私には報告する気にもならないってか。」

この一言で本当に頭のなかに”！”マークが点滅した。

俊平のことだよね。

「ごめんね。何だか恥ずかしくって……。」

バツが悪くて顔を上げられなかった。

全く誰のお陰で付き合えたんだか

小さい声が聞えた。

直ぐに顔をあげ美佐子の顔を見た。

どういうこと？美佐子のお陰って？

私の顔を見て美佐子はハッとしたようだった。

口を一文字にして、何も語りません。とアピールしているみたいだったけど。

暫くの沈黙の後

「私が言えるのは、あんた達の再会は偶然なんかじゃなかったんだよ。少なくとも俊ちゃんにとってはね。」

言い終えた罪悪感からか、美佐子は大きなため息をついた。

俊ちゃんにとっては偶然じゃなかったって言う事は。

美佐子は満面の笑みを見せてくれた。
「何があったか知らないけど、あいつ本気だよ、それも半端無い位にね。」
頭の中が整理できない。
美佐子の言う事は全くといっていいほど理解が出来なかった。
私はポツリポツリとこの3ヶ月の事を話し始めた。
そっけなさすぎる俊平の事を。
話しを聞き終えた美佐子は一際大きなため息をついた。
そして一言
「そりゃ、自業自得だから。勿論、香也のね。」
ここに来た時から、美佐子の言葉は全部腑に落ちないことばかりだった。
特に最後の自業自得とは？
そして
「私は俊ちゃんに同情するね。香也のことだから昔のノートとかとってあるんでしょ、家に帰ってよく探してごらん。あの頃の私達のあれをね。」
一応アドバイスなのだろうか。
あれだけ持って来てくれたお菓子には全く手をつけていないというのに、美佐子といったら
「ほら、やる事決まったんだから早く帰りな。」
とまで言い出す始末。

私は美佐子の勢いに押されて帰る事になってしまった。
帰り際
「今度はちゃんと報告するんだよ。」
と笑顔で見送られた。

あの頃のあれって。
もしかして……

何時の間にやら早足になっている私。
早く、早く。
気が急いていた。

どんな人が好き？

「ただいま」
そう言って玄関を開く、ブーツを脱ぐのももどかしい。
スポッと脱いだそれをそろえることなく部屋へと向かった。
階段を上り始めると母親が顔出した。

「香也っ」
と声を掛けられたもののその後が続かない母。

「ただいま、母さん私の部屋の天袋って動かしてないよね。」
私の言葉に

「動かしてないけど、それよりあんた随分と思い切って……もしかして母さんのせい？」
と私を見つめた。
すっかり忘れていたあの電話を。

「ううん、違うよ、母さんに電話貰った時にはもうこうなっていたから。大丈夫だって。」
ちゃんと母の誤解を解いてあげたかったけれど、今はこっちが先決だ。
もう一度
「大丈夫だよ、そんな気分だったんだから似合うでしょ？」
と言い残し自分の部屋へ向かう。

買ったばかりの洋服もベットの上に投げ置いて、急いで部屋着へ着替えた。
埃っぽいだろう天袋。

最後にここをあけたのは何時のことだろう。

椅子にのって、ふすまを開けた。
途端に広がるあの身体に良くなさそうな臭い。
マスクした方が良かったかも知れない。
一旦椅子を下り、クローゼットの中からタオルを出した。
工事現場で働く人のように口をタオルで覆って準備完了。
今度こそ捜索開始だ。
手前のダンボールから順に出していく。
これは短大の時の教科書とノート。
これは何年か前のアルバム。
重たいダンボールを持つ手が震える。
これで怪我したらしゃれにならないって。
やっと中学時代のダンボールが出てきた。
中学時代のものは全部で４つ。
部屋を見渡すとダンボールの多い事。
よくもまあこんなに取っておいたものだ。
天袋はさながらドラえもんのぽけっとと言ったところだろうか。

いらないダンボールを部屋の角においてスペースを確保した。
緊張しながら、その中身を広げていった。

一つ一つノートを確かめる。
授業の事の他に端端に友人達の落書きの跡がある。
何もない時だったら、思いっきり楽しめただろうその思い出のノートも今はペラペラと捲っては閉じていく。
これじゃない、これでもない。
最後のダンボール箱にそれはあった。

私と美佐子の交換日記。

大学ノートに４冊あった。確か美佐子と半分づつにしたのだから８冊分もした交換日記。

口を覆っていたタオルを取り、ベットに腰掛けてページを捲った。
今度は一枚一枚丁寧に、見落とさないようしっかりと。

今より少し丸みがかったその文字は紛れも無く私と美佐子のもの。
５行くらいの時もあれば１ページ以上続くものあったりして、読み進めていくうちにあの頃の教室がしっかりとまぶたに浮かんできた。

はじめは私と美佐子の２人の日記だったにも関わらず、最後の２冊はどういうわけだか俊平と大地が仲間に加わっていた。

それはそれで楽しいものだったような。
性格や見た目が変わっても文字だけは変わらなかったようだ。
厳密にいうと少しは変わっているけれど。
癖のある右上がりの文字。
付き合い始めて何度か目にしたその文字。
勿論私に何か書いたっていうものではなくて、それは何かのサインだったり、仕事の電話をメモする文字だったりなのだけれども。

そのページを開いた時、思わず手が止まった。
じわじわと記憶が蘇ってきた。

ページの一番初めには

どんな人が好き？

って書いてあった。
それは美佐子の文字だった。

当時から大地のことが好きだった美佐子が悩んだ末に書いた日記のテーマ。
遠まわしの告白のようなそんな文面が書いてあった。

次のページには大地の言葉が。
そこには一言。

好きになった人がタイプなんじゃない？

大地らしいや。

そのページの反対側には私の文字。

その日記に驚愕した。
こんな事書いてたんだ私……

・まず私より背が高い人。これは絶対条件ね
・優しい人よりちょっと冷たい感じのする人がいいかな。
・追いかけられるより、追いかけるような恋がしたいかも。
・なんにでも一生懸命で、それが勉強でも運動でも仕事でも。彼女は2の次とか（笑）
でもいざって言うと、今やってる月9のように、何も約束していないのに突然連絡がきて突然会えたりするのなんてちょっと嬉しいかも。

これって俊平のことじゃん……

そして、俊平。

目にした瞬間に目頭が熱くなった。

会いたい

時計を目にして、さっき脱いだ服に着替え、カバンも持たずに家から駆け出した。

私の家から俊平の家までは歩いて5分。
急いで出てきたので足はサンダルだった。
ブーツ履く時間が惜しかったから。

俊平の家の前で息を整えた。
あの頃何度も押しかけた俊平の家。
尤もその頃は仲間としてだけれど。

チャイムを鳴らして返事を待った。
直ぐに扉は開かれた。
出てきたのは私と変わらない位の女の子だった。もしかして、光里ちゃんかな。
あの頃はまだ小学生で、俊平と同じで全く面影がないから自信がない。

「あのー。山本です。」
私が其処まで言うと

「もしかして、香也ちゃん?私、妹の光里です。」
私が頷くと光里ちゃんは

「お母さーん、香也ちゃんきてくれたよー」
って、大きな声を上げた。

なんでお母さんなの？私は俊平に会いにきたのに。
戸惑う私。
玄関先に出てきたおばさんは私の顔を見るなり
「久し振りね。すっかり綺麗になっちゃって。俊平は一旦家に帰ったからいないのよ。さぁさ上がっていってね。」
そう言ってスリッパを出してくれた。

更に私の頭は混乱状態。
玄関に固まった私を光里ちゃんが引っ張り出す強行にでた。

かろうじて”お邪魔します”と声が出たものの。
さっぱり意味不明のさっきの言葉。
聞き間違いじゃないよね。
一旦、家にってどういうことなの？

リビングに通されてソファに座った。
あの頃のものとは違う革張りの上品なソファ。
時代の流れは何処の家でも同じなのだろう。

私の隣に光里ちゃんが座って、向かいにはおばさんが。
目の前には落としたてのコーヒーが入ったカップが３つ。
自分の家を出た時とは大分状況が変わってしまっていた。

おばさんはニコニコしながら話出した。

「俊平ったらたまには連れてきてって言ってるのに全然連れてきてくれないんだもん。やっと香也ちゃんに会えて何だか嬉しいわ。そうそう俊平とケンカでもしたの？今日は傑作だったのよ。」
何かを思い出したかのように、こみ上げてくる笑いを抑える事もせ

ずケラケラと笑い始めた。

「いえ、そのケンカはしていませんが……。」

そんなことよりさっきのあの事を知りたいんだけど。

「えーじゃあとうとう、香也ちゃん、兄貴に愛想尽かしちゃったとか？」

光里ちゃんの言葉におばさんの笑い声がぴたりと止んだ。

「それは、ないのですが。どちらかと言えば、俊平君の方がそうなんじゃないでしょうか。」

自分で言ってて虚しくなってきちゃうよ。

すると、おばさんと光里ちゃんは顔を見合わせて2人の声が重なった。

「「それだけはないから」」

と。思いっきりびっくりした。半信半疑どころじゃない、全信全疑って言葉があったらぴったりだと思う。

2人もビックリしていたようだった。

静まりかえってしまった。

ええい、こうなりゃ女は度胸だ、聞いてしまえ。

「それで、俊平君はこちらには住んでいないのでしょうか？」

き・聞いてしまった。

おばさんの答えを聞くのに緊張して、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「えっ、香也ちゃん知らなかったの？私はてっきり。あの子、半年前、本社勤務になってから会社の近くに社宅を与えられたのよ。で

も3ヶ月前くらいから突然こっちに帰り始めて、私もおかしいなって思ってたのよ。そしたら、光里がね。」

その先を光里ちゃんが説明してくれた。

「2ヶ月前に偶然見たのよ、兄貴と香也ちゃんを。桜町のレストランで食事してたでしょ。私もそこにいてね。それで兄貴がやっと香也ちゃんと付き合えたんだって知って。私まで嬉しくなっちゃったんだ。その晩は兄貴に問いただしたもんだよ。」

始めて知る事実にきょとんとしてしまう私。

半年前から社宅？それにやっとって何？

「いいもの見せてあげる。兄貴には内緒だよ。」

そういって私は俊平の部屋に連れてこられてしまった。

久し振りに入る俊平の部屋。

あの頃と変わらない窓際の机の前に立たされた。

「これみて。」

そういってデスクマットを指差す光里ちゃん。

そこには、中学時代の懐かしい写真が4枚挟まれていた。

「何か気がつかない？兄貴ね、いっぱい写真が有るくせにっていうか、いくら彼女が出来てもこの写真だけはかえることはなかったんだよね。この写真も、この写真も皆、隣が同じ人なんだよね。」

本当だ。どの写真も隣には私がいた。

でもそんなの只の偶然か面倒くさいだけかもしれないし。

「香也ちゃんって顔に出るって言われるでしょ。偶然じゃないよ。その証拠にその一番端の写真は本当は2枚あってね。一枚は兄貴の

手帳にもう何年も挟んであるんだから。おっと、これを知っているのは兄貴には内緒ね。きっとまだ探せば何か出てくるかもしれないけれど、一応兄貴にも悪いかなって思うのでこれまでいいかな？私ずっと思ってった。どんな人が彼女になっても香也ちゃんが一番いいのにって。だから兄貴のこと見捨てないでやって欲しいんだ。ってこれ妹のたわごとだと思って聞き流してね。」

そんなの信じられないよ。
だってあの俊平だよ。
でも、ちょっとの期待をしてしまう私もいる。

会いたい、俊平に。
会いたい、凄く。

その後の私の行動は早かった。
おばさんに俊平の住所を聞いて、また来ますと挨拶をして一先ず自宅へ向かった。

カバンを持って、化粧も直した。
さっきとは違いちゃんとブーツも履いていざ仕切りなおしだ。

おばさんから聞いた住所はここから7つも先の駅にあった。
電車に揺られながらも何度も携帯を見てみるけれど、俊平からの着信はないままだった。

誰のせい？

駅前でタクシーを拾って住所を告げると、一瞬運転手の顔が曇ったような気がした。
それもそのはず、下りたのは1メーターの場所。
すみませんでした。と思わず言ってしまった。

社宅と言われて来てみたが、そこは結構りっぱなマンションだった。
俊平って凄いとこに勤めてるんだと改めて思ってしまった。

エントランスで部屋番号を押した。
勢いで着てしまったけれどもしかして、留守だったりするかも。
そんな事にさえ頭が回らなかった私。
程なくして、そこから声が聞えた。
一瞬部屋番号を間違えたのかと思った。
インターフォンから聞えた声は、俊平のものとは違う男の人の声だったから。
間違えましたと言おうとしたら、向こうから声がした。

「香也？俺、大地。今行くからそこで待ってて。」
小声でそう言われた。

私が返事をする前にプツリと切れてしまったようだった。
仕方なく、壁に寄りかかり大地を待つことにした。
どうして今日は俊平に会えないのだろうか？
そんな事を考えつつも待ってしまう私。

エレベーターが下りてきた。
そこにはやっぱり大地一人が乗っていた。

「よう久し振り。」

「うん、久し振りだね。」
ありきたりの挨拶をした。
そういやさっきも美佐子とこんな挨拶したっけ。
思わず笑ってしまった。

「何がおかしいんだ？それはそうとちょっとそこまで付き合え。」
私の腕を取り歩き出す大地。
まだ8時だっていうのに凄いアルコールの臭いがした。

「大地？酔ってるの？俊平は、俊平はいるの？私話さなくちゃいけないことがあるんだけど。」

大地は一旦足を止め私に向かいなおした。
「酔ってるって？全く誰のせいだと思ってるんだか。俊平は家にいるよ。それよりその話しのことでここまできたんだ。そこの公園でまず俺に話してくれないか？あいつきっと今冷静に話し聞ける状態じゃないと思うから。」
それは凄く真剣な目だった。
大地に話すってと思いながらも、こんなに真剣な目で言われちゃ断ることなんて出来なかった。
「分かったよ。だから、この腕放して。」
酔っているからだろう、その力は少し強くてちょっと痛かった。

大地はぱっと離して”ごめん”と言ってくれた。

公園のベンチに座って暫く沈黙が続いた。
くる途中に買ったスポーツドリンクを大地が3口程飲み終えた時に

話しを切り出された。

「もう、駄目なのか？あいつじゃ駄目なのか？」

唐突過ぎる大地の言葉に私は目を丸くするばかり。

きっと今日はそんな日なのだろう。

「そんなの私が知りたいよ。だからこうやって知らされもしないところまできたっていうのに。」

それは呟きにも聞こえるそんな声。

「知らされてないって？社宅のことか？」

大地も驚いているようだった。

「うん、さっき始めて聞いた。大地は知ってたんだね。」

もしかして彼女じゃなかったのかもとまで考えてしまったり。

「あぁ、引越しとか手伝ったから。初めは兎も角、もうとっくに話したのかと……何を考えてるんだかあいつは。」

大地も私と同様最後は呟くようなそんな声だった。

また2人の間に沈黙の時間。

そんなうちに段々大地の酔いも冷めてきたようだった。

「お前、今日”ごめん”ってメールよこしただろ？あいつ何度連絡しても連絡つかないって、って荒れちゃってさ。どうにもこうにもなんねえんだよ。だからてっきり香也からとうとう愛想尽かされたかと思って俺。」

大地は其処まで言うと手に持ったスポーツドリンクをゴクリと飲んだ。

荒れるって？そんなの信じられない。
だってあの俊平だよ。
私になんて全然興味なさそうで、だってだって。

「違うのか？」
大地の声に大きく頷いた。

「本当に？別れ話をしにきたんじゃないのか？」
今度は2回頷いた。

「何をやってるんだか。じゃあこれ。あいつのキーだからこれであいつのとこ行ってくれ。俺はこのまま家に帰るから。荷物は後で届けてくれればいいからって伝えてくれ。」
そういいながら、ポケットの財布を確認すると大地は私の返事を待たずに行ってしまった。

本音

私は手に残されたカードキーを握り締めてマンションへと向かう。
今度こそ俊平と話しをしようと気合を入れた。

エレベーターに乗りながら何と言おうと考えてみるもごちゃごちゃと考えてしまって中々言葉が浮かばない。
それなのに、部屋の前に来てしまった。

震える人差し指でインターフォンを鳴らしても返事はなかった。
暫く待ってみるが、何の反応も無かった。
仕方が無くドアを開けて中に入る。
アルコールの臭いが玄関にまで漂ってきて鼻につく。
顔をしかめ、お邪魔しますと声をかけてブーツを脱いだ。
見覚えのあるスニーカーが乱雑に転がっていた。

突き当たりに見えたリビングだろうその部屋へと足を進めた。

俊平はソファに寝転んでいた。
もしかして寝てるの？
足元に転がるお酒の残骸の数々を避けて俊平の直ぐ横まで近寄った。

足音で近寄ったのが分かったようだ。
「大地、遅せーよ。何処まで酒買いに行ってんだって。」
そう言いながらよこせとばかりに手を伸ばしてきた。

私を大地と勘違いしているようで手は何時までもそのままだ。私は
「俊平。」
と名前を呼んだ。

すると
「やべーって。大地の声が香也の声に聞えるなんて。」
と伸ばした手を顔に乗せた。

「俊平。」
もう一度名前を呼んだ。

ゆっくりと顔をこちらに向けた俊平は

「マジやべーって。今度は幻覚だよ、どんだけ重傷なんだよ俺。」
と言い出した。

私は、溢れてきそうな泪を堪えて、そんな俊平の前に座り顔を近づけた。
「俊平、一つ聞いていい？」

それでもまだ俊平は現実が分かっていないようで。
「なんなりと。」
と投げやりな声を出した。

「私って犬みたい？」
この突拍子もない言葉に俊平は答えてくれた。

「あぁ、いつも言ってるだろ、犬みたいだよ。本当に香也は……犬みたい……だ……」
そこまでだった。
どうやら限界だったようで、俊平は寝息を立て始めた。

私の頬は涙が溢れていた。

何にも言ってくれないって言ってたけどちゃんといつも言ってくれてたんだね。

あのノートには

俺の好きな人は”犬”みたいな奴

そう大きな字で書いてあったのだから。

足元に無数に転がる空き瓶や空き缶を纏め、シンクに残っている食器を洗った。

ここにきて初めて付き合っているらしき事をしている自分に笑えた。

そして、その日私は俊平の眠るソファに寄りかかったまま朝を迎えた。

何度も何度も私の名前を呼ぶ俊平の声を聞きながら。

私は、いつの間にか眠ってしまったその朝を小鳥の囀りでも、目覚まし時計でもなく、俊平の叫び声で目が覚ましたのだった。

「おはよう、俊平。」

そういいながら、スカートの皺を伸ばす私に固まる俊平。

人が固まる姿を始めてみた私。

ほっぺたをちょこんと突付いてみた。

途端に眉をしかめる俊平。

まだあの叫び声以外俊平の声を聞いていなかった。

私は昨日入ったキッチンに行きコップに水を注いで俊平に渡した。
俊平は無言でそれを受け取ると一気に飲み干した。

そして
「夢？」
と発した。

私は
「夢の方が良かった？」
と意地悪く微笑んでみた。

その瞬間ガッバッと立ち上がり私は物凄い力で抱きしめられた。
顔が俊平の胸に埋まってしまい何とか
「俊平……」
と声を絞り出した。

「香也が、香也がどんな気持ちでここまできたか考えたくないけど、
俺もう無理だから。俺もうお前の事、……離せないから……」

言葉を発そうと思うけれど、頭の後ろに回された手が一層強く私を
引き寄せて、窒息しそうで、何も言えなかった。

その日を境に俊平と私の付き合いは激変した。
これでもかと言うほどの愛情表現が始まったのだ。
そしてあからさまに嫉妬をするようにまでなった。
それは大地や美佐子にまで。

後日、大地と美佐子から聞かされた話は私を驚嘆させるものだった。
それは中学を卒業して、私が初めて彼が出来たと喜んでいた頃。
中学の頃から俊平の私への想いに気づいていた2人は俊平に何度も尋ねたそうだ。

それでお前はいいのか――
と

はじめは白を切っていた俊平はこう言ったのだそうだ。

――俺は初めての思い出の人にはなりたくないんだ、最後の人になりたいんだ。――

途中俊平にも誰もいなかったわけではないのだが、大地と美佐子は私の状況を逐一俊平に話していたらしい。
あの偶然も、美佐子が俊平に電車に乗る時刻を教えたものでかなりの計画性があったのだと。
俊平にとったら、偶然の出会いを装うわけだから、それも頻繁に。
だから社宅のことは言えなかったと。
私の理想に、そう中学のあの時期に描いていた理想の男に近づけるよう頑張っていた事も。

「じゃあね。」
私は家の前で別れを告げる。
その後、ほんの一瞬唇を掠める。

俊平は何度も振り返り、私に家へ入るようにジェスチャーする。
これが最近の私達のやりとりだ。
いつしか思い切って聞いてみた。
どうして、そんなにあっさり帰っていたのかと。
すると、俊平は平然と言ってのけたのだ。
だって、帰りたくなくなるだろ
って。じゃあ今はって思うのだけど、それは――
あまりにも恥ずかしいので内緒って言う事で。
俊平に言わせると、
最後の恋人になれるように
贅沢な願い事は、私よりも彼の方にあったようだった。

本音（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます＾＾
ここまでは香也の呟きなのですが、次は俊平の短編です。そして美佐子と大地の呟きを1話完結で書いていこうかなと思っています。どんな風になるかはまだ未定です。もし良かったらお声を聞かせて頂けると、とーっても嬉しいです！

番外編　運命の日（前書き）

こちらまで来て頂いてありがとうございます
今回は俊平の呟きを短編で書いてあります。

番外編　運命の日

「とうとう腹を決めたってか、苦節１０年。お前の努力とやらを見物させてもらうとするか。」

「本当に長い協力だよ。これで香也が蜘蛛の巣から逃げ出せなくなるかと思うと……」

中学のいや、小学の頃からこいつらとはずっと一緒だった。
本当だったらここにもう一人。
１０年、１０年だぞ。
この俺の壮大な且つ緻密な計画は明日決行することになったんだ。
絶対、捕まえてやる。
ここまでの努力は無駄にしない。
今まで協力してくれたこいつらのためにもな。

グラスを傾けて、夜空を見上げた。
月も俺に味方になってくれているようだった。
見事な満月が都会の夜空にぽかりと浮かんでいた。

「どんだけ、腹黒なんだよ。俺、香也に同情してきたくなってきた。」
大地は殆ど呆れ顔だ。
だけど、こいつは一番分かってくれている。
俺が、どんなにこの時を待ちわびていたのかを。

「本当に、中学の頃はまさかここまで付き合わされるかとは思いもしなかったわよ。ストーカーの上を行くわね。」
美佐子もこんなことを言っているが、今までこいつにどんだけ世話

になったか分からない。明日だって。美佐子の協力なしではあいつの通勤時刻や電車に乗る位置までは知ることが出来なかったんだからな。

持つべきものは友人だ。

最後の確認を終えて、渋る友人達を明日の為にと退散させた。
明日は決行の日なのに、終電を逃してここに泊まられたのでは堪らない。
本当だったら、会社まで1駅のところに住んでいるのに、あいつに会う為に7つも駅を戻らなくてはいけないのだから。

中学の頃はあいつよりも背が低かった俺。
毎日牛乳飲んで、初めの頃は毎日、腹壊して。
放課後は地元のバスケのチームに入って。
泣く泣くあいつと別れた高校でもバスケは続けた。
その成果なのか、背は十分なまでに伸び続けた。
勉強も頑張った。
声変わりの遅かった俺は高校で劇的な変化を遂げたらしい。（美佐子談）
大地や美佐子と集まる事はあっても決して香也とは会わなかった。
それは、俺の決心が鈍ってしまうからだ。

あいつに初めての彼氏が出来たと聞いた時は本当は気が狂いそうだった。
あいつの唇を思い出し、その唇が誰かと合わせる事になるかと思うとマジで眠れなかった。
でも俺は、決めたのだ。
自分に納得するまでは絶対あいつに会わないと。

気を紛らわすために、女とも付き合った。
俺の容姿が気に入ったのか、声を掛けてくる女は山程いた。
その中でも、俺が選ぶのはいつだって、香也に似ている女だった。
初めてキスを覚えた相手は香也の唇に似ている奴だった。
何度も何度もキスをしたが一度も目をあけた事はなかった。
妄想ばかりが膨らんでいた。

女の身体を覚えたのもこの頃だ。
その相手は、あいつに足が似ている奴だった。

初めこそ快楽に溺れたもののそれは長続きすることもなく。
それは経験を重ねるだけの行為となっていった。
必ず訪れるだろういつの日か、あいつに幻滅されないように。

付き合えると決まったわけではない。会ってさえもいなかったのだから。
けれど、俺の未来には香也がいるそう思わずにはいられなかった。
いや、違うな。
彼女のいない未来なんて考える事が出来なかったんだ。

あいつが高校3年の頃、彼氏と、とうとう一線を越えたと聞いた時には相手を殺してしまうかもしれないとまで思った。
でもそこでも俺は我慢をした。
だってそうだろ、比べる男がいた方がいいに決まっているんだから。
俺だけしか知らない方がよっぽどいい。
だけど、それじゃ駄目なんだ。
あいつに選んでもらわなくてはいけないんだ。

俺が一番なのだと。

美佐子に頼んでいるからどうしようもないのだが、あいつの男遍歴は全て俺の耳に入ってくる事となる。
流され易いのだろうか、あいつの周りには男が寄ってくるのか、半年位の期間でまとわりつく男が変わっていた。
中には付き合っていない奴もいたらしいのだが。

あいつは短大へと進んだ後、地元からさほど遠くない中小企業に就職した。
学生の頃とは事情が変わってきた。
だってそうだろ、その頃のあいつの周りにいた奴らは聞くところ同年代の奴らばかり。
精神的にも金銭的にも将来のことまで考えるような付き合いに発展する可能性は低いからな。
美佐子もちゃんとフォローをしてくれたようで、迷っているあいつを引き止めてくれた過去があるくらいだ。
だけど社会人となるとそれも難しい。
なんせその頃まだ俺は大学生で、社会人になったあいつより立場が弱かったのだから。
俺より、大人で、金銭的にも余裕のある年上の奴がきたら。

この時期は俺の最悪な時期だった。
案の定、香也の前に一人の男が現れた。
おっさんばかりの中で、一人だけ輝く、若手のホープだったらしい。
３つ年上のその男に香也は恋をしてしまった。

今度は本気みたいだよ。

言葉少なに語ってくれた美佐子。

俺の我慢の限界を超えてしまうその時に事件は起こったらしい。

香也の恋する男は取引先の重役の娘との結婚が決まってしまったと言う事だった。
落ち込みまくった香也を美佐子は介抱したらしい。
危ないところだった。

だけどそれで事は収まらなかった。
そいつが、結婚するまでとの条件で香也と付き合いたいと言い出したというじゃないか。
結局、美佐子の反対を押し切って香也はそいつと付き合い始めてしまった。
先の見えない不毛な恋だ。

俺は拳を握り締め、休日の前の日は自棄酒を煽る日々が始まった。
あいつと一緒にいる香也を想って。
そんな俺を大地と美佐子はいつも心配してくれた。

そして、俺が社会人になる頃。
香也の不毛な恋は終止符を打つことになった。
とうとう、結婚してしてしまったと泣きながら話す香也を幾晩も慰め続けたと美佐子が言っていた。

今がチャンスじゃないの

美佐子の言葉に一瞬揺れてしまったのも事実だった。
だけどまだ、まだ駄目だ。
社会人になってまだ余裕の無い俺にはどうしたって、香也の所に行く事なんてできなかったのだから。

その頃になると、俺の携帯には香也の写メが一杯になっていた。
半分は美佐子と一緒に写ったものだったが。

携帯の留守電を聞かせて貰った事もある。
写メも声も中学の頃のあいつそのままだった。
ストーカーの気持ちが分かる気がする。
ってよりか、今の俺はりっぱなストーカーだな。

そして、就職後1年の本社研修を終え、2年の東北勤務となる。
この頃は俺は全く女遊ばなくなっていた。
もう直ぐ近づく、香也への想いが膨らみ過ぎてしまったからだ。

一方、香也の方もあの男との別れが後を引いたらしく男の影はさっぱりだったらしい。
そう思えば、あの男の存在も良かったのかもしれない。

もしあの男と付き合っていなかったとしたら。
俺と付き合った後にでもその男の事を思い出すかもしれない、それは綺麗な思い出のままに。付き合っていない今だって、考えただけでも、おかしくなりそうなのに。
隣にいる香也が、あいつに憧れを残したままだったら――ふらっと気持ちが揺れてしまうかもしれないからな。
勿論、行かせるつもりは毛頭ないが。
香也の中に男の存在が居座り続けることは堪えられない。
だから結果的にはこれでよかったんだと思い込む事にした。

そして、晴れて本社勤務となった俺。
引継ぎやら、何やらで準備に3ヶ月も経ってしまったんだ。
それも今日で御終いだ。
明日、決行する。
じわりじわりと糸を手繰り寄せるように。

もう逃がさないからな。
晩はあいつらと酒を飲んだにも関わらず、興奮しすぎて眠れなかった。

緊張の朝。
いつもより入念に仕度をした。
クローゼットの中から一番のスーツを手に取って、備え付けの鏡に自分の姿をうつした。
この日のために通い続けたジムもバカにしたものではない。
学生の頃と変わらぬ体型を維持できていたのだから。

大分早めに自宅を出た。
はやる気持ちを抑えながら駅へと向かった。

いつもとは反対方向の電車に乗り込んだ。
時間もまだ余裕がある。
一駅一駅近づいてくる目的地。
そこは俺の育った町でもある。
最近帰ってなかったよなと、実家の面々を思い出しているうちに目的地に着いた。

美佐子に教えて貰ったホームの端。
まだ香也はいなかった。
香也の立つ位置の死角に入る自動販売機の横でじっと待つ。
落着かない心臓。
背中に汗がつたう。

こつこつとリズム良く聞えるパンプスの音。
１０年ぶりに見る香也の姿だった。
少し色素の抜けた髪はカラーを入れることなくしても十分に綺麗だ

った。
肩より少し長めのストレート。
あの頃何度この髪に触れたいと思ったことか。
ホームの端に凛と立つ香也の肩に手を置いた。
久し振りに触れるきゃしゃな身体に全身が震えた。
スローモーションのようにゆっくりと香也が振り返った。
「よお、久し振り。」
緊張の一瞬。
しかし、香也は俺の顔を見つめてにっこりするとまた顔を前に向いてしまった。
って無視されたのか俺。
とは想いつつもさっきの顔が目に焼きつく。
零れんばかりの笑顔だった。
香也の周りに男が寄ってくるのが痛いほど分かってしまった。
ホームには電車の到着を告げるアナウンスが響き渡る。
もう一度声を掛けた。
「お前な、久し振りに会った同級生無視すんのかよ。香也ってそんな奴だったっけか？」
同級生という言葉につられたのか香也はまたこちらを向いた。
そして、その瞳で俺の顔をじっと見つめた。
香也の瞳に俺の顔が映っていた。
俺は耐え切れずに目をそらせて、また声を出す。
「もしかして、俺の事忘れちゃったって言うんじゃねえよな。香也ちゃんよぉ。」

それは照れ隠しだった。
そんな言葉を言いたかったんじゃないのに。
もっと格好よく決まるはずだったのに。
だけど今度は目をそらす事が出来なかった。

そして、香也から言葉が発せられた。

「もしかして、俊平君？」

っておい。何で疑問系なんだよ。
俺はどんなに遠くたってこの目にお前が映れば間違えないと言えるのに。
だけど、香也が俺の名前を呼んでくれたことに気を良くする。
まだこれが始まりだから。
この先、お前が呼ぶ男の名前は俺だけでいい。
そう願わずにはいられないほど、香也に狂っていた。

俺の願いはずっと前から只一つ。

香也の最後の男になる事だけだった。

番外編　運命の日（後書き）

黒い俊平は如何でしたでしょうか？
ここまでで一旦本編を区切らせて頂きます。
お読みくださりありがとうございました！

番外編　思いの果て１（前書き）

ここまでお読みくださりありがとうございます。
本編は少しおかせて頂いて本日は完全なるスピンオフ美佐子のとある１日です。楽しんで頂けたら嬉しいです。

番外編　思いの果て１

「次、モスコね」

空いたグラスを手で押しのけて、カウンターに頬をつけた。
自分でももう限界近いかなって分かってるけど、少しだけあともう少しだけ一緒にいたいって思ってしまう。

香也と俊平のことに、かこつけて、大地といつものこの店で待ち合わせをしたのが今から約３時間前。
お酒弱くなったかな、きっと違う、大地と一緒にいるからだろうな。
でもきっと、もう直ぐそれもおしまい。
肝心な香也と俊平が上手くいき始めたから。
ごめんね、香也あんた達が上手くいって欲しくないなんて考えてはないから……でもね。

頭の上で大きなため息が聞えた。
そろそろ大地の言葉も降ってくるだろう。
このまま、目を瞑ったら本当に寝れそうだ。

「美佐、お前飲みすぎ。そこら辺で止めとけって。」
そう言ってグラスを取り上げられた。

「だって、やっと解禁だよ。成人式で飲まなくてどうするのよ。お祝いでしょうが。」
大地からグラスを奪い返そうと手を伸ばすと、大地の手に触れた。
触れたなんてもんじゃない、ガシッと大地の手を包み込んだんだ。

頭上から大きなため息が聞えた。
もう、知らねえからな。――
そんな声と共に。

俊平は相変わらず、香也には会わないと成人式まで欠席する始末。
徹底してるっていえば聞えはいいけど、ただのアホではないのだろうかと心の角で思ったりすることもある。
今のご時世、出来ちゃった婚なるものもある訳だし。
香也がそうなる可能性だって。
でもそれが俊平なんだろうな。
それに協力し続ける私も……。
今さっきまで、隣の席には香也もいた。
香也は昔から私の気持ちに気がついている。
だから、さっきだって。
気を使ってくれたつもりなのだろうけれど、大地と2人きっりになるとどうしようもなくて、お酒に頼らなくてはやっていられなかった。

結局私は足が立たなくなって、つまり大地が支えてくれなければ立っていられない程、飲んでしまった。
正直、どんな会話をしたかは覚えていなかった。
くだらない話ばかりだったとは思うけれど。
でも一つだけはっきり覚えているのは、タクシーに乗っていた時、私の頭を撫でてくれた優しい手だった。

暖かいぬくもりと程よい揺れを感じた。
微かにくすぐるタバコの匂い。
そうこのタバコの匂いは……

うっすら目を開けると私の頬の下はグレーの布地に少し固めの太ももも！？
どうやらタクシーの中らしい。
いつの間にか本当に眠ってしまったようだ。
ここまで記憶がとんだのは久し振りというか、成人式以来かもしれない。

この大地の匂いに誘われて思わずほお擦りしてしまいたくなるけれど、そんな事したらどうなるか。ばれないように、動かないように首にぎゅっと力を入れてしまった。
何よりもこの状態が心地よくて、目的地までこのまま――。

「起きたんだろ。」

どうやらばれてしまったみたいだった。

「んっ」
顔を上げようとした私の頭に大地はそっと手を置いた。

「もう着くから。頭痛いだろ、そのままでもいいぞ。」
いつもの大地とは少し違う優しい声だった。
まるであの時のように。

「懐かしいな、前にもこんな事あったよな。ってお前覚えてないか。」
何気ない大地の一言。
それは独り言のようにも聞えた。

覚えてる、忘れられない。
そう言えたらどんなにかいいのだろう。

私は曖昧に笑う事しか出来なかった。

「あの時だって、今だって。お前なぁ人は寝ると重たいんだぞ。」
いたずらっ子のような顔して笑う大地。

「ありがとね。」
いつものように、言い返すことも無く素直に謝ってみた。
その時、顔に掛かった髪をはらう為に少し頭を動かした。

「お前、わざとやってるのか?動かすなって。やばいだろ俺の理性が。」
そういいながら私の髪をそっと撫でた。
この感触!

「何言ってるの、心にもない。」
そう言うのが精一杯で、苦しくなる胸のうちを悟られないように軽く笑った。

夢なら覚めないで欲しい、そう願わずにはいられなかった。
大地の膝枕は心地よくて、暖かくて。
とても幸せなひと時だ。
だけど、それも今だけの事。
あと数分でそれも終わってしまう。
もう2度とないだろうこの感触を、忘れないように覚えておこう。
そう思った。

本当にあっという間に自宅へ着いてしまった。
ショルダーバックから鍵を取り出すと、大地が慣れた手つきで鍵を差し込んだ。

そのまま、私の支えになるとリビングのソファまで付き添ってくれた。

「ちゃんと着替えてから寝ろよ。鍵は俺が掛けてドアのポケットに投げとくから。」
そう言ってクルリと背を向けられた。

コーヒーでも飲んでいく？
いつもの言葉は出せなかった。
もし大地がここに座ってしまったら最後、私はこの均衡を破ってしまうに違いなかったから。
友達？同士？そんな関係。

それ以下になんて、もう無理だから。
大地の帰り際思わず、シャツの裾を引っ張ってしまいたくなる衝動に駆られた。
少しだけ浮いてしまったその腕で顔を覆い、仮面をかぶった。

「大地ありがとうな。」
やけてしまった喉。自分でも驚く、低めの声がでた。

「美佐、一人で抱えきれなくなる前に、俺に連絡しろよ。勿論、香也と俊平の事じゃなくても大丈夫だからな。じゃあ、風邪引くなよ。」

「うん。」
私の返事を聞き、大地は玄関へと行ってしまった。

バタン、そしてカチャリ。
少し間があいてガチャっと音がした。

あいつが持つ合鍵は私の鍵じゃないんだよな。
大地は着替えてから寝ろと言ったけれど、私にはもうソファから立ち上がる気力は残っていなかった。

番外編　思いの果て１（後書き）

如何でしたでしょうか？
ここからは私信になるのですが、昨日とても嬉しいコメントがあったのですが、私から返信を送るとどうしてもエラーコメントとなってしまい返信が出来ない状態です。出来るようになりましたら直ぐに返信させていただきますので宜しくお願い致します。　こゆみ

番外編　思いの果て２（前書き）

お読みくださりありがとうございます。今日もスピンオフ、大地側からの話です。楽しんで頂けたら嬉しいです。

番外編　思いの果て2

「ちょっと、付き合ってよ。やってらんないわよ全くもう。」

そんな言葉でいつもの場所に呼び出された。
ここは俺らの溜まり場みたいなそんな場所。
俺と俊平とこいつ。
俊平の計画とやらに長い事付き合わされた。
いわばここは作戦本部みたいなもんだった。

念願かなって、俊平は香也と付き合いだした。
でもそれも作戦のうちなのか、天邪鬼なのかいつまでも香也にそっけない俊平。

香也からその愚痴を聞かされている、こいつのはけ口は俺に向くわけで。
一週間に一度の割合で呼び出されるようになった。
口では面倒くさいなんて言いながら、週末は携帯を離さずにいる俺をこいつは知らない。

だから、そんな無防備な顔するなって。
男として意識されていないのは重々承知。
それはいい事でもなんでもないんだが。

「次、モスコね。」

そう言うなり、カウンターにうつ伏せた。
何かあったのだろうか？
今日のピッチはいつもとは違っていた。

途中マスターに目配せして、薄めてもらっていたせいか、いつもの倍とまではいかないがグラスはどんどん空いていった。

随分とまあ。
ため息が出た。

さっきまでかろうじて空いていた瞼がしっかりと閉じたのを見計らって、俺の背広をかけてやった。

本当は、俺自身が……なんて。
客が落着いてきてマスターと暫しの歓談。
仕事の事や俊平の話、マスターは一つ一つの話しに相槌を打つ。
店内に流れるジャズのベースが小気味いい音を弾いた時、初めて話しをふられた。

「そろそろ、ご自分の出番じゃないのですか？」

マスターの目線は目の前にいるこいつ。
静かとは言えない寝息を立ててのん気に寝ている美佐子に向いていた。

「いいんですかね。正直このままでもいいのかななんて思い始めてきましたよ。俊平ほどの自信があればいいんですが。」

グラスを目線に持ち上げて、丸い氷を見つめる。
でもいつの間にか俺の目に映るのは濃厚な琥珀色の液体で。
それはまるで俺の心のように、氷のまわりをゆらゆらと揺れていた。

「幸せそうな顔と複雑そうな顔して寝てるなんて器用ですよね。」
意味ありげな笑みを残して、マスターは他の客の処にいってしまった。

カランという乾いた鐘の音と共に４人の客も入ってきた。
きっとマスターはもうここにはこないかもな。

ほんと、煩いっつうの。
途切れることのないジャズがいい具合でこいつの寝息を隠してくれるが、営業妨害になるかもな。
今はまだ俺達しかいないカウンター席。
もし、近くに客がいたら、雰囲気ぶち壊しだよ。

まだ起きないだろうこいつの隣で、ゆっくりと味わう芳醇な香りと苦味。
大人になりすぎたのかもな。

頃合を見て店を出た。
この時間ならまだタクシーが捕まるはずだ。

美佐はまだ酔いの真っ最中らしく、おぼつかない足でやっと歩いている感じ。
頭の中は覚醒されていない様子で、意味不明な言葉を突然言い出す始末。

ふと、数年前の成人式を思い出した。
あの時もこんな感じだったよなと。

タクシーの中に入ってもまだ美佐は起きる気配すらない。
初めは俺に寄りかかっていたのだが、タクシーが角を曲がった時に

ストンと俺の太ももに頭が落ちてきた。
さらさらとしたショートカットの薄茶の髪。
俺の一番敏感な場所近くにこいつの頭があるなんて、まるで理性を試されているようだ。
寝入っているのをいい事に髪をひと掬いしてみる。
指の間からさらりと髪が流れていった。

俺の出番か

さっきのマスターの言葉を思い出していた。
時期はとっくに過ぎてしまったような気がする。
友人を長くしすぎたんだ。
近くに居すぎたのかもしれない。
いくら友人とはいえ、俊平のことがなければ、こんなにも頻繁にこいつとも会うことは無かっただろう。
俊平に感謝するべきなのか、しないのか。
そんなことを考えていたら、美佐の身体が堅くなった。
身動き一つしないが、きっと目が覚めたのかもしれない。

「起きたのか。」
と俺の問いかけに

「うん」
と返事が返ってきた。

途端に頭を上げようとする美佐。
言葉よりも、そう反射的に、俺は美佐の頭に手を置いてしまった。

「もう着くから。頭痛いだろ、そのままでもいいぞ。」

何がそのままでいいぞだ。
本当は自分がそのままでいたいだけなのに。
「懐かしいな、前にもこんな事あったよな。ってお前覚えてないか。」
そうあの時もこんな感じ。
本当に覚えてないんだろうな。
フッと笑う横顔に見とれてしまった。照れ隠しで
「あの時だって、今だって。お前なぁ人は寝ると重たいんだぞ。」
そんなことを言ってみる。
美佐は俺の気持ちにはちっとも気がついていない、それもそのはず
俺は隠しているのだから。
気づかれたらこんな関係ではいられなくなるからな。
いつもだったら”重い”なんて事を言うと食って掛かかってくるにも関わらず、以外にも返ってきた言葉は
「ありがとう」
だった。
その時、顔にかかった髪を振り払おうと美佐が俺の太ももの上に乗せたまま、顔を左右に振った。
これに反応しなかった俺を褒めて欲しい。
そうはいうけれど、いつそうなってしまうかは時間の問題かもしれない。
まだ、はっきりと覚醒していない美佐の目は潤んでいるように見え

ていつもと違う雰囲気に思わず、本音が漏れてしまった。

「あんまり動かすなよ、俺の理性が……」

多分そんな事を言ったのだと思う。

俺の頭の中では、しきりに違う事を考えようなどと必死に抵抗していたものだから、良くは覚えてないのだが。

心にも無い事を

そんな美佐の言葉はしっかりと聞えた。

俺の心中を見せてやりたいよ、マジで。

俺の努力の賜物か、何とか切り抜けたこの状態。

美佐のアパートの前まで着いたのだが、美佐はさっきよりもフラフラだ。

本当だったら担いで行ったほうがいいくらいのゆっくりとした歩みで部屋の前に着いた。

美佐から鍵を受け取りドアを開けると、そのまま部屋のソファまで美佐を連れていった。

どさっと美佐がソファに身を沈めると、俺はそのまま背中を向けた。

いつもだったら、コーヒーを飲んでいきなよという美佐の言葉は聞えなかった。

これで良かったんだ。

もしこのまま、この部屋にいたら俺はきっと――。

「ちゃんと着替えてから寝ろよ。鍵は俺が掛けてドアのポケットに投げとくから。」

「大地ありがとな。」

よっぽど飲みすぎたのだろう、妙にかすれた声にグッときてしまう。

潤んだ瞳で俺を見る美佐に限界だった。
もうこれ以上いられない。

「美佐、一人で抱えきれなくなる前に、俺に連絡しろよ。勿論、香也と俊平の事じゃなくても大丈夫だからな。じゃあ、風邪引くなよ。」
いつもより大分オーバーペースの飲み方だった。
結局何があったは話してはくれなかったけれど。

「うん」
という美佐の返事の後、部屋を出て、かちゃりと鍵を掛けて、ビーズのストラップが付いた鍵を見つめた。

こいつを誰かに渡す日がくるのかもな。
恨めしい目で鍵を見て、ドアポケットにそれを落とした。

あいつのいない帰り道は妙に寂しくて。
今度は俊平に奢らせよう。
そう心に誓うのだった。

気の合う仲間（前書き）

今回はずーっと過去に遡って、黒くなる前の俊平、香也達が仲間になるきっかけです。

気の合う仲間

「もうーこうなったら勝負よ！放課後覚悟しときなさい！」

「あー望むところだね。」

木内美佐子と海原大地のこの言い合いが俺達の友情の始まりだった。

小学４年俺達は同じクラスになった。
当時から身体の大きかった大地と、はきはきと物を言う美佐子。
それに背も低く、あまり目立たない俺に、ちょっと大人しめの香也。
そんな俺達は夏休み前の席替えで近くになり、夏休みの宿題である
グループ発表のメンバーになったのだった。
そして、その宿題のテーマで揉めることになった。

虫の生態を調べたい大地と物の腐り方の違いを調べたい美佐子。
何処まで行っても平行線でとうとうケンカのようになってしまった。
まさに売り言葉に買い言葉だ。

俺と香也は傍観者として2人を眺めていた。
「そろそろ止めた方がいいかな？」
と心配そうな香也。
「大地だって、手を上げたりはしないよ。放っておけばそのうち収
まるんじゃない？」
との俺の言葉に

それもそうだねと香也は返してきた。
今はまだ3時間目。

放課後にはまだ時間がある、そう思っていたのに。

ついに放課後。
「海原、勝負よ。」
美佐子はやる気満々だった。
そして大地も
「お前こそ、逃げるなよ。」
大地もだった。

そして、行き着いた先は美佐子の家だ。
大地がぼそっと

まさか、でっかい兄ちゃんがいるとか言わないよな。

少しだけ不安そうな声をだした。
俺は何も言えなかった。

仕方なくついていくと、やはり玄関には大きいスニーカーが脱ぎ捨ててあった。
俺達が玄関先で上がるのを躊躇していると、部屋から美佐子の母さんがやってきた。

「いらっしゃい。さあさ、上がって。」
それは拍子抜けするような明るい声だった。
まさか、これから娘とこの男が決闘するなどとは思ってもいないようだ。

スリッパまで出して貰っては後には引けない。
気合を入れて美佐子の家に上がった。
そして、行き着く先はリビングだった。

隣り合わせのキッチンには美佐子の母さんがいる。
まさかここで、言い争いをするつもりじゃないだろうな。
そう思っていると、その張本人美佐子が

「あんた怖気づいたんじゃないでしょうね。」
と言い放った。

「そんな分けないだろ、それより勝負って何するんだよ。」
ここに来て大地が一番の疑問をぶつけた。
すると美佐子は
「あんたね、勝負って言ったら、格闘しかないでしょ。」
自信たっぷり、そしてバカにしたようなにやりという笑い。

まさか、ここでするのか？
いろいろな疑問が駆け巡ったが1分後それは杞憂に終わる。

美佐子が持ったのはゲームのコントローラー。
そして、画面にいっぱいに広がった某ゲーム会社の格闘ゲーム。

もしかして、これやるのか？

素っ頓狂な大地の声。

「まさか、あんた私と本気で決闘しようと思ったの？私があんたとやりあったって、勝てるわけないでしょ。さぁ、これ持って。」

その時の大地の間が抜けた顔が何とも言えなくて。
今思い出しても笑える。

そして、美佐子と大地の戦いが始まった。

日頃から、あの靴の持ち主である兄さんとしているせいか、何度やっても大地が勝つ事はなかった。
その間、俺と香也はおばさんの出してくれたおやつとジュースを腹に入れ、画面を見ていた。
何度対戦しても諦めない大地だったが、おばさんにストップ掛けられて終了になった。

納得いってない大地だったが勝負は勝負。
最後は負けを認め、しぶしぶながらも美佐子の意見に従う事になった。

香也はもう少し残ると言ったので、俺は大地と2人で帰ることに。
2人共無言で歩いた。

でも、俺の家に着く間際。

本当はどっちでも良かったんだけどな

とぽつりと呟いた。
これが、俺達の始まりだった。
グループ発表のためと言いながら、夏休みは毎日のように誰かの家を順に通う俺達。
美佐子の家になった時は必ず美佐子に決闘を申し込んでもいたのだが。
結果はいつも同じで、大地は肩を落として帰ることになる。

夏休み最後の日曜日。
それは大地の誕生日。

普段から物をねだった事の無い大地。

しかし、今回は違ったようで。
大地の母親は珍しく物をねだった大地に条件つきで買ってくれたそうだ。
嬉しそうに話す大地を覚えている。
そうあのゲーム機を。

そこからまた、飽くなき挑戦が始まったのだった。

その後、夏休みの宿題も無事に終わり、秋を迎える頃には席替えもしたのだったが、俺達は以外にも気があっていつもつるむことになった。
気が付いたら一緒にいるそんな感じ。

今思えば、俺達が他の奴らよりも思春期に入るのが遅かったからかもしれない。
男だ女だなんて考えなくて、仲間意識だったと思う。

それは中学に上がっても同じだった。
クラス替えを重ね、みなバラバラのクラスになっても、部活が違っても、ふと気が付くと一緒にいる。
それは、休み時間の廊下だったり昼休みの校庭だったり。

大地は相変わらずのムードメーカー、身体もでかく運動神経もまあそこそこ、美佐はいうと、こいつも中学に入ってから始めたバスケットのせいか、グンと背が伸びてすらりとした長い腕と足は他人をひきつけるものがあった。
おまけにあのさばさばとした姉御肌も変わらずで、男女問わずに人気があったようだ。

香也は……このときの香也はそんなに印象がなかった。
大地と美佐に挟まれて、まあよく笑う子だけれど、そんなとこだ。
でもそれが、ある出来事によって大きく覆される事となったんだ。
そう香也のこと全てにおいて。

気の合う仲間（後書き）

お前しか

俺の隣に香也がいる。

「本当に久し振りだよね。中学卒業してから1回も会わないなんて、もしかして私嫌われてる？とか思ったりしたことあったんだよ」

中学を卒業する時は同じだった目線が、今は俺が見下げるようで、はにかんだ笑みが俺の鼓動を早くする。

お前に嫌われることはあっても（って考えたくもないけれど）お前を嫌うなんてそんなことはありえないから。そう言いたいのをグッと堪えて

「そんなわけないだろ。タイミングじゃねえの？」

ぶっきら棒に答えることしか出来なかった。

徐々にだ。今まで待ったんだ、焦ることはない。

香也の会社は2つ先だ。

この満員電車では、ろくな話も出来ないかもしれないが……

一緒に乗ればそれは、香也が俺に密着するわけで。

とんでもなく久し振りに会ったというのに、こんなに美味しい特典が待っているなんて。

香也に会うことでいっぱいいっぱいだった俺には考え付かなかった。

産まれて初めて、満員電車に感謝した。

大丈夫か俺？

ブルブルと胸が震えた。

震えた？

それは、俺の携帯だった。

電車はもうホームに入ってきた。
見るとそれは会社からで、無視できねえよな。
軽く香也を制止し、電話に出た。
後で掛けなおす。
そういおうと思ったのに――。

「はい、徳山です」
そう言うと同時に、時間は待ってくれることなく、電車は扉を開いてしまった。

香也が”またね”と手を振って電車に乗っていくのを唖然と見ている俺。
おいって、そりゃあねえよ。
上手い具合に、香也の隣には女が乗っていったのだが、おいそこのおっさん！それ以上前に進むんじゃねえよ。
俺の頭はパニックだ。

「もしもし、徳山さん。聞いてますか？」
聞きたくないです。
そう言えたらどんなにいい事か。

「はい聞えます」

やっぱりというか、なんというかそれは大した用事でも何でもなくて。
出社してからでもいいだろっ。
思いっきり叫んでやろうかと思った。

電話を終え、電車を待つ間、暫しの回想。
確信した。
やっぱり俺には香也しかいないと。
自分でもどうかしてると思っている。
１０年も会わなかったのに、想いが変わらないなんて。
一目惚れでもない、同じクラスメートだったあいつを。

久し振りに触れた右手をぎゅっと握った。
これは始まりなんだ、この手であいつを掴むのだと。
そう考えていたら、気分も上昇してきた。
これくらいが良かったのかもしれない。
まだ次があるからな。

そうだ、あいつらにも報告入れとくか。
美佐子にはお礼だな。
あいつがいなかったら、この計画は上手くいかなかっただろうから
いつものように一言

ありがとな

と入れてみた。
何だか感謝が足りないような気がして、使ったことのない機能を出してみた。
美佐子のメールに良くあるそれを。
どれどれ？こう押すと、成る程案外簡単だ。
これはどうだ？これは？試しに感謝と喜びを表せそうな絵文字を入れてみる。

並んだ絵文字を見つめ、やっぱり俺には向いてないなと消去しようと親指をボタンに掛けると、タイミング悪くメールの着信がって。

送っちゃったよ。
メール送信中の文字が点滅していた。
中止のボタンを押す間もなく、新たな送信完了の文字。

やっちまった

諸悪の根源メールは大地からだった。

どうした？会えたか？

今、報告するところだったよ。
心の中で悪態を付きながらも

いろいろとありがとな。話せたよ

と送った。
勿論、絵文字は封印だ。
多分一生ないと思う。

ちゃんと会えたのだろうか。

時計を見上げた。
ただいまの時刻9時ジャスト。
とっくにその時間は過ぎているというのに……

携帯をデスクの上に置いてあるのだが、ピクリともしていない。
大地のところには連絡いったのだろうか？
つい何時間か前まで一緒だった彼ら。

それにしても、心配しているんだから連絡くらいよこせっていうの。
香也のことだ、一時期俊平に会ってないことを気に掛けてたくらいだから邪険にするとは思えないけれど。

あー気になる。
通勤時刻を教えたのは私だし、もしかして会えなかったとか！
何だか、香也に余計な事を言ってしまいそうで、ここ10日程連絡を取っていなかったのをちょっぴり後悔し始めてきた。
落着かない気持ちをどうにかしようと、朝、出社前に買って来た缶コーヒーに手を伸ばした。
プルタブを引き上げて、喉を潤した。
もうひとくち、口に含んだその時に。
バイブにしてあった携帯がブルブルと振るえ出した。
表示は

俊平

やっときたよ。
片手で缶コーヒー、もう一方の手で携帯を操作して画面を見つめた。
見た瞬間、ブハっとコーヒーを噴出してしまった。
隣の席の根本がどうした？といった顔でこちらを見ている。

慌てて、携帯を閉じて、なんでもないと笑って見せるもそれはあんまり効果がなくて。
根本は肩を揺らしながら一言

書類

と言った。
目の前の書類は私の噴出したコーヒーで点々とシミがついていた。
朝一でプリントアウトした書類が台無しだ。

それにしても……

俊平からのメールには

ありがとな

の文字。
それはいいんだよ、それは。
俊平の単語だけのメールには慣れている。
っていうよりそれしかみたことがない。
だけどだよ、今日は違った。

絵文字だよ、え・も・じ――

それも、ブイサインにニコニコ顔に極めつけはハートのマーク。

私は人格疑ったね。
同じ人物が打ったのかと。

するとまた不意に携帯が震えだした。
今度は大地からだった。
こいつもまた。

見たか？

単語だけ。
あーどうしてこうなのだろうね。
男って。
おはようとか、昨日はどうも、とかいれられないものだろうか？
あんまり凄いの貰ってもちょっとひいちゃうけど、少しくらいはね。

私は先に書類をどうにかしなくては、とプリントアウトをはじめた。
返信するんだよねこの単語に。
カタカタと動き出すプリンターを確認すると。

私も真似ようと携帯を取り出す。
俊平には

良かったね

大地には

見たよ

そんな返信をしてみた。
これで残るは香也かぁ

さてとどんな報告をしてくれるのか。
ワクワクしていたのだが。

その日、いつまで経っても香也からのメールは来なかった。
おいおい、久し振りに同級生に会ったんだぞ、それも仲良かったじゃないか。
と言いつつ、私も香也には俊平と会っているだなて一言も言ってないから、同じなのかぁ。

けれども、この腹黒君はとーっても気になるらしく。
3時間おきにメールを寄越すときたもんだ。

「何か言ってきたか？」

さっきの絵文字は見られなかった。

俊ちゃん、君の前途は厳しいかもよ。
今しがたもきた、あんたのこのメール。
さて、なんと返そうか……

取りあえず、見慣れたメルアドを選択し、アドバイスでも仰いでみますか。
夜9時を回ったその時刻。
私は大地にメールを送った。

ものの何秒かで、私の携帯が踊り出した。
それは、メールでなく着信音。

大地とあった。

随分とまあ早い返信だこと。

「もしもーし」

浮いた心を見透かされないように、おどけ気味に声を出した。

すると、携帯からこれまた冷めた低い声で

「何で俺に返信しないで、大地のとこにメールしてるんだよ」

俊平だった。

昨日までの威勢のよさや、朝の浮かれたメールは何処へやら。

不機嫌モード全開の俊平だった。

そして、その電話で私は、またもや腹黒男の片棒を強いられたのであった。

私は、机に飾ってある中学のスナップ写真に向かって

香也ごめん

と届くこともない謝罪をした。

スナップ写真の香也は私と俊平に挟まれて、満面の笑顔。

まるで、いいよって言ってるみたいだと都合の良い解釈。

大地もフォローしてねと、私の隣に写っている大地に向かって拝んでみた。

本当に何やってるんだろう私と思いつつ。

取りあえずメールでもしときますか。

今日もまた俊平に振り回された一日だった。

何か言ってきたか？

「徳山さん、おーい、徳山さんってば。」

目の前を何かがちらついて、我に返った。
総務課の森山がいた。

「ああ、何かあった？」
結構間際にある森山の顔におののきながら、たずねてみると。

「何かあったじゃないですよ、部長がお呼びです。第三会議室へとの事です。」
にっこりと笑う森山は俺の2歳年下だ。
俺は大学卒でこいつは短大卒だから同期になる。
初めの研修時から何かと世話を焼かれた、東北へ行っていた時はそれも無かったのだが、本社へ戻ってきてからは、更に口を出されるようになり少しだけ鬱陶しく思ったりしている。
はっきりとは聞いた事はないが、好意以上のものを持っているのは感じていた。

「ありがとうな。」
そう森山にいって席を立った。

廊下を歩きながら、ポケットから携帯を取り出した。
メールの着信2件。
大地と美佐子からだ。

大地からメールには

ちゃんと報告しろよ。後で電話くれ

と。

美佐子からは

良かったね

ってそれだけかよ。俺は浮かれ気分で打ったメールに後悔した。
いつもだったら、絵文字が入ったメールはそっけないもので。
そんなものなのかと一人ぶつぶつといてしまった。

メールかぁ。
香也にはまだアドレスを聞いていなかった。
それは今度会ったときにしよう。

さて次はどうするかな？
駅で偶然も捨てがたいが、なんかこう違うところでばったりていうのがいいんだが。

美佐子にリサーチさせとくか。
いまさっき見たそっけないメールに後で返信いれておこう。
そう思いながら、第三会議室の扉の前に立った。

コンコンと2回ノックした後、名前を名乗ると、部屋の中から返事が聞えた。

失礼します

そう言ってドアを開くと其処には満面の笑みを浮かべた小山部長。
この顔をする時は大抵いい話ではない。

先月は確か、取引先の女社長との打ち合わせならぬ、会食だった。
あの時のことを思い出して、引きつりそうな顔を堪えてみる。
多分微妙な笑みだったに違いない。

部長はありきたりな言葉をつらつらと重ね、中々本題に入ろうとしない。
こりゃまたろくでもない話に決定だな。
部長の言葉を右から左に受け流して、相槌を打った。

「さて、今週の土曜なんだが、君予定はあるかね。」
それは、ないと言えというオーラがありありだ。
でも俺には、人生をかけた計画が有るわけで。
実際、予定は立っていないのだが、頭の中での計画は出来つつあった。
直ぐには、答えることが出来ない俺を見かねて。

そうだな、若いのだからいろいろと予定もあるだろうからな。
とカラ笑い。

2人の無言が続いた。
申し訳ありませんが今週は――と俺が言葉を発したのと同時に部長の声が重なった。

いつなら暇か？

と。おいおい俺の予定に合わせるのかよ。
それじゃあ断れないじゃないか。
俺はしぶしぶ来週ならと返事をしていた。

部長は”そうか”と頷くと追って連絡するからと席を立った。

「部長、私は何をするのでしょうか？」
都合を聞かれただけでかえされたのでは納得がいかないもんだ。

すると部長は
「そうか、そうだったな。この前の江藤社長がいたくお前を気に入ってな。一緒にゴルフをしたいと言うのだよ。宜しく頼むな。先方にはお前の都合を聞いてくれと頼まれていたんだ。私は橋渡し役さ、向こうの都合さえあえば決まりだから、頼んだよ」

さあ、今日も一日頑張ってくれたまえ

くれたまえって。
俺、ゴルフなんてやったことがないぞ。
それにあの人苦手なんだよ。
この目の帰り際だって俺のケツをさあっと撫で上げたんだぜ。
思い出しただけでも全身に鳥肌が。
なんとしても逃げ出さなくては、休みの日、それも朝から一緒にいるだなんて恐怖でしかない。

「部長、私ゴルフをしたことはないのですが。」
そう言う俺に部長は笑って

「いいんだよ、君と一緒にいたいだけなのだから。そこそこで頼むよ、そこそこで。」

ナンだよ、そこそこって。
どうすりゃいいんだ。
しかし、なんて断ればいいんだ？仮にも相手は取引先の社長だし。

俺の頭が崩壊しそうだっていうのに、部長はデスクに戻って受話器を上げ始めた。
俺は仕方なくその部屋を出ることになった。

しかし、何で俺なんだ？

気分を変えて。
そういや、香也は俺と会ってどう思ったのだろう？
そんなことが気になった。
もしかしたら、美佐子に連絡とかしてないだろうか？
一度気になったら、どうしようもない。
初めが肝心だからな。

俺はここに来たときのように、ポケットから携帯を取り出すと、美佐子にメールを打った。

何か言ってたか？

と。誰がなんて書きはしない。勿論絵文字だって。
１５分後に返っていたメールには、

まだ、何もないよ！

と寂しいメール。
それはお昼を過ぎても気になって、また同じメールを送ってしまった。

返事は同じだった。
午後、出先の街角で信号待ちをした時も。
定時の鐘がなった時もそれは同じ返事で。

そんなものなのか？

暫しの残業をした後、大地に連絡を取った。
大地は朝のことが気になるらしく、２つ返事で誘いに乗ってきた。

いつもの店で。
性懲りも無く何度目かのメールを美佐子に送った後、５分後に大地の携帯がなった。
着信は美佐子だった。
大地は俺にその内容こそ見せてくれなかったのだが。
おいおい、美佐子俺に返事はくれないってか？
少々しつこ過ぎた感は否めないが、そりゃ無いんじゃねえの。

俺は大地の携帯を取り上げて、美佐子のナンバーを出す。
数回のコール後、のん気な美佐子の声が聞えた。

「もしもーし」
もしもしじゃねえつうの。

「何で、俺に返信しないで大地にメールしてるんだ」
俺の声がわかって携帯の向こうから

げっ

という声がした。
俺はここぞとばかりに、美佐子に協力を要請。

一種の脅迫みたいだが、それは置いておこう。

携帯を返すと大地は

お前って、悪魔みたいだな

と言われた。

悪魔だってナンだっていいさ。

あいつを捕まえられるんだったっら俺は何にでもなってやる。

ぬるくなったビールを一気に飲み干した。

念力

あれから、香也と言葉を交わして5日経った。
本当だったら、毎日でも会いに行きたいって思うところだが、大学生ならいざ知らず。
サラリーマンの辛いところだ。

今日は2度目の実行の日。
本社勤務になってまだ間もない俺が無理言って頼んだフレックスタイム。
通常の通勤だと香也の通勤時間には到底合わせることは出来ないからだ。

喜び勇んで向かったっていうのに、電車のアナウンスが流れても香也は現れなかった。
マジかよ、おい。
現実が受け入れられない。
どうしたのだろうか？
具合でも悪いのだろうか？
いろいろな妄想が頭を駆け巡る。

程なくしてホームに電車が到着し、仕方なく電車に乗り込んだ。
香也の姿は見えず仕舞い。
俺は何をやっているんだ。
今日は掛かってきても文句を言わないのに携帯も鳴る事も無くて。
朝からテンション上がりまくりだったにも関わらず、意味のない満員電車に揺られることになった俺って。
あの時もこんな感じだ。
一緒に電車に乗れるのは一体いつなんだよ。

香也の降りる駅を横目で睨みながら、また押し寄せる人の波に俺のテンションは下がりまくった。
それは会社に着いても、変わる事はなく。
予定を確認しようと、開いた手帳。
裏表紙には、あの頃の俺達。
俺の一番好きな写真だ。
その裏には、あのコピー。
何度も何度も読み返したその紙は、擦り切れる寸前。

そっと開いて、文字を追う。
何にでも一生懸命で、恋は2の次みたいな。

今までの俺はそうだったかもしれないが、香也に会ってしまってからは――
駄目そうだ。
だが、頑張らないとか。
パソコンを開いて、頭の中の香也を追い出すことに必死になった。

夕方、美佐子からメールがあった。
それは、今日の俺のテンションを一気に引き上げるものだった。

腹黒君、ご機嫌如何ですか？
今日はとびっきりの情報入手しました。
本日香也は、俊平の会社の近くのイベントに借り出されたそうです。
開場は6時までだそうなので、7時くらいには終わるんじゃないかとの事。
この前言ってた、偶然の出会いのチャンスじゃない？
ものスッゴイご褒美お待ちしています
美佐子

このはじめの腹黒君っていうのは余計だが。
段々胸が高鳴ってきたじゃねえか。
丁寧にイベント会場の地図まで添付してあるときたもんだ。
美佐子に感謝だ。
これはちょっと奮発しなくちゃだぞ。
思い当たる褒美が無いわけではないが……
それはまたそれ、今日の結果で決めるとしよう。
そうとなったら、片付けなくては。
7時まで後1時間半、でも6時までと言っていたから早めに出るのがいいだろう。

さっきまでのペースとは比べ物にならない効率のよさで仕事を終えた。
美佐子が教えてくれたその場所は、この界隈では誰もが知っている大きなホールで地図を見なくとも歩いていける距離の所だ。
ホールの出口が見渡せる歩道橋の影であいつを待つことにした。
きっと、駅に向かってくるはずだから、俺が動かなくても向こうからやってくるはず。
ホールの前に聳え立つ時計の針は6時45分を差していた。

関係者だろう人達がぱらぱらと出口から出てきた。
目を凝らしてみてみるが、まだあいつは出てこない。
段々と不安になってきた。
もしかしたら、早めに出てきてしまったのではないだろうか。
朝の件を思い出し、もしかしたら今日は会えない運命なのかもな。
マイナス思考になったもんだ。
これじゃいけないと頭を振った。

出口に一際大きな集団がやってきた。

一瞬で解ってしまうのは自分でも凄いなと思う。
それはでかい男に隠れるように少しだけ見えた髪の毛だった。
間違えるはずはないか。
歩きながらそのでかい男が後ろを向いて話すと、少しだけ開いた隙間から香也の顔が見えた。

俺の考えた通り、その集団はこちらを目指して歩いてきたのだが、途中その集団は二手に別れた。
一方はこちらにもう一方は……

っておい、香也は数人の奴らと俺の反対方向へ歩き出した。
駅より少しだけ外れた場所に向かって。
飲食店が多数並ぶ歓楽街だ。

飲みに行くのかよ。
まあそれも考え無かったわけではないのだが、実際、こうやって後ろ姿を見送る嵌めになるとは。食事だけだろうか？嫌、この時間だ。
あいつの周りには男もいたし酒が入るのは間違いないか。
遠巻きに見ているだけでも会話が弾んでいるのが解るほど、楽しそうな香也。
はぁー。ため息しか出てこなかった。
さてどうしたものか。
ここで、あいつを待つのは限界だあるだろう、それに電車で帰るとは限らない。
タクシーで帰るかもしれないしな。
かといって、着いていくのもどうなのか。
店に入ってから、偶然だなと話しかけることも出来るだろうが、他の男と楽しそうに酒を飲む香也のことなど見たくない……

待ち人は行ってしまうというのに、足が動かなかった。
どうする俺。
こっちに来いと念力でも送ってみますか。
馬鹿げたことだとは重々承知の上だ。
でも俺はそうすることしか出来なかったのだ

じっと香也の後ろ姿を眺めていたら（念力を送っていたらといった方がいいのか。）
仲間に背を向け、一人こちらのに歩いてくるじゃないか。
2，3度後ろを振り返り、手を振る香也。

やっぱり、今日は会える運命だったのかもしれない。

偶然？！

こっちに香也が歩いてくる。
それも一人でだ。
こんなにおいしい状況がやって来るなんて、さっきまでとはまるで違う展開に俺の頭は少々パニック気味だ。

ここで、突っ立てるのはおかしくないだろうか？
目の前にあるコンビにでも入った方が無難か？
頭の中をいろいろな考えが回っている。
そうしているうちにも、香也は段々近づいてきている。
どうするよ。
計画を立て、行動するのはいいのだが、こういきなりな展開に戸惑ってしまうのは頂けないだろう。

んっ今こっちを見たか？
慌てて一度顔を反らしてしまった。
ゆっくりと向きなおすと、やっぱりこっちを見ているようで。
少し歩くペースが早く見えるのは気のせいなのか？

今更、動ける距離でもなく。
香也の手がゆっくりと上がった。
手を振っている。
まさか。
後ろを振り返っても、さっきの同僚らしき奴らはいなかった。
香也が小走りでやってきた。

「俊平君。」
俺の名前を呼んでいる。

俺は今さっき気がついたとばかりに
「おう、香也だったのか。」
とそんな言葉しか出てこなかった。

「凄い。びっくりだよ、俊平君とこんなところで会えるなんて。」
ちょっとだけ息を弾ませてしゃべる香也。
ちょっとだけ前傾姿勢で、っておいその服、前が開きすぎてないか？
思わずいってしまった目。

「ビックリって、お前俺の会社直ぐ其処だから。」
気持ちを落着かせようと出る声は。いつもより少し低かった。
緊張すると声が低くなるらしい。
それは美佐子に言われたんだっけか。

「へえ。俊平君の会社ってこっちのほうだったんだ、私はそこのホールでイベントのお手伝いしてたんだよ。一日立ちっぱなしで、もう足がパンパンだよ。」

おどけながらそう話す香也。
擦り切れるほど見つめたあのノートのコピーが頭を過ぎる。

――優しい人よりちょっと冷たい人感じがする人がいいかな――
冷たい感じってどういうのだ？
優しい人っていうのら解るんだが。
取りあえず、んー。

「すっかりオバサンだな。」
こんなもんか？
すると香也は

「オバサンって何よ、同じ年でしょ。俊平君って会わないうちに何だか冷たくなったね。」
ぷくっと頬を膨らませてそう言った香也。

おおっ、正解だったか？
「そうかもな。」
思わず頬が緩みそうなのを堪えてみた。

「ふーん、それで、誰かと待ち合わせ？それとも、まだ仕事中だったりするの？」
香也の言葉に

「ああ。仕事」
そこまで言ったら

「そっか、仕事なんだ大変だね。頑張って、じゃあ私行くね。そのうち皆で会いたいね。」
って行ってしまった。

だから、”仕事は終わったって”いうつもりだったんだって。
何で遮るかな。
香也の後ろ姿は段々と小さくなって。

っていうか折角のチャンスだったのに、何の話をしたんだ俺は。
香也も香也だ。ちょっと位話をそてもいいもだと思うが。
でも、まあ良しとするか、偶然の出会いの2回目が終了なのだから。

俺の中では後5回。
それも2ヶ月掛けて後5回偶然の出会いを装うつもりでいる。

本当だったらもう少し時間を掛けてと思ったのだが、会ってしまうとそれは無理だと実感した。２ヶ月、それが俺の我慢が出来る限度だ。

最後のその日。
それは俺達にとって記念日となるはずなのだと信じて。

一方その頃

「もしもしー美佐子」

「もしもし、どうした香也？結局飲みに行かなかったんだ。」
よしよし、俊平待ってるんだもんね、他の奴と飲みに行かれたんじゃ私のせいじゃないけれど後で何言われるもんだか解りはしない。

「うん、さっき電話貰って、無性に美佐子と会いたくなったよ。今家でしょ？」

「う、うん家にはいるけど……」
っておい、俊平いないのか？折角人が引きとめてやったというのに！

「じゃあさ、今から電車に乗るところだから、後４，５０分位かな？駅で待ち合わせしようよ。」

「あ、そうだね……」
おいおい俊平はどうしたんだい？
まさか、こうなるとは誰が予想したのだろう。

「何だか、歯切れの悪い返事だね、そうそう今、偶然に俊平君に会

ったよ！何だか感じ悪って、確かに格好よくなったのは認めるけれど冷めた目で見られて、俊平君のイメージが薄れていくよ、冷たい男になっちゃって前の俊平君は何処行ったって思ったよ。この前も１０年振りに駅で会ってね。って言ったっけ？」
言ったけ？っけあんた言ってないから、そのお陰でえらい目にあったような気がする。
それより、俊平と会えたのにスルーかよ。
中々上手くいかないもんだ。

何か言われたら
格好良かったって言ってたよと伝えてあげよう。
感じ悪いってのは、内緒にしておくけれどね。

今日私が香也にあう事ばれませんように……
一人呟く美佐子だった。

偶然?!（後書き）

お読み下さりありがとうございます！
ここまで毎日更新してきたこのお話ですが、暫くお休みをさせて頂こうかと思います。
少しでも楽しかったと思ってもらえるように、続きを書ければと思います。
宜しくお願い致します！

逆襲

「えーっ知ってるも何も、うんよーく知ってます。」
久し振りに我が家に訪れた叔母さんは、女社長という肩書きがある。
私にとったら、母さんの妹で気のいいおばさんってのだけど。
年はいってるけど、若作りしてるんだよね。
きっと物凄く高い化粧品を使ってるに違いない。

そんな叔母さんから、馴染みの名前を聞いたのは今から数分前。
世の中偶然ってのがあるもんだね。

叔母さんの話しはこうだ。
そうそう3ヶ月前くらいにね、本社勤務になりましたって挨拶来たのよ。
ちょっとクールな顔立ちが良くて。
挨拶そこそこに世間話をしてたら、美佐ちゃんと同じ中学だって聞いて尚更興味持っちゃのよね。あっ私は美佐ちゃんの名前なんて出してないから安心してね。

ここまで聞いて、自分の息子と年のさほど変わらぬ男に興味を持つってと半ば感心した。

あーそんな顔しないの、私は美佐ちゃんの中学時代の話しを聞きたくて、でもいきなりじゃなんでしょ。一度食事に招待したのよ、そう接待みたいなものね。違った打ち合わせだったかな？
まあいいや。そしたら、彼、私に取って食われると思ったのか、妙に笑顔がぎこちなくて。
笑いを堪えるのに必死だったわよ。
あんまり可愛いから、帰り際にお尻を撫でちゃった。

なんですと！
あまりの衝撃に鈍引きだ。
俊平のお尻を撫でただって！
いつもは子憎たらしい俊平にちょっとばかし同情した。

で、お詫びを兼ねてというか、一緒にゴルフに行こうかと思って。
うんと高いコースとってあげるから。美佐ちゃんも行くでしょ？
とニコニコ顔だ。
叔母さん、お詫びじゃないでしょ、からかうのを面白がってるみたいだよ。

彼と美佐ちゃんと後、洋人連れてく？それとも美佐ちゃんのお友達がいい？

私がＯＫすると思ったのか、どんどん話しが進んでいく。
こうでなくちゃ社長は務まらないかもしれないけれど。

いやまて、今友達って言った？従兄弟の洋人のことは完全にすっ飛ばして。
私の頭に浮かんだのは２人。
でも香也はまだ早いか――

そうとなれば、あいつだよな。
休みの日に朝から一緒にいられるなんて、嬉しすぎることだけど。
妙に気にしてしまう私がいる。
それは、私が付き合っていた彼と別れてしまったからだろう。
大地のことを封印しようと付き合った彼。
彼がいなくなってしまってからは私の蓋は外されたまま。

これ以上好きにはなりたくないって思うのに。
ちょっとの不安より俊平に一泡吹かせたい気持ちが交差して、結局私は行くことにしてしまった。
気のいい返事を貰った叔母さんは嬉しそうに帰っていった。

ゴルフか、最近やってないから練習でもしようかな。
きっと負けず嫌いの大地のことだ。
気合入るだろうな、それも無料だし。

太っ腹な叔母さん、ついでに私にゴルフクラブ買ってはくれないだろうか？
一旦行くと決めたら、ずうずうしい考えがめぐるとは、私って。

今週の土曜日は打ちっぱなし決定だな。
さてと大地にでも連絡しときますか……

いつだって、大地に連絡する時は緊張する。
もしそこに彼女がいたら？
マイナスな考え、それは自分に彼がいたって思ってしまう事だった。
ある意味俊平が羨ましいよ。

携帯を睨みながらそう呟いた。

あーでもさ、でもよ、ちょっとウキウキしちゃうじゃない。
いつもは言いように言われている俊平に逆襲できるなんて！
きっとスッゴイ顔して来るに違いない。
ばれた後の仕打ちを考えると少しだけ怖いけれど。
だけど大地も来る……と思うし。
こんなチャンスは滅多にないからね。

一先ず大地に連絡だ。
改めて携帯を開いたのだった。

褒美

「お前のおばさんって凄いんだな。普通こんな所、これないぜ。」

叔母さんの運転手さん付きの車でここまで連れてきて貰った。
大理石の広がるエントランスの端っこに私と大地は突っ立っている。
大地の胸の前で前を向いているのだけれど、どうしようもなく背中が熱くなってきた。
ほんと、只立っているだけなのに。

如何にも庶民代表ですみたいな私達は、凄く浮いた存在に違いない。
周りには見た目に、如何にもみたいなゴージャスなご婦人方。
勿論その中に、叔母も混じっているのだけれど。

俊平がどんな顔して現れるかを見たくって待ち合わせ時間より1時間も早くに連れてきてもらった。
当然、俊平はまだ来ていないと思ったのに……

背中を向けていた後ろから当人はやってきたようだった。
叔母さんの
「あら、もう着いていたの？早かったのね。」
と後ろにハートマークがついていそうな声に振り返った。

そこには一瞬、目を見開いた後に、胡散臭そうな笑顔を見せる俊平がいた。
始めはこっそり叔母さんとの会話を覗き見するつもりだった私達は出鼻を挫じかれてしまったようだ。

「おはようございます。今日は誘って頂いてありがとうございます。

」
と叔母さんの目を見つめながら挨拶した後。
そうだよね、やっぱりそういう顔するよね。
差すような視線が向けられて。
「おはようございます。今日は宜しくお願い致します。」
と俊平スマイル、それも目が釣りあがって。
私と大地も慌ててお辞儀をした。
「「こちらこそ、お世話になります」」
なんて。
そんな私達の背中でクスクスと笑う声が。
「徳山君もそんな顔しないで、今日は思いっきり楽しみましょう。」
やけにテンションの高い叔母だった。
ふと耳元近くで
「いい根性してるじゃねえの。」
と低い声が聞えたのは気のせいじゃないらしい。
顔こそ笑っているけれど、面白くないってのは良く伝わってきました。
大地もグルなはずなのに、どうして私だけ？
一泡ふかす前に計画失敗。
とはいいつつも、
大地と一緒にバカ言い合って、背中叩いて、頭くしゃくしゃにされて。

楽しくないはずなんてない。
少しだけ、今日が終わった時の虚しさ。
次の約束がない、いつ会えるのかさえ分からない虚しさを考えてしまうけれど、それは損だよね。折角の楽しい時間は有効に使わなくちゃだよねと頭を切り替える。

それにしても昔から、何でもソツなくこなすこの2人。
俊平に限っては、これで初心者なの？みたいな腕前だった。
勿論大地には敵わなかったみたいだけど、後2，3回やったらいい勝負になりそうだよ。

本当に怖い奴だ。

ちょっぴり場違いチックな私達と違って、初心者俊平の決まっている事といったら。
叔母さんはもうずっと俊平のそばから離れないし、さっきはラウンドですれ違ったどこぞのセレブみたいなおばさま方の視線を釘付けにしている。

この容姿に身のこなし、それに策士ときたもんだ。
香也、凄い人に想われたもんだよ。
香也は気づいていないもんな、一歩踏み入れさせられた事。

でも、時折、本当に時折だけれど、大地と屈託無く笑う俊平はあの頃のままで。
それだけ、香也の理想に近づこうと努力しているのかもと思うと応援してあげたいと思ってしまう私だった。
中学の頃、ちょろっと書いた日記の内容を大事にコピーして持っているんだもんな。
いくら何でも、もうその理想とは違うよと何度言ってもちっとも耳

を傾けようとしないんだから、困ったものだよ。
香也のためにももう一度交換日記ならぬ、交換メールでもしなくちゃか？
と本気で考えたりしてみた。
思いっきりゴルフを楽しんだ後、軽い食事をして叔母さんと別れた。
私と大地は、当然とばかりに俊平の車に乗せられた。
「まさか、このまま帰れるとは思ってねえよな。」
今日聞いた中で一番低い声がはっきりと聞えました。
俊平の家へと連れてこられました。
そこで、いろいろな尋問を受けたわけでして。
取って置きの切り札にしようとしていた情報を話す羽目になってしまった。
それに対して、大地は全くお咎めなしで。
これって不公平じゃないの！
おまけに、大地は俊平から何かを受け取って喜んでるし。
私を何だと思っているのか。
大地は何かの券を貰ったようで。
俊平は私から、情報を仕入れたからなのかちょっぴりご機嫌。
じゃあ、駅まで送るからと解放されることになった。
そして、駅のホームに大地と2人。
2人共地元にいるから、ここからあと7つ先の駅まで一緒で。

もしかしたら、俊平は私の気持ちに気がついているのかもしれない。
あいつなりの、私へのご褒美のつもりなのだろうか？
せわしくなる心臓の音。
２人きりになると嫌でも意識してしまう。
もうこれ以上好きになりたくなんかないのに。
そんなに優しい顔しないでよ。
反則だって。

それは突然だった。
「お前、来月の最初の日曜日空いてる？さっき俊平からこれ貰ってさあ。お前好きだったよな。」

えっ。
私の顔の前でヒラヒラさせるそれは、大好きな演劇の公演チケット。
今年丁度２０周年を迎えるそのお祝い公演チケットは中々手に入らないものだった。

「行く行く行くーっ行きたーい」

もしかして、こっちが本当の褒美だったりして。

「じゃあ、決まりな。」
背中を向けてしまったから顔は見えなかった。

嬉しそうな声に聞えたのは気のせいだろうか？

俊平に感謝かな？
何だかいいように踊らされてるきもしなくはないのだけれど。

褒美（後書き）

すみません、何の事件もおこらずに……
次回は俊平の独白です。

毎月必ず

何度も腕時計を確認してしまう。
もう着いてもいい頃なのだが。

ゴルフの帰り、美佐子からまた一つ情報を仕入れた。
それは毎月5日に発売される雑誌を駅下のコンビニに寄って買って帰る習慣があることを。
それが今日である。
折角、上手く事を運び、直帰に持ち込めたというのに肝心の香也はまだ現れなかった。
美佐子の奴、”毎月必ずそこで買うから”って言っていたけれど必ずなんてあるのか？
昼を過ぎた辺りから、もうこの事しか頭に浮かばず、何度も何度もシュミレーションをしてしまった俺。
もし空振りだった時には、どうしてくれようか。
日頃散々世話になっているにも関わらず、良く考えると随分と勝手な言い分だが。

またホームに電車がやってきたようだ。
俺は雑誌のコーナーから一つ後ろの棚へ移動して、階段の先へと目を移す。
疎らだった人が段々と群れを成して押し寄せてきた。
高かろう低かろうの香也は埋もれてしまうかもしれないが、この雑踏の中でも俺は彼女を見つける自信がある。
それが、指先だろうと、髪の一部だろうと。

スーツ姿の親父に紛れて、一瞬だけ見えた肩口。

見つけた

香也の足は流れに合わせてこちらへと向かってくる。
俺はそしらぬ顔で店の奥にあるドリンクコーナーへと向かった。

「いらっしゃいませ」
やけに明るそうな店員の声と共に香也が店内に入ってきたのが分かった。
香也は美佐子の言ったとおりに他には見向きもせず、雑誌のコーナーの前に立った。

俺は目の前にあったビールを一缶取り出すとそのまま、香也の後ろに立った。
緊張の一瞬。
「今帰り？」
よう、でも久し振りとも言わず、たった一言だけそう告げた。

雑誌をペラペラと捲っていた指が止まり、首だけを捻ってこちらを向いた。
さらりと流れる髪に触れたいと思った。

「あれ、俊平君も帰りなの？っていうか今まで全然会わなかったのに、一回会うと偶然って続くものなんだね。」
なんてのん気なことを。

そんな訳ないだろ、俺がどれだけ努力してるのかお前に見せてやりたいくらいだよ。
気持ちの温度差にどうしようもない程の焦燥感が溢れ出しそうになるのを必死に堪えた。

運命かもな、なんてそう言えたらどんなにかいいだろう。
きっとこれが他の女だったらさらりと言えただろう。
でも、どうしたって例え冗談でも、こいつの口から否定的な言葉が出てくると思うと軽々しくは口に出来ない。

「だな」
俺は香也の隣に立って、どうでもいい週刊誌を手に取った。
パラパラと捲ってみるも別段見たい記事が有るわけでないし、パタリと閉じて棚に戻した。

香也は俺の事などまるで気にする様子もなく、またページを捲り始める。
どうせ買うのだから、家に帰ってから読めば良いものを。

俺は香也の耳元に口を近づけて
「一緒に帰ろうぜ。」
と囁いた。

前に何度か言われたことがある。
低い声で囁かれると、ゾクっとしちゃうよと。
勿論ベットの上でのことだが。
この声が香也に通用するとは限らない。

でも、思った以上の効果があったようだ。
後ろから見た香也は、一瞬身を縮ませて、耳がほんのりと赤くなっていた。
声に反応したのではなく、もしかして耳が弱いのか？

これは使えるかもな。
一人悦に浸っていると

一呼吸した香也は
「ちょっと待ってて」
と雑誌を手にレジへ向かった。

俺も香也の後を追い、香也の後ろから雑誌の上に手に合ったビールを置いた。
後ろを振り向き
「えっ」
と言ったが、店員は黙って俺のビールと香也の雑誌にピッとバーコードを当てた。

悪いな青年、悪いが香也は俺のものなんだ。
財布から札を取り出して店員に渡した。

さっきから、あの店員がチラチラと香也のことを見ていたのに気がついた。
本気で好きなわけではないだろうが、牽制しておいたほうが無難だろう。
顔を顰めた店員を見て心の中でガッツポーズを決め込んだ。

釣りを貰って、唖然とする香也の頭にポンと手を置き出口へと向かった。
店を出るなり香也は財布から５００円硬貨を出すと俺に手渡した。

「お釣りはいらないから」
って足りないんじゃねえの？
でもまあ、それも有りかと香也から手渡れた硬貨を無造作にポケットに入れた。

駅前の街路樹を2人並んで歩いた。
何度も何度も夢にまでみた光景。

なんてことない話をしながら歩く。
屈託無く笑う香也。
左上から見える香也の顔は上気しているように見えて……
控えめな淡いピンクの口紅が目に付いて離れない。
この唇を何人の男が塞いだのだろう。
考えたくも無いことを考えてしまう。

相当険しい顔をしていたのか
「俊平君？」
と立ち止まり俺の顔を見上げる香也。

頼むからそんな顔で見ないでくれ。
抱きしめてしまいそうな気持ちを必死で堪えて
「腹へって倒れそうなんだよ。」
と多少ぶっきら棒に言った。

「そっか、もうお腹減ってくるよね。」
住宅街に入って各家庭の換気扇からは食欲をそそる匂いがする。

でも俺が減っているのはそんなんじゃねえ。

香也、お前が食いたくて倒れそうなんだよ。

まだまだ時期ではない。
この先の長い一生を考えればほんのちょっとの我慢だ。
そう思えばこそ、香也の家の前に着いてもあっさりと別れられるというものだ。

帰り際、わざと香也の耳元で

またな

と囁いた。

香也は”何するのよ”と慌てて耳を押さえていたが。
肝心の顔が真っ赤になっていた。

最後に聞いた香也の声は

全くもう！

と言う叫び声だった。
いい感じかもしれない。
少しだけ手ごたえを感じた夜だった。

その後、１週間振りに帰った自分の家。
母親は驚いた顔をしていたが、
「暫く、こっちから会社行くから」
とそう告げた。

会社では結構大きなプロジェクトが一段落した。
美佐子の叔母さんとのパイプも出来た。
この時期を逃すとフレックスタイムの申請は暫く無理そうだから。

ポケットにある５００円を握り締めて、香也に思いを馳せた。

毎月必ず（後書き）

俊平の胸の内は如何でしたでしょうか？

満員電車

何だってあんなに近くに家があるっていうのに、帰ってくるかねぇ

母親がぶつぶつとそんなことを言いながら味噌汁を温めてくれている。

「母さんあんな事言っているけれど、兄貴が戻ってきて嬉しいんだよ。」

まだ眠そうに目をこすりながら、妹が耳打ちしてきた。

「そうか？」

小さな声で呟いた言葉はちゃんと妹の耳に入ったようで

「本当よ、ここんとこ朝食が早くなったにも関わらずグレードアップしているもん。」

そんな言葉が返ってきた。

そんなもんなのか。

母親の言った通り、会社の近くに家があるけれど、これからの人生に於いて今が一番の頑張り所だ。

かといって、毎日フレックスタイムが使えるわけでもなく、向こうの家に居る時よりも1時間は早く家を出なくてはいけない。

帰りも遅くなるし、飯を作る母親には悪いと思っていたが、妹の感じからして母親も口で言うほど嫌でもないのかも知れないな。

目の前にはあじの干物が程よい加減で並べられている。

会社に行く前に健康的な朝食にありつけたのはいつだったか、もう

大分前に別れた女の真っ黒焦げにしたシャケをふと思い出した。
香也はどうなのだろう。
あいつに朝食を作っていたのだろうか？
朝っぱらから嫌な想像をしてしまった。

「俊平、ほら早く食べないと遅刻するわよ。」
母親の一言で現実に戻る。

「頂きます」
と手を合わせて味噌汁を啜った。
一度考えてしまった考えは頭の中をちらついて。

”どう、美味しい？”
なんて、あのふわっとした笑みを浮かべて手テーブルに頬ずえつく香也を妄想してしまった。
マジ俺やばいって。

折角の朝食もあまり味わう事なく食べ終えて、身支度を整えて家をでた。
２つ目の角を曲がった先に香也の家がある。
こんな時間に出てくるはずがないと分かっていても、その先を見つめてしまった。

この時間になると、結構な人が駅へろ向かって歩いている。
流れに沿うように俺もその人々の中に埋もれていく。

初めてに近いここからの出勤。
辺りをみると、何人か見知った顔があったりした。
それはもう何年と顔をあわせたことがないやつらで、皆前を向いて

黙々と歩いているので俺には気がつかないだろう、まあ俺だって声を掛けたりなんかはしなけれどな。
そんなことを思っていたのに、一人だけ話しかける相手を見つけた。
昔かっら姿勢が良かったよな。
つい最近も一緒だったにも関わらずこうやって背中を見るのは随分と久し振りだ。
きっと高校生の時以来かもしれない、確かあの時もそんな事を思ったような気がする。いや、その話題を振ったのは大地だったのだろうか。
コンパスの違いであっという間にその背中に追いついた。

「よう」
そんな俺の挨拶にこいつはびくっと体を縮こませて。

「げっ」
といった。全くもって失礼な奴だ。

「げってなんだよ、お前くらいだよそんな事言う奴は。」
こいつも顔に出るタイプだ、思いっきりしまったって顔してやがる。
だけど、こんな感じだから今までつるんできたんだろうな。

ははははっと乾いた笑いの後
「はよ、それにしても本気でここから通うつもりなんだ。結構大変なんじゃない、帰りなんかは終電でしょ。」
言葉とは裏腹に悪戯な笑みを浮かべる美佐子。

「まあな。でもそれほど嫌じゃないんだ。それほどな。」
本当はむしろ嬉しいくらいだ。
香也が手に入るくらいなら、このくらいの事、なんてことないさ。

香也の顔を思い出すだけで、指の先まで暖かくなってきやがる。
思ったとおりの答えだったらしく。満足気に頷くと腕時計を確認してぎょっとした顔をした。
「やっば、今日、朝一の会議の準備しなくちゃで次の電車乗らないとまずいんだ、先にいくね。」
最後のほうはもう小走りになりながら、美佐子は駆けていった。
やっぱり走る姿も姿勢が良かった。
サイドを後ろで一つに纏めバレッタで止めた長い髪が左右に揺れて。
その姿は段々小さくなっていった。

大地はどうするのだろう？俺と違ってずっと近くで見続けていた想い人。
他の男と付き合ってる美佐子を遠目では切ない目で追って、近くでは優しく見守って。
そろそろ俺達もいい年だ。
美佐子が結婚したいとか言い出したら、動くのだろうか。
段々消えていった後姿を眺めながら、自分の心と少し重ねてそんなことを考えた。

普段は一駅しか乗らないのでさほど気にもならないのだが、さすがに何駅も乗ると満員電車の大変さを実感する嵌めになる。
俺の向かいには時代遅れだろうと思われるポマードを塗ったくったおっさん。
なまじっか背があるせいで、ほんと丁度俺の鼻のあたりに頭頂部がくるときた。

朝から拷問だ。
後ろを向こうにもぎゅうぎゅう詰めの車内では動くことも出来ずに必死でその臭いに堪えていた。全く何がいいのだろう？いくら年を

取ったってまた流行りだしたって絶対ポマードだけはつけないと心に誓った朝だった。

やっとの思いでポマードのおっさんから開放された。
ホームに降りて、思いっきり息を吸い込む。
やっと生きた心地がした。
ほっとしたのも束の間、今度は俺の背後から
「徳山さん」
と甘ったるい声、森山だ。
さっきの美佐子じゃないが、前を向いたままきっと俺は”げっ”と言う顔をしたに違いない。
顔を作りなおして、
「おはよう」
と振り返った。

森山は朝からテンションが高くて弾丸のように話し始めた。
何でもいくつか前の駅から同じ車内に俺がいたのが分かったらしい。

質問攻めにあった。
「どうして、この電車に乗ってたのですか？」
との質問に
「ちょっと実家から」
と答えてしまったのがいけなかったらしい。

今度は
”誰か具合が悪いんですか？お父様？お母様？それとも――。”
おいおい、両親を病気にするなっつうの。
それになんだ、そのお父様お母様って。

曖昧に答えた俺に。

じゃあ、明日から一緒に乗っちゃおうかな、この電車人に押しつぶされように必死で。徳山さんに守ってもらおうっと。

と勝手に自己完結したこいつに、背筋がゾクっとした。

明日から確実に一本早い電車に乗るぞと決定した瞬間だった。

後ろ髪

家での夕食の後、自分の部屋に戻ってきた。
ここで寝るのも一年に何度あるか分からない位だった。
大学から一人暮らしをした為、もうかれこれこの家を出てから6年、いや7年か？
だが、この部屋は少しも変わっていない、出ていく時も洋服といくつかの日常品だけだったから。まるで今もここで生活しているかのようだ。たまには掃除もしてくれているらしい、こうやって、何の連絡もせずとも帰ってきたってあまり目立ったほこりがないのはそういう事だろう。目を瞑り先ほどの香也の姿を思い描いた。後もう少し、あいつが俺の隣を歩くのはそう遠い未来ではないはずだ。そんな事を思っていったら、ふと遥か昔の記憶が蘇った。
この部屋にいるせいなのか、はっきりと鮮明な記憶だった。

それは、クラスメートの一言から始まった。

「徳山、先生が体育館の準備室に行って昼休み中に跳び箱用意しろって言ってたぞ。」

当時体育係りだった俺は何の疑いもなく、その場所に向かう事に。
もう昼休みは半分過ぎていた。
急いで行くと、半分開いた準備室の扉。
一瞬だけ、嫌な感じはしたのだけれど、俺はそのドアを開けてしまった。

そこには、数人のクラスメートがいた。

騙されたと気が付いたときは遅かった。周りを囲まれてしまったからだ。
逃げ出せるか？
幸いな事に老朽化したこの体育館の鍵は壊れている、隙をついて走れば。
そう考えている俺に

「お前さ、木内のなんなの？」
要するにこいつらは美佐のことを好きらしい。
昨日の放課後一緒に歩いていたのを見かけたという事だった。
其処には大地もいたというのに。
大地には手を出せないと解ってのことだろう。
いつも身体も小さく、軟弱そうな俺に矛先が向かってきたのだ。

「お前さ。男の癖にへらへらと笑って気持ちが悪いんだよ」

じりじりとにじり寄ってくるこいつらに身をかがめた。
周りを囲まれた輪が段々と小さくなってくる。

「ほれ、何とか言えよ。」
その時。ガラッと扉が開いた。

「俊平君。一人で大丈夫？」
そこに居たのは大地でもなく、美佐でもなく香也だった。
心の中で、どうせだったら大地や美佐の方がと思ってしまった俺。
でも香也はさっと周りを見渡して、手伝いにきたのではないだろうこいつらをギッと睨んだんだ。そして、俺の前に立ちはだかった。
その瞬間、半円を描くようにさらっと広がる香也の髪が俺の鼻先をかすった。
まるでスローモーションのように広がった香也の髪が俺の頭の中に

組み込まれたんだ。
こんな時にのん気なもんだが、それはとてもいい香りで。
「あんた達、卑怯じゃないの。一人に向かってこんな大勢で。最低だよ。」
それは今まで聞いたことのない大きな声で、この狭い準備室の中に響き渡った。
香也はそのまま、近くにあった棒を掴んで大きく振り被った。
「言っとくけど私強いよ。これでも剣道暦永いからね。」
そう言って俺を振り返るとニヤリと笑った。
誰だこいつは？俺の知っている香也ではなかった。
その時初めて、ドキュンと胸を打たれた気がした。
まだそれが何だかは解らなかったのだが。
香也の構えに怖気付いたのか、男達は悪態を付きながらも退散していった。
頭の上では授業準備のチャイムが鳴っていた。
始まり5分前を知らせるチャイムだった。
それからだ、俺が香也のことを目で追うようになったのは。
永い片思いの始まりだった。
それからまた少し時がたった中3のある日、昼休みの校庭。
鉄棒の周りで日向ぼっこをしている俺と大地の隣に、美佐と香也がやってきた。
あれからというもの、俺は香也を意識してしまって、もとのようには、と言っても元々そんなに会話はしなかったのだが、まともな会

話が出来なくなっていた。

「そういやさ、お前らまだあれ続いてるのかよ？」
大地があれと差すのはきっとあのノートだ。

「あれって、交換日記のこと？そりゃ続いてるよ、ねっ香也。」
そう言って視線を香也に向けると香也は

「うん、結構続いてる。美佐がこんなにちゃんと返してくるとは思わなかったからビックリしてるけど。」
最近の香也はけっこう毒吐きで、聞いてる俺らは、美佐の膨れた顔お構い無しで笑いだした。

何を書いているのか非常に気になるところだ。
でも盗み見るわけにもいかないし。そんなことを考えていたら唐突に大地が切り出した。

「俺もやりたい、お前もそう思うだろう？」
って俺に言ってるのか？まさか大地は俺と交換日記をしたいってか？？？

「何て顔してるんだよ。俺らも混ぜてって言ってるの。」
大地はそっぽを向きながらそう言った。

きょとんとした香也と俺。
そして
「いいよ。じゃあ、今のノートが終わったら回すよ。その代わりちゃんと回してよね。」

あまりにも、すんなりしすぎた美佐の言葉に俺も大地も黙ってしま

った。
一瞬呆けた後、心の中でガッツポーズをする自分がいた。
でかした大地と。

それから2週間後、本当に回ってきたノート。
自分が書き入れることよりも、あいつの書いたページが気になる。
ドキドキしながらページを捲ると、其処にはまだ大地しか書かれていなくて……。

そういや新しいノートになってからとか言ってたな。
何を書こうか考えものだ、俺は迷った挙句に妹のことを書いた。
妹の失敗談を。

そんなやりとりを続けたある日美佐が書いた日記に衝撃が走った。
そこには日記のテーマなるものが綴られていた。

どんな人が好き？

どんな人って、俺には一人しか思い浮かばなかった。
暫しノートとお見合い状態。

美佐子のページには、面白くて、優しくて……それは誰かを彷彿させるもので。
きっと本人には伝わらないだろうけど。
そして大地

好きになった人がタイプなんじゃねえの
と一言。

ページを捲る指にドキドキが最高潮だ。

香也は――

そこには美佐子と同じように、箇条書きで香也の理想が書かれてあった。

俺はすぐさまそのノートを手にコンビニへ向かった。

そして、硬貨を入れてそのページをコピーした。

そこに書かれていたのは、俺とまるで正反対のもの。

忘れないようにノートを抱え、香也の字が写ったその紙を大事に胸ポケットにしまった。

いつか、こうなれるように。

その晩、どう書けばいいのかじっとノートを見つめていたら、ふとあの日の香也を思い出した。あの体育館での威勢の言い香也を。

普段は煩すぎるあいつらの話しに耳を傾け、けらけらと笑う奴なのに数人の男の前に立ちはだかり、ひるむことなく向かっていく香也を。

それは誰かに……そうだ、マロンに似ているんだ。

マロンは、ばあちゃん家で飼っていた犬だ。

マロンはちっちゃくって、いつもばあちゃんの隣にチョコンと座って。

おとなしそうにも見えるけれど、結構やんちゃで大きな犬にも向かっていったり。

そっかマロンに似てるんだ。

俺はノートに書いたんだ。

それもでっかな字で。

犬みたいな奴。

って。伝わらないのは重々承知。

でも俺は何となく告白をしたような妙な気分になったのだった。

待ち時間

「徳山ーっ。明日の朝一、例の浅沼さんとこ宜しくな」
帰り際に課長が放ったその言葉。
内心、あの人話が長いんだよなぁ、なんてあんまり乗り気じゃなかったのだが。
「そうそう、最近お前、帰り遅くて大変そうだから、直行でいいぞ」
その一言に心が躍った。顔には出さないように
「了解しました」
なんて、返事をしたけれど、それってあれだろ。フレックス使わなくても朝、香也に会えるってことだろ。頭の中は一瞬で明日の朝の事でいっぱいになった。

明日こそは一緒の電車に。

気をつけていたはずなのに、数分後には堪え切れず顔に出ていたようで、珍しく残業している森山に
「何かいい事でもあったんですか？」
と突っ込まれてしまった。
「いや、別に」
口元を引き締めて、声のトーンを少し落とした。森山はそのことには触れなかったのだが
「そう言えば最近、徳山さん何時の電車に乗っているですか？駅に着いても見かけないんで気になっていたんですよ」
と書類を胸に抱え、上目づかいで誰にも聞こえないようにだろうか、小声で囁いた。
べったり塗られたピンクのグロスが目についた。そういうのが好きなやつもいるんだろうな、なんて人ごとのように考えた。
「いろいろな、仕事で早く出なくちゃいけないこともあるし、ホー

ムに着いた電車に乗るから早いとか、遅いとかあんまり気にしてないんだ、要は遅刻しなきゃいいんだから」
自分で思うのもなんだが、今日は饒舌だ。

「そうなんですか、じゃぁ、あのーもう帰りですよねぇ」
語尾を縮ませ、森山は何か言いたそうだったが

「悪い、俺この後、用があるから」
と言葉を遮って、鞄を手に取った。本当は用なんてないのだが、どうせろくな話じゃないだろう。森山の横を通りすぎる時、ピンクのグロスが窄んでいるのが目の端に写った。
香也だったら……。先程まで頭に描いていた香也の顔。
同じピンクでも、もっと柔らかな色。あの薄い唇に良く似合っていた。
その色。近いうちに俺が掠め取ってやるから、そんな欲望。
取り敢えず、明日だな。その事ばかりを考えて、帰りのラッシュも苦にならなかった。
あわよくば、明日の朝は酷いラッシュならいいのにと、そんな事まで考えていた。

良い年した大人が可笑しいとは思うが、あの混雑した電車の中、あいつにとっては不可抗力かもしれないが、俺の腕の中に香也がいるかと思うと中々寝付けなかった。
中学生かって。我ながらちょっと頂けないとは思うが、そう考えてしまうのだから仕方がないだろう。
翌朝、習慣とは恐ろしいもので、いつもと同じ時間に目が覚めた。
家族で朝食を囲むなんて、もうないだろうと思っていたのに、不思議なもんだ。
「何か、兄貴今日は機嫌がいいんじゃない？　もっといつもは無表情っぽいけど」

と突然、妹に突っ込まれた。当たっているだけに言い返せない。
こんな奴は無視だとばかりに、箸を進めた。すると
「ふーん」
と意味新な一言を。妹じゃなかったら、絶対付き合いたくないタイプだな。
そんな事をしている間にも時間は過ぎていく。
いつもだったら、出かける時間だ。朝食を食べ終えて食器を片付けると
「今日は直行だから、少ししたら出るから」
そう母親に告げた。
「だったら、コーヒーでも飲んでいけば？」
と最近買ったコーヒーメーカーを指さした母親。
「ああ」
と返事をすると、じゃあ2人前宜しくと。
要するに自分が飲みたかった訳だ。

コーヒーを落としている時間、スーツに着替えて身支度を整えた。
寝癖がついていないか、洗面台の鏡の前でチェックしていると
この前の帰り道、タバコの匂いが駄目なんだよね、と言った香也の言葉を思い出した。
激しく動揺し、その日のうちにタバコを止めた俺。
一人暮らしで手持無沙汰になり吸いだしたタバコ。止めるつもりなんて全く無かったはずなのに、香也の一言ですんなりと止めてしまった。どんだけ影響力があるもんだか。
鏡に映るスーツ姿にはっとした。タバコの匂いって……。
匂いが染みついていないか、思わずスーツの胸元を掴んで鼻を押し付け確認してしまった俺。
どうやら、大丈夫らしくほっとする。
鏡をもう一度見直すと、人影が。
「やっぱり怪しい」

とニヤリと笑う妹。しっかり見られてしまったらしい。
バツが悪いとはこの事だ、煩いとばかりに妹の頭をクシャクシャにしてやった。
後にした洗面所からは
「兄貴、最悪ーっ」
と叫ぶ声がした。
リビングに戻ると、
「全く、朝から何をしているんだか」
と呆れた母。でもその顔が少し嬉しそうに見えたのは気のせいではないと思う。
この前の朝、妹が言っていたっけ。母さん嬉しいんだよって。
案外そういうものなのかもな。
やりっぱなしだったコーヒーが懐かしいカップに注がれて置いてあった。母親だけあって俺の好みを熟知している。俺が入れるよりも絶妙な甘さとミルクの加減だった。

ゆっくりとコーヒーを味わって、時計を見上げた。
まだ時間は早いが、念には念を入れ家を出ることにした。
玄関にまだ、妹の靴が有ることが少し気にかかるところだが、さっきまで寝巻姿だったら大丈夫だろうと思いなおす。
そう言えば学生時代、家にやってくる香也にやたらと懐いていたっけ。香也に抱きつく妹に嫉妬した事もあったくらいだ。

家を出ると、気持ちが高ぶるせいか、自然と早足になっていた。
あの角を曲がると香也の家だ。
このまま香也を待って駅まで一緒に歩くべきか、先に駅に行きホームに立つ俺に気づかせるべきか。
迷った俺は壁に寄りかかり香也を待つことにした。一緒にいられる時間が多い方が良いに決まってるとばかりに。
自分が早めに来たのは解っているが、どうしたってもどかしい。

目の前を通りすぎる人を横目で見ながら、香也の出てくるだろう角を息を潜めて見つめていた。

嬉しい悲鳴

ちっ。

この角から、もう何人の人が俺の前を歩いていったのだろう。
手持無沙汰の俺は、足もとにあった小石をつま先で軽く弾いていたりしたのだが、
気がつけば、俺の周りの小石は無くなっていた。
知らない家の塀に寄りかかり待つ事３０分。
俺だけ時間の流れがゆっくりなんじゃないだろうか、なんて馬鹿な事を考えてしまう。

この前の事もある、もしかしてまた肩すかしを食うのだろうか。
昨日の今日なので美佐に探りを入れる間も無かった……
というかふいに沸いたこの幸運に浮かれて、そこまで考えつかなかったというのが正解なのだが、探りを入れておけば良かったかもしれないと、ここにきてマイナスな考えが浮かんできた。

携帯で時間を確認。
もう、香也がいつもの電車に乗るには出てこないと怪しい時間になる。
先程より頻繁に携帯を取り出す自分がいた。
何度目かに時間を確認した後

香也だ。

時間に追われているんだろう、結構な早足で俺の目の前を通り過ぎる。
まあ確かにそんな時間だ。

クリーム色のスーツを着た後ろ姿を見つめながら、一歩踏み出した。
香也には早足のつもりだろうが、コンパスの違いがあってか、さほど必死にならずとも横に並ぶ事ができた。

「よお」
本当はバクバクしている鼓動。言葉は軽いがうわずらないように慎重に声を出した。
「あっ俊平君おはよう。珍しいねこの時間」
こんな些細な言葉でさえ、香也の口から俺の名前が出たって言う事に嬉しいと思ってしまう、願わくは「君」が余計なのだが。
今にもニヤケそうな顔を抑え
「そうだな」
なんて答えていた。
香也の足は先程と同じように忙しなく動くのだが、俺にとってはあまり気になる程の速さではなくて、とういうかこれは普通の部類ではないだろうか。その事に気がついたのだろう。
前を向きながら
「何だか、私は必死に歩いているのに、俊平君は余裕ってどういう事」
なんて自分で言っておきながら、私の足が短いってことなのねと独り言を言っている香也。
すっとぼけた奴だ。
「そりゃ、こんだけ身長差があって香也と同じ足の長さだったら、俺泣くって」
ふわりとしたスカートの下からのぞく、無駄の肉がついていないスラリとした足。
短い事はないだろうと、その足に目がいった。
駅へと急ぎながらも、会話を重ねる香也と俺。
やっぱり待っていて正解だったなと一人ほくそ笑む。
香也の早足で駅の階段を上がる頃には、時間もかえって余裕が出来

たくらいだった。
「俊平君まで、付き合わなくても良かったのに」
なんて、つれない事を言い始めた香也に
「付き合ったわけじゃなくて、今くらいが俺の普通の速さなんだよ」
とどさくさにまぎれて、頭を小突いた。
柔らかな香也の髪の感触が俺の指にしっかりと残った。

出勤、通学時間の重なるこの時間、人も多いが電車も多い。
改札口を通る頃には1本前の電車が到着するアナウンスが構内に響いていた。
目的のホームに降り始めると、丁度電車の頭が甲高いブレーキ音を響かせながら入ってくるところだった。
いつも香也の定位置はここからだいぶ離れた自動販売機の向こう側。
階段から離れるそこは当然、この階段下よりも空いている。
俺の目の前の階段下は電車に乗り込もうとする人で溢れ返っている。
普段だったら勿論空いている方がいいのだが。一つ前の電車ということで、香也はゆっくりと階段を降りている。

「なぁ、お前がいつも電車待つ場所って、お前の会社のとこの駅でも階段から遠かったりするんだよな」
早く答えてくれ。この溢れる人を見て願望に火がつく。
「そうだね、だいたいここら辺が丁度いいけど、ここに乗る勇気はないでしょ」
横目でちらりと幾重にも重なる人を見る香也。
待っていたその返事を聞いたその時に、扉が開かれた。
全く興味がありませんといった顔で、いつもの場所に向かって歩く香也の肩を引きよせ無理やり列の後ろから、電車に飛び乗った。
香也の足がホームから離れると直ぐに、プシューという音と共に扉が閉められた。

「しゅ、俊平君」
思っていた以上の込み具合で香也の顔が俺の胸に隙間なく押し当てられた。
俺は香也をドアの隅に押し寄せて、香也を潰さないよう抱え込むように香也を囲む。
待ち望んだ香也との電車での時間。
「たった3駅だろ、俺がここに立っててやるから。早く行きたかったんだろ」
いつぞやと同じように香也の耳元でそう言ってやった。
そう、たったの3駅なんだ。
この朝の通勤時間、本数も多い電車で、1本早いものに乗れたとしても、会社に着く時間はそうは変わらないだろう。恩着せがましいその言い草に、我ながら呆れてしまう。
だけどな、香也。
俺はもうお前無しの世界は考えられないんだ。
だから、大人しく捕まってくれ。
ファンデーションが俺の服に着くのが心配らしく、必死で俺から顔を離そうとする香也の後頭部に手を添えた。
あんまり動いてくれるなよ、と。
幸いな事に向こう2駅は反対側のドアが開く。
あと3駅。
誰にも触れさせないからな。
小さくなる香也。
抱きしめたくなる衝動を抑える事がこんなにも辛いものなのか。
嬉しすぎる悲鳴だ。
ふってわいた幸運に誰もが俺の味方をしているように思えてしかたが無かった。

束の間の

「なーに目瞑ってるんだよ」
それは率直な疑問だった。
俺の腕の中にいるといっても過言ではない香也。
先程から目尻に皺を寄せながら目を閉じている。
斜め上から見る香也の顔はちょっと膨れたようなそんな顔。
もしかして、怒っているのか？
「と、特に意味は……」
どきまぎしながら答える香也にも思いっきり壺だ。
何より、この香也の頭から香る香りだけでも相当の、あれだ。
思いっきりカーブに差し掛かると後ろの乗客が俺の背中に押し寄せてくる。
俺が引っ張ってきてしまったからには、香也を押しつぶす事なんて出来るはずもなく、両腕にありったけの力を込めて、ドア横の手すりを握りこんだ。
香也も流れに逆らおうと必死になったようで、咄嗟に俺のスーツの裾を掴んだんだ。
何気ないその仕草。単に電車に揺られないようにしているだけなのに、俺の頭の中は勝手に脳内変換。
香也が俺を頼ってくれているようなそんな気持ちになった。
カーブの揺れが治まると慌てて、パッと手を離す香也。
俺のスーツの裾を引っ張って
「ごめん、皺になったかも」
と。
マジこれ最高かも。

しかし、幸せな時間はあっという間だ。

さっきまで、香也を待っているあの時間は俺だけゆっくりの時間が流れているって思っていたのに、今は真逆だ。俺だけ時間の流れが猛スピードで過ぎていっているんじゃないかと言うほど、あっけないものだった。
最後のブレーキ。
甲高いその音が鳴り終わると、無情にもドアが開いてしまう。
願う事なら、会社などすっ飛ばしてこのまま何処かに行ってしまいたい。
そう思うのは普通だろ？
なのに香也はというと、ドアが開く間際、電車に乗って初めて俺を見上げたと思ったら
「ありがとね」
そんな短い言葉を残して、ドアが開いた瞬間、一目散に駆けだしてしまった。
俺が何も言う間に……

今しがたまでいた香也の場所がぽっかりと開く。
守るものが無くなったその空間は、俺が腕を下ろしたと同時にあっという間に埋められていく。
階段下、丁度についたせいか、気がつくともう香也の姿は消えていた。
虚しさだけが残ってしまったような、そんな感じがした。
唯一、少しだけ香也の髪に触れた右手の感触。
あの柔らかな香也の髪。
その感触を手に残すように、ぎゅっと握りしめた。
虚しくなんかないだろ、良かったじゃないか。
自分に言い聞かせた。単純な俺は先程の香也の顔を思い浮かべて口角が上がる。
電車の窓に映る自分の顔。
怪しい奴だった。

そんな思いをしたせか、今日の商談はいつもよりスムーズに事が進んだ。
何でも向こうの人が言うのは俺の笑顔が怖かったらしい。
必要以上に笑わない俺が、ニコニコとしているので圧倒されてしまったと。
俺は無意識だったので、良く分からなかったが、結果オーライといったところだろう。

浅沼さんが書類に判を押す間にと総務の子だろう一人の事務員が俺の前にお茶を置いた。
必要以上にかがむと胸元のブラウスが大きく下に空き、下着が見える。
横目でちらりと俺の事を見るという事はきっと計算づくの事だろう。
一昔前ならきっと……
だけど今は不思議なもんで、いくら綺麗な子だからといってちっとも触手が動かない。
どきりともピクリともしない自分がいた。
必要以上の笑顔を見せて
「いただきます」
とお茶に手をつけた。
作法も何もあったもんじゃない。
熱過ぎだ。沸騰したての湯を入れたそのお茶。
これで、仕事が成り立っているのかと思う。
そっちの勉強より、こっちの勉強だろう。
俺はそのまま、目を伏せ、事務員が部屋から出て行くのを静かに待った。
何か俺から言葉を貰えると思ったのか、中々出て行く気配が感じられなかった。
そのうちに、浅沼さんが戻ってきた。

今お茶を入れに来ましたと言わんがばかりに部屋を出て行く事務員。
「結構、人気があるんですよ」
なんて、俺の機嫌が良いのでそんな事まで話しだす始末。
心の中では
二度と来たくねえよ
と悪態付いていた。
そんなそぶりを見せる事なく、勿論事務員の事など触れもせず、丁寧にお礼を言ってお辞儀をすると書類を受け取り、その会社を後にした。
思いのほかスムーズに行った商談、会社には予定より早目の昼前に着いてしまった。

「徳山さーん、お帰りなさい。上手くいったそうで、やっぱりさすがですね」
猫撫で声は森山だ。
ともすればさっきの事務員と変わらないようにも見えるが、さっきの奴と違うのはきちんと作法が身に着いている事だろう。うちの会社に来る客にもこいつの入れるお茶は評判だった。
ふと考える、香也はどうなのだろうかと。

「徳山さん？」
怪訝そうな顔をした森山の顔が目の前にあった。
この後に及んでまた妄想してしまった、森山が香也だったらいいのにと。
知らぬうちに頬が緩んでいたようで

「ね、行きましょうよ」
そういって俺の腕を取った森山。
近くの席の同僚に揶揄を入れられて、どうやら昼食に誘われていたらしい事に気がついた。

さっと手を引きはがし
「俺これ仕上げなくちゃだから」
とさっきの書類を振り上げた。
何だかぶつぶつと言っていた森山がいなくなって静かになったフロア。
いつの間にかなっていた昼休み。
周りを見渡すと、まばらに何人か残っているだけだった。

ちょっと気を抜くとすぐ香也の事を考えてしまう俺がいた。
もう限界だよなぁ。
抱きしめたい、こうきゅーっと。
あー、まただよ、この妄想。

本当はもっと時間を掛けたかったけど。
だけど、今日の香也を見ていて思ったんだ。
もしかして、俺の事意識してるんじゃないか？　って。

あと1回。
それとも次が勝負か？

そんな事ばかり考えてしまう俺だった。

焦り

焦りは禁物だ。
長い年月をかけてようやっとここまできたんだ。
じっくりいくのが俺じゃなかったのか？

夜になり時間が出来ると、もどかしくて仕方がなくっていく。
もうドツボだ。
多分、少しは意識をしてくれているような気はするんだ。
だけど、絶対じゃない。
確実に、そう確実じゃないといけないんだ。
香也をしっかり捕まえるには、あと何が足りないのだろう。
やはり時間なのだろうか？

いいようのない焦りに襲われる。
もしまた、あいつみたいな奴が現れでもしたら。
その時は取り返すまでなのだが……
思いっきり頭を振った。
こんな弱気でどうするんだよ。
これじゃ只のヘタレじゃねえか。

ふ～っと肩を大きく落とす。
今日何度ついたか分からないため息だった。

トントン
とノックされたドア。
「おう」
と返事をすると

「悪い兄貴、パソコン貸して。私のフリーズしちゃって大変なんだよ」
と朱里が缶ビールをプラプラさせながら顔を出した。
勿論、断る理由なんて何にもなくて、朱里から缶ビールを受け取った。

ノートパソコンを自分の部屋に持っていくと思いきや、朱里は俺の机に陣取ってパソコンを立ち上げ始めた。

「ここでやる気か？」
プルトップを引き上げながら、解りきった事を聞いてみると、それは当たり前でしょと言いたげに

「うん」
と即答。余計な事口走るなよ、なんて思ったそばから

「あーこれ懐かし～ってよか兄貴可愛いね。みんな若いね」
デスクマットに挟んであるあの頃の俺達。
可愛いはねぇだろ。とちょっとムッとしたその時。

「美佐ちゃんは、この頃から少し大人っぽかったよね、この前会ったのいつだっけ？　大地君ときたよね、2年くらい前だったっけ」
それはきっと独り言だろう、俺に話しかけているかもしれないが、俺はそれには答えなかった。

「あっ、香也ちゃん綺麗になったよね」

綺麗になってた？　会ってるのか？　ちょっと気になるじゃねえか。
これも独り言なのだろう。俺に答えは求めていないような感じもす

るが。こんな事ならさっきの独り言に返事しておけば良かったじゃねえか。香也のとこだけ俺が話掛けたんじゃ、結構鋭いとこついてくるこいつ、突っ込まれてからかわれそうだよな。
でも……聞いてしまえ。なるべく感心なさそうに

「会ったのか？」
枕元に置いてあった雑誌を捲りはじめながら言ってみた。

「会ったっていうか見かけただけ。」
何だか俺同様そっけない返事だ。
いつもは煩すぎる程だっていうのに、肝心な時はこれだよ。
横目でちらりと朱里を見ると、立ち上がったパソコンと格闘し始めたようで、すっかり朱里の中では写真の話は終わってしまったようだった。

何となく自分の部屋なのに居心地が悪いような。
俺は立ち上がり
「風呂入ってくるから」と。
出てきた頃にはきっと終わっているだろう、「うん」という聞いているんだか、いないんだかの返事を聞いてから俺は部屋を出た。

温めのシャワーを全身に浴びる。
鏡にうつる自分の身体。
今週はジムをさぼり気味なのだが、社宅からではありえない駅までの２０分の徒歩が思ったよりも運動効果があるようで、実家で飯を山ほど食っている割には良い感じだ。違うのか、外食よりも健康的なのか。母親は煮物中心の和食が多い。そういや父親も歳の割にはメタボとは無縁の身体してるからな。食事は重要なのだろう。
香也は料理とかするのだろうか？　いつしか前にも考えたっけ。確かその後……いらない妄想をした事を思い出した。温度調節のレバ

ーを引き下げ頭から冷水を浴びた。
やっぱ、弱ってるよ俺。
逃げるように部屋を出てしまって着替えを持ってこなかった事に気がつく。
仕方なく腰にタオルを巻いて部屋に戻ると
「兄貴ってばそんな格好で家の中うろつかないでよ」
と未だパソコンに向かっている朱里の冷たい声。
誰のせいだよ、しかもここは俺の部屋だっつうの。
「お前が自分の部屋にいればいい事だろ」
と言い捨てると
「そんな俺様だと嫌われるよ、誰かさんにね」
と意味深な一言。
思わず動揺してしまう俺がいた。
自分の部屋なのにと思いつつも、こいつの前で下着を履くのも躊躇って仕方なく着替えを持って朱里の部屋で着替える事にした。
久し振りに入った朱里の部屋。今年から就職した空間コーディネーターとやらの仕事柄か、モデルルームのような部屋になっていた。
センス良いかもな、決して朱里の前では言わないだろうけど。ライトグリーンを基調としたその部屋は、観葉植物や洒落たサイドボードがあったりと俺が知っている朱里の部屋の面影は全くなかった。
着替え終わっても自分の部屋に戻る気もしなくて、朱里のベットに寝っ転がった。俺はいつの間にか眠ってしまったようで
「兄貴、朝だよ」
という朱里の声で目が覚めた。
時計を見るともう結構な時間、朱里はどうやら徹夜をしたようで

「はい交代」
と促されてベットを明け渡すと横になった途端に目を閉じた朱里。
こいつも頑張ってるんだなと妙な気持ちに。自分だって歳をとっているっていうのに、何故か朱里は俺の中では学生のような感覚を持っていた。
薄いタオルケットを掛けてやってそっと部屋を出た。

そうしてまた一日の始まり。
満員電車に揺られ会社に着いて一息入れる間もなく外回りだ。
初秋の風は爽やかで出掛けるにはもってこいのこの季節。
学生だろう若い男女が方を並べて歩いているのを目で追った。
近いうちにきっと。
自然と歩く足に力が入った。

そんな時だった。微かに震える胸ポケット。
足を緩める事なく携帯を取り出すと美佐からだった。
それは、衝撃的な内容で。
文字を追っているうちに闊歩していたはずの足がピタリと止まってしまっていた。

重大ニュースと書かれた件名。
――例の彼、奥さんの会社に出向扱いだったけれど『昇進』それも幹部待遇で香也の会社に戻ってくるらしい。

端的に用件だけを告げたそのメール。
きっと香也からの情報だろう。
香也は？　どう思っているのだろう。
まさかまた……
それからの俺は仕事なんて手に着かなくて。
くそっ。もう少しだって言うのにどうしてこの時期に。

いつの間にか握り閉めていた拳。
焦っちゃ駄目だ。
こんな時こそ慎重に行かないと。
そう自分に言い聞かせるも、その動揺は収まらなくて。
最近、いい方向に向かっていたと思ったばかりなのに。
真っ暗な闇に真っ逆さまに落ちていくようなそんな感じがした。

沈んだ心

冷静になれ、落ち着くんだ。

自分に言い聞かせる。

取り敢えず、詳しい状況の確認からだ。

しかし、美佐の携帯に電話を掛けるも繋がる事は無かった。

イライラと不安は頂点で。

ガードレールに腰かけて、鳴らない携帯を見つめる事しか出来なかった。

彼女は2の次？　そんな事出来るはずねえだろ。

手帳に挟んだ香也の言葉を思い浮かべ唇を噛みしめた。

美佐からの電話を待つ事数時間。

食欲も全く沸かず、ただぼーっと時を過ごした。

幸い今日は商談もなく、顔出しメインだったのでそのまま仕事をさぼってしまった。

こんな事は初めてだ。

爽やかな風が湿り気を帯び、冷たくなってきたその時に待っていた電話が鳴った。

1コールもしないうちにボタンを押して耳に押し当てる。

「俊平……」

美佐の声は俺の名前を呼んで間が空いた。

「美佐、さっきのあれ」

俺が意を決し話掛けたというのに、美佐は大音量の声でそれを遮った。

「ごめん。違ってた」
頭の中で何度もリフレイン。
ごめん、違ってた。
って言う事は戻ってこないって言う事だよな。
生気のなかった俺に血が通い始めたかのように、全身が波打った。

「俊平聞いてる？」
返事の無かった俺に問いかけるような美佐の声。

「聞こえた」
だけど、肝心なのは香也の気持ちだ。
きっと動揺して美佐に掛けたのだろうからな。
まだ、気持ちが残っているという事なのか。
これには落胆する事しかなくて。

「香也がね、初めは動揺したって。嫌いで別れた訳じゃないからって」
聞きたくもない美佐の言葉。
でも。

「だけど、不思議と心が騒ぐような事は無かったって言ってたよ。それって……」
言葉を濁す美佐。
聞きたいような、聞きたくないような。
ほんの少しだけ、携帯を耳から離した。

「気にならなくなったって事だよね。もしかしたら、もしかするかもよ」
謎かけのようなその言葉。

その真意は香也のみぞ知るって事か。

「サンキュ、悪かったな、何度も電話して」

「こっちこそごめん。もっとはっきり解ってから知らせるべきだったと反省してる。俊平の想いを知ってるからこそね」

そうして、美佐から電話を終えた。
こんなに一日が長かった日は久々だった、こんな日はすべて香也絡みなのだが。
少しだけ気が晴れたとはいえ、何か引っかかるものが残ったのは確かだった。引っかかったなんて優しいもんじゃないのが本音なのだが。
暫く、そこから動けなかった、けれどいつまでもそこに居られるはずもなく。
重い足を動かして、朝出たままの会社へと戻った。

会社に戻ると、皆一様に
「お疲れさん」
と声を掛けられる。
何もしていなかった俺は後ろめたさでいっぱいだ。
せめて明日は今日の分まで頑張らなくては。

恋は2の次で勉強でも仕事でも頑張る人。

さっき否定したその言葉。
香也と再会するまではそうだったはずなのだが。
そんな甘いもんじゃないみたいだ。無理だと確信してしまうものの、少しでも近付かねばと気を引き締めた。

席に着くと今日の分を取り戻すかのように、パソコンにかじりついた。
香也の事を頭から追い出すように必死に。
気がつくとフロアには同期の矢島を残すだけで。
お互い顔を見合わせて、仕事を終えた。一緒にフロアを出て他愛の無い話をしながら駅まで歩き逆方向の電車に乗る矢島と別れた。気を抜くとどうしたって香也の事を思い出してしまう、矢島がいてくれて助かった。今の俺にはどうしたって、余計な事を考えてしまって。今日だけは、俺の心が落ち着くまでは、香也の事を封印しようそう思った。こんな事は初めてだった。

ホームに並んだ人の多さから想像は出来たのだが。
むさくるしいおっさんがうようよいる車内で身動き一つ取れない辛さ。
終電間近のこの電車には一杯ひっかけてきた人も大勢いるようで、車内の熱気に酒の匂いが入り混じりすこぶる気分が悪い。
車内には当然女の人もいるわけで、同情せざる負えない。
ほら、あの子なんて周りをでかい男に囲まれて顔を真っ赤にして下を向いているじゃないか。
災難だよな。もしこれが香也だとしたら――。想像しただけでも耐えられない。さっき香也の事をと思ったばかりなのに、もう香也の事を考えている自分がいた。俺も相当だな。

そのうちに電車が緩いカーブに差し掛かった。ふと先ほどの女に目を向けた。
本当に何気なく寄せた視線の先に、見てはいけないものを見てしまった。
後ろから、思いっきりその子の腹辺りを掴んでいる誰かの手を。
これって、あれだよな……。
周りの奴は気がつかないのだろうか？見て見ぬふりをしているのだ

ろうか。
どうするよ、俺。
当たり前だが、車内は静かで。座っている人は勿論、吊革につかまっている人さえも目を瞑っている人が少なく無い。
気がついてしまったからには無視をするのは後味が悪いよな。
暫し考える。そして辿り着いた答えは。
向こうが気づくか分からないがやるだけの事はやってみるか。
静かに呼吸を整えて、一度大きく息を吸った。
「よう。美佐子久し振りだな」
相手との距離は僅かだが、何人か間に入っている。気がつくか？
気づいてくれ。緊張の一瞬だ。
けれど、案の定彼女は下を向いたまま。
「おいって美佐子だろ、下向いてないで無視すんなよ」
少し大きくなった俺の声に幾人かが反応した。彼女も例外じゃない。
ゆっくりと顔をあげて俺と目があった。
俺が大きく頷くと、彼女は泣きそうな顔をしながらも俺の顔をじっと見つめた。
そうだ、それでいいんだ。
「やっと気がついたんだ」
俺の言葉に、戸惑いながら小さくうんと返事をする声が聞こえた。
緊張が解けふーっと軽く息を吐いた。
彼女を通り越して見える車外の景色。
電車がブレーキを掛け始め、家々を灯す明かりが線から点へ、そしてはっきりと見えるように。俺が声を掛けた辺りから、きっと手は離れたとは思うが一旦降りた方が無難だろう。
どれくらい先に住んでいるのか分からないが、このまま、この電車に乗り続けるよりはきっとましだと。車内から見えるホームではうんざりするようなくらいな人、人、人。
金曜の夜だから、特に多いのだろう。
電車が止まると、人をかき分け彼女の肩に手を置きそっとドアに促

した。
その時、小さな舌打ちが聞こえ、彼女は一瞬身を縮こませた。
手に力を込めて、ホームに降りる。
どうやら、痴漢もここまでは追ってこなかったらしい。
一先ず安心だ。
電車を見送ると、彼女は深々とお辞儀をして、消え入りそうな声でお礼を言った。
今日は歓送迎会だったらしい、この後あまり距離もないので今日はタクシーで帰ると言って早足で階段を駆け上がっていった。
大きく息を吐き、柄にもない自分の行動に思わず笑みが零れる。

咄嗟に美佐の名前を出してしまった、美佐には悪いが痴漢にあっている彼女を香也の名を呼ぶことが出来なかったからだ。
うんざりするような人の列の後ろに並ぶとふいに肩を叩かれた。

「あーやっぱり、俊平君だ」
それは紛れも無く香也であって。先程の緊張など比べ物にならないほど。身体が固まった。怖かったんだ香也に会うのが。一瞬意識が飛んだようで、ゆっくりと周りの景色が目に映ってきた。段々と焦点の戻ってきた俺、目に映るのは香也の姿、でも俺は香也を直視出来なくて。視線を香也から後ろにそらすと、そこにはヤレヤレと言う顔をした美佐が立っていた。

「俊平君ってばー、何とか言ったらどう？　清ましちゃってさ～」
拗ねたような香也の声。
反射的に視線を向けてしまった。
上気した顔。相当酒を呑んだのだろう。
ご機嫌な様子で俺に絡んでくる。
やっぱり、あいつの事……

あのメールさえ見なかったならば。
手放しで喜べない俺がいた。

タイミング

俺の心の中は複雑だ。
だってそうだろ、香也はきっと――
あいつの事を思って飲んでいたに違いないんだ。

「ねぇどうしてここに俊平君がいるの」
上目づかいでけらけらと笑いながら聞いてくる香也。
お前はどうしてそんなに酔っぱらっているんだ？
誰の事を考えてそこまで呑んだんだ？
喉元まで出てきたその言葉をのみ込んだ。
代わりに

「美佐、こいつどれくらい飲んだんだ？」
ニヤニヤ笑いながらみている美佐に問いかけた。

「ん～そんなには呑んでないと思うけれど。ワイン1本にカクテル3杯くらいかな？」
ってそれが『そんなには』の量なのかよ。

その時、目の端にさっきの彼女の姿が見えたような。
気がついた時には後ろ姿だったので核心はもてないが。
そんな事より今は香也だ。
この人込みの中電車に乗るのか？　こんな無防備な姿で？
この前の朝のラッシュとは訳が違う。

「なぁ、タクシーで帰ろうぜ」
俺の一言にまたニヤリと笑う美佐。
香也はというと

「なんで？　もう電車くるよ」
とキョトンとしている。

だから、そんなお前を乗せたくないんだよ。
それに、話をしたかったんだ。
この電車では話も何もないだろう。
俺は返事を聞く前に香也の腕を取って、ホームを歩き始めた。
未だ状況が解っていないようで、香也は何で～と連発だ。
美佐は呆れた顔をしながらも香也の反対側の腕を取って歩いている。

「勿論、俊平払いでしょ」
と勝ち誇ったように言いやがった。

改札を出てタクシー乗り場へと。
段々と香也の体重が掛ってきて、タクシーに乗り込んだ時には殆ど力も入ってなくて、崩れるようにシートに沈んでしまった。

「んで、説明してもらおうか？」
香也を挟んだ向こう側、美佐は
「やっぱ、そうなるよね」
と観念したようで、ぽつりぽつりと状況を話しだした。

昼頃、突然鳴りだした着信音。香也からの電話は珍しい事だったらしい。
何事かと思ってボタンを押すと
「あの人が帰ってくるみたい」
と告げられたと。そして夕方のあの時刻、それは噂に尾ひれがついたものだったらしいと連絡がきたと。

だから俺が聞きたいのはそんな話じゃねえから。

凄んでみせても相手は美佐だ。のらりくらりとかわしやがって。そのうちに香也の家の前に着いてしまった。
俊平君が突然行くより私が行った方がいいんじゃない？　この状況だし。
と言った美佐の言葉に従って、俺は複雑な気持ちで香也を抱きかかえた。
酔いが回っているらしくちっともおきる気配が感じられない。
ここからなら、美佐の家も俺の家も徒歩で行ける距離。俺は財布から万札を取り出すと、タクシーのおっちゃんに渡してくれと美佐に託した。おつりを貰って、タクシーを見送ると、香也の家のインターフォンを押す美佐。
程なくして香也の母親が出てきた、香也の母をみるのもあの頃以来だ。
「おばさん、ごめんね、香也飲みすぎちゃったみたいで」
そういって俺の腕の中にいる香也に一瞬目を馳せるとその視線は真直ぐ俺に向かってきた。
美佐が慌てて
「彼、偶然駅で会って一緒にタクシーに乗ってきたんだよ、覚えてない？」
そこまで言った美佐の言葉を遮った。
「お久しぶりです。おなじ中学だった、徳山です。夜分にすみません」
出来るだけ慎重に声を出した。第一印象が肝心だからな。っていっても第一印象なんて等の昔に終わっているんだが。
「あら、あの俊平君？　すっかり良い男の人になちゃって見違えちゃったわ。香也重たいでしょう、ごめんね」
にっこりとほほ笑んでくれたと思う。
その後、香也に小言を言って俺の手から香也が離れていった。
「じゃあ、また」

という美佐に車で送って行こうか？　と声を掛ける香也の母親。
「大丈夫です、徳山君もいるし、ねっ」
母親の腕の中で項垂れながらも、立っている香也を見つめていた俺。
突然振られて、ドキッとしたが「はい、送って行きますので、失礼しました」と頭を下げた。
そして、香也が家のドアの向こうに消えた。
しーんとした中に美佐と2人。無言のまま香也の家の前を後にした。
最初に切りだしたのは俺からだった。
「やっぱり、未練があったりするのか？」
情けない声だった。奪ってやると息巻いていたのがウソのようなそんな声。
静まりかえった住宅街の中俺の声は美佐に聞こえたに違いないのに、美佐からは返事がない。
「おいっ」しびれを切らして催促する声が大きくなった。
そして、言葉を選ぶように美佐が話出した。
「私もね、そう思った、だけどそれとはちょっと違うような気がする。気になったから今日誘ったのは私の方だよ。確かにテンション高めだったけれど、お店を出る時は普通だったと思う、私が思うに……」
美佐はそこで言葉を切った。最近これ多くねえか？
「思うに？」
そう問いただしたにも関わらず。
「香也は、他に気になる人がいるんじゃないかと」
ちらりと俺の顔を伺う美佐。またしても爆弾発言じゃないか。
「それで」
本当は、ビビりまくっている俺。そんな俺を見透かしたようにこいつは
「俊平さ、周りから固めるのもいいけれど、駆け引きばかりじゃ駄目だと思う。ヒントはあげたはずだよ。私は。タイミングって重要だと思う。そんだけ、じゃあね」

気がつけばそこは美佐の家の前で。懐かしい俺達の通学路だった。
「おい」
という俺の叫びも虚しく、美佐は逃げるようにドアを開けてしまった。
一人だけになった、帰り道。
美佐の言葉を思い返す。ヒント？　それはどの言葉だ。考えながら歩く先には俺達の中学があって。
毎日見上げていた大銀杏の木が、あの頃と変わらずそこにそびえ立っていた。
目を瞑ると鮮明に思い出せる。
屈託なく笑う香也の顔。

弱気になんかなってんじゃねえよ

あの頃の俺がそう言っているような、そんな気がした。

のみ過ぎたのは？

「美佐ーあの人帰ってくるみたい」

昼過ぎに珍しく掛ってきた香也からの電話。
ちょっとだけ嫌な予感はしていたんだ。
案の定、香也の言葉は衝撃的で。
言葉の端から動揺しているらしい香也の姿が目に浮かんだ。
社内の廊下の片隅で話している上司の会話を聞いた人がいるらしい。
そんな話だった。
「俊平と香也、良い感じらしいぜ」と大地から聞いたのはつい先日の事だった。
この話、俊平に知らせた方がいいんじゃないだろうか？
しっかりしているように見えて結構流され易いからな、香也は。
あの時だって、泣いて泣いてふっ切ったって言っても、あれから香也が誰かと付き合ったって言う話は聞いた事がないだけに、引きずっているのだろうなとは思っていたから。
俊平の努力を知っているだけに、このまま知らせずにいるのは躊躇われたんだ。
それでもどうしようかと悩んだ末に私は俊平にメールを送った。
用件だけを短く。
そのあと、クライアントとの話し合いが入っていた私。直ぐに掛ってくる解っていたけれど、携帯をマナーモードに切り替えて、デスクの引き出しにそっとしまった。

話し合いは平行線を辿り、話は長引くばかり。もういいじゃん！
と言ってしまいそうになるのをぐっと堪えて、上司の言葉に相槌を打ってにっこりと笑っている自分がいた。
話し合いの途中3度席を立った。それはお茶くみ。

今回はサポートとばかりに同席している私は、いわゆる雑用係的な仕事な訳で。
資料をまとめるのが苦手な上司に付きあって、話の流れを覚えるのが今日の私の一番の仕事だった。
本当は根本の仕事だったにも関わらず逃げやがって。今日は、机にしがみついていたかったのに。

そして、４度目のお茶を煎れに、給湯室へ。予め７５度にセットしてあるポットから湯を注ぎ片手にお盆をのせて、ドアを叩いた。
するとどうだろう、さっきまでのムードは何処へやら、和やかな雰囲気で握手をしている皆さんが。自然と私の顔も朗らかに、やっと解放されるとほっとした。
その後暫しの歓談の後、クライアントを見送って、資料片手に席についた。
どっと疲れが押し寄せる。そして、恐怖の携帯チェック。開かずとも解ってしまう幾通かのメールと着信。
ゆっくり広げた携帯には、ちょっと身も凍るほどの着信が……
まずは香也からだな。
そこにはあっけない文字。
「ごめん、噂話だった」本当に噂で終わるのか？　そんな考えが頭を過る。
すぐさま履歴を引っ張り出して、電話を掛けた。ジャスト５時。今ならきっと大丈夫だろう。
「もしもし？　大丈夫だった？」
そうして、簡単にさっきの話のあらましを聞くと、今晩の香也を確保する事に成功した。じっくり聞かせて貰いますからねと。
そして、次は問題児だ。
ずっと待っていたのだろう、掛けた途端に繋がる電話。
これからなんて言われるか、恐怖バリバリだったけれど、要件を告げると俊平はやけにあっさりとしていて、間違った情報を流しやが

ってと罵倒が飛んでくる事を予想していた私は拍子抜けに。きっと俊平は随分と堪えたのだろう、全て私のせいだとは思わないけれど言われた方が気が楽だったかもなんて思ってしまった。
電話を切ると待ってましたとばかりに、先程の上司が寄ってきた。資料の催促だ。
今日までは勘弁してほしいとなんとか明日の午後一までの約束を取りるけた。
遅くまでは出来ないけれど、少しは先に進めておくかと、パソコンに向かう。
香也も今日は残業だと言っていたから丁度いい、待ち合わせを香也の駅前の洒落た居酒屋に決定。時間はあと1時間半、電車で1駅まだ余裕だなと、指を動かした。
全てを終えて、待ち合わせの店へ、香也はもう席についていて、携帯をいじりながらお通しをつまんでいた。見た感じ、普段と変わらなそうに見える香也にほっと息をついた。
洋風と和風の中間みたいなこのお店、日本酒もあれば、ワインもあって食べ物の種類も豊富だったり、ちょっとリーズナブルとは言えないまでも、そこそこの値段で楽しめるこの店は週末とあって、ほぼ満席だった。
前置き無しに、香也の気持ちを聞いてみた。
にこやかに話す香也はあんまり気持ちが揺れなかったというじゃないか。これには私が驚きだった。初めこそちょっと動揺したけれど、結婚しちゃったしね。そんな事で会社にこれないわけないじゃないと一笑した香也。その顔は本当に無理をしている様子もなくて。

「もしかして、気になる人でもいるんでしょ」
と冗談半分で言ってみると、香也の顔はさっきの清まし顔は何処へやら、急に目が泳ぎだした。ってやばいじゃん俊平。こっちのほうがピンチかもよ。と聞いた私が動揺してしまいそうだった。
「どんな人」店のメニュー表を広げながら、そっけなく聞いている

と。
「ん～まだ気になるって言うか。ちょっとだけだよ」と頬を染める。
まるで中学生のようだ。
そこでその話は一旦終了。あんまり聞きすぎると返って口をつぐんでしまうのは良く解っている。学生の頃は、少しづつ話を聞きだしたりしたのだけど、今はこうやってお酒も呑めるからね。これは重宝する武器だ。お酒に弱くは無い香也だけど、ゆっくり飲めば自分から話しだしてくれるのが今までの香也だったりするから、今日もこの手でいこう。何だか俊平みたいだな私。なんて心の中で思いながら、乾杯の後1本のワインを注文した。
それがどう？　今日の香也は随分とまあガードが固いったらない。ワインじゃ効かず、空になってしまったよ、付き合っているのが大変かも。だけどこれじゃ駄目だとカクテルに変更。私は軽めな”ピーチフィズ”を。香也にはあくどいなと思いつつも甘いながらもちょっときつめな”ガルフストリーム”を注文してみたり。そんな私の苦労の甲斐あって、段々と香也は語り始めた。
初めは声にドキッとしたと。
それから冷たく感じて嫌な奴になたもんだと思ったり。話す言葉は単語ばかりで、何だか会話もはずまないんだけど、自分の気がつかない処で気にかけてくれている事に気がついただとか、そんな事を。

ねぇそれって俊平の事だよね

喉まで出かかった言葉を呑みこんだ。
きっと香也もまだ自分で気がついていないんだ。本当の気持ちを。
だけど、顔を百面相しながら話す香也はとっても良い顔していて。
目的を達成した私は心おきなくお酒を楽しめた。
香也は最後まで名前を明かさなかった、きっと照れくさいのだろう。
私も知らない振りをきめこんだのだった。

気がつくともう終電間近。慌てて会計を済ませ駅へと向かった。
香也はご機嫌で、この後美佐の部屋で呑みなおしだーなんて。
確かに酔っぱらってはいたもののその時は足取りもしっかりしていたし、呂律だって回っていたのに。
階段を下りて、正面に見えたのはびっくりする光景で。
そこには、まさしく時の人、俊平が女の子を目の前にホームにいるではないか。
そっと香也をみると、やっぱ目に入っちゃったよね……
すると、女の子は勢いよく階段を駆け上がってきた。
ちらっと見えたその表情は何だか嬉しそう?！　もしやナンパか？
香也は？　これがお酒の力ってやつだろうか、真直ぐその足は俊平の元へ。
こりゃ確定だね。
その後の香也は自暴自棄？　一気に酔いが回ったみたいで見ているこっちが”あぁあ”って感じだ。相変わらず俊平の視線は鋭いし。
だけどこれは私の口から言う事じゃない。ここまで頑張ってきたんだ、最後まで頑張ってみるべきだ。あと少し先まできた俊平の願い。
意地悪かもしれないけれど私は俊平にパスを出す事はしなかった。
頑張って。心の中ではそうエールを送ったけれどね。
本当は大地に相談しようと思ったけれど、あいつ俊平に甘過ぎるからなぁ。
何度も携帯を開けたり、閉めたり。ひとしきり悩んだ末。
やっぱりこれでいいんだと、携帯を封印した。

決行の日

「タイミングかぁ」

美佐の言葉が胸をついた。
確かにそうだ。
ここまで何年もの時間を積み上げてきた俺だが、香也はそんな事解っていないのだから。
焦っているのは俺一人って事だよな。
何年もの時間を掛けてここまで漕ぎつけたんだ。
ちょっとしたタイミングで歯車が狂ってたまるもんか。

絶対香也をこの手に

あれから１０日。
あの日以来の、否それ以上の緊張が襲ってくる。
上手い具合に時間がとれるなんて。
美佐がいうこれがタイミングってやつだろう。

鏡の前でスーツ姿の自分を見つめる。
漫画じゃないが、両手で頬を叩き気合を入れた。
窓を開けて朝の独特の匂いがする空気を思いっきり吸い込んだ。

机の上の少し陽に焼けた写真を半ば祈るような気持ちで目を向ける。
にっこりとほほ笑んだ香也が俺の隣にいる。
写真の中だけじゃない。
俺の隣で……
そう考えるだけで気持ちが高揚してきた。

いつもより少し遅めの朝食を食べるとするか。
煩い妹はもう家を出たらしい。
母親だけが、リビングで新聞を読んでいた。
「おはよう、俊平。テーブルの上に用意してあるから」

朝の早い母親はもう仕事が一段落ついたらしい。
テーブルの上の母親のマグカップからは、コーヒーの香ばしい香りがした。

「ああ」
そんな言葉しか返せなかった。
本当は言わなくちゃいけない言葉をのみこんでしまった。

朝食を食べ終えて、もう一度鏡の前に立つ。
自分に暗示を掛けるように心の中で何度も呟いた。
自分を信じろ
と。

踏み出す足が重かった。
全く自信が無いわけではない、むしろ香也の気持ちは俺に向いているという自負さえあった。
時折見せる、柔らかい表情やすねた顔。
あの頃のようにくるくる変わる表情は俺に対してのものだよな。

この前と同じように、香也の出てくる路地の壁に背を預けた。
立ち止まっていると、緊張から、足が震えてくるのがわかる。
今日で今までの結果が出ると思うとどうしたって落ち着かない。
心なしか、喉も乾いてきたみたいだ。無理に唾を飲みこんだその時
香也だ。

俺の事情なんて知るはずもないというのに、この前よりも余裕のある時間に姿を現した香也。
目を瞑り、大きく深呼吸をした。
行くぞ。
自分に声を掛け、未来へ繋がる一歩を踏み出した。

「よう」

「あっ俊平君、おはよ」

少し目を伏せ俯き加減で言葉を返してきた。
香也の歩幅に合わせるように、ゆっくりと足を運ぶ。
丁度、俺の肩口あたりでふわふわと揺れる香也の髪からは、男の本能を刺激するような甘い香りが足を踏み出す度に漂ってきた。

「お前さぁ」
「あのー」

2人の声が重なった。
少し遠慮がちなその声。
先が気になって香也の言葉を待ってみるも、香也は黙ったまま。

「何だよ」
香也の声のトーンや、さっきから目を合わせてくれない事に不安にかられ、動揺した俺のぶっきら棒な言葉。余裕がねぇって情けないにも程がある。
低く発した俺の声に、香也は少しだけ身を縮こませてしまった。

「俊平君は？」
どうやら、俺に話を譲ったらしく、さっきよりも小さい声でそう言った香也。

「俺が聞いているんだろ？　早く言えって」
だから俺、香也を萎縮させてどうするんだよ。
頭を抱えたくなる衝動にかられた。
そして、少しの間をおいて香也の口が開いた。

「この前の事なんだけどね」
2、3歩小走りして、急に振り返った香也。
まっすぐ俺の顔を見ていた。
その顔は、何だかしゅんとしている。
怒られた時のばあちゃん家のマロンみたいだ。
俺も足を止めた。

「ごめん、私全然記憶が無くって気がついたら家で寝てて……母さんに聞いたら俊平君が送ってくれたって言ったんだけど、美佐に聞いても何にも話してくれないし。もしかして、私何か変な事言ってなかったかな」
一気にそこまで捲し立て、小さく息をついた香也。
少しだけ、潤んだ瞳。不安そうな顔はそのままで俺の言葉を待っているようだった。

何を言われるかと、思った。
変な事とは何を意味する事なのだろうか？
尤も、香也は直ぐにタクシーで寝てしまったから、何も言ってはいないんだけれども……
変な事なんて言ってないぞ。

そう言おうと思った時、小さい声がまた聞こえた。
黙ったままの俺に不安を増したのだろうか

だって、謝ろうと思っても俊平君のアドレス知らないし。

路線変更だ。
どうせなら、今じゃない方がいいよな。
いろいろと練ったプランを一旦とっぱらった。

「あぁ、大変だったぞ。丁度いいや、今日俺帰り早いんだ夕飯でも奢ってもらおうか、嫌だとは言わせないぞ」
内心はびくつきながらも、香也の顔を見ると、一瞬目を大きく見開いてさっきまでの顔が吹き飛んだ。
はにかみながら、笑った香也は

「あんまり、高いとこは駄目だからね」
そう言ったのだ。

それって、いいって事だよな。
心の中では、拳をあげてガッツポーズを決めていた。

「ほれ、歩かないと電車乗れねぇぞ」
足を踏み出して、香也の先に進んだ。
途端に緩む俺の顔。

後ろからは
「待ってよ」
という香也の声。
ちょっとだけ浸らせてくれとばかりに、足を緩める事なく先を進む。
タッタッタッと香也の足音が俺の隣で落ち着くと緩んだ顔を引き締

めた。
その後は単語ばかりの言葉を並べた会話。
何か話そうにも、気を緩めたらどうにかなってしまいそうで。
それは夜までお預けだとばかりに、変な意地を張ってしまった。
駅について電車を待つ間に、携帯のアドレスを交換した。

そして、満員電車に乗り込む俺達。
マジ幸せかも。
この前のように香也を包み込むように両手で覆った。
香也は顔を真っ赤にさせながら、ありがとうを連発していた。
そして、香也の降りる駅。
ドアが開く瞬間に
「逃げるなよ」
そう耳元で囁くと
本当に逃げるように電車を飛び出していった香也。

っておい。
何も言わずに背中を見せた香也。
大丈夫なのか？
半ば放心状態で、電車に揺られた。

実は今日、有給を取って休みだったりする。
香也がいない満員電車なんか用はない。
次の駅で電車を降りると、ポケットから携帯を取り出し、さっき入れた、香也のアドレスをじっと見つめた。
すると丁度良く、震えだした携帯。
香也だった。

――逃げないよ～だ。終わったらメールするね――

何度も見返してしまうその文字。
絵文字も何にもない香也のメール。
だけど、ちゃんと繋がっていることが嬉しくてたまらなかった。
まだまだ続く、通勤の人達を避けるように自動販売機の横に立つと
早速返信。

――当たり前だろ――
って、本当は続くはずの言葉を省略しすぎだろ俺。
しかし、送信してしまったメールは取り戻せない。
ちょっと後悔し始めた時にもう一度携帯が震えた。

――了解！　俊平君もお仕事頑張ってね――

やばい、マジで怪しい奴になってしまうかも。
にやける顔はどうにもならなかった。

さてと、どうやって時間を潰そう。
携帯を、ポケットにねじ込むと指先にあたるキーケース。

そっか、自分の部屋帰ってねえな。
とは言っても、目の前の電車には、まだギュウギュウ詰めの通勤客。
ホームを歩く人の波に自分も並んで歩きだした。
どっか、喫茶店で時間を潰してから帰るとするかと。

駅を出て一番初めに目についた喫茶店
気だるい雰囲気の店員に案内されて、カウンターに腰を下ろした。
ちらりと店内を見渡すと、モーニングセットを食べているサラリー

マンや、参考書を広げる学生だとかが席を埋めていた。

これまた無愛想な店員が無造作においたコーヒーカップ。
一口啜り、まぁまぁかなとソーサーにカップを置いた。
普段は目にする事のない週刊誌を手に取って、ゆっくりとコーヒーを味わった。

緊張

ポケットをさぐり鍵を取り出した。
ドアを開けた瞬間に埃っぽい匂いに顔をしかめてしまう。
暫く閉めっぱなしにしておいたから仕方がないか。

真直ぐリビングに向かうと、厚めのカーテンを開けて窓を開け放つ。
取り敢えず部屋着に着替えた。
スーツをハンガーに掛けカーテンレールに吊るし皺を伸ばした。
さながらこれは戦闘服だ。
一番気に入っているこのスーツ。今日の日にはこれしかないと決めていた。

ソファに座り、リモコンでテレビを付けるも、昼間の時間帯、さして気になる番組もやってはおらず、画面を見る事なくそのまま寝転んだ。目を瞑ると浮かんでくるのは、香也の顔。
さっきまでここに居たんだよな、伸ばした手が空を切った。

本当の計画は、朝の電車で、意味ありげな言葉を投げかけ、帰宅時間を聞いて香也の会社の前で待ち伏せするつもりだった。
強引にも引っ張っていこう、そう考えていた。

俺の目的は香也と付き合う事で達成するものでなく、あくまでも、香也に俺を選ばせる事。俺に惚れさせる事にあるんだ。そのための努力は惜しんだ事はない。
仕事が出来てクールな男。
初めのうちは大口を開けて笑ってしまう自分を抑えるのに苦労したんだ。
香也と離れた高校生活は、苦痛の時期でもあった。

自分から美佐や大地に香也の情報をせがんだ癖に、実際聞いてしまうと耳を塞ぎたくなったり。

追いかける恋がしたい。
溺れるような恋をしたい。
香也の言葉。

自分に妥協なんて出来なかった。スタートは年上の奴らになんか勝てっこない。
如何に早くものにするか、それを重点に仕事をした。
香也が学生から社会人になる時その時が一番不安だった。
理想ばかり追い続ける学生と違い、社会の荒波にもまれつつ仕事の出来る奴。
それが社会人に成り立ての女にとってどれほど憧れの要素が高いかという事は解りすぎる程解っていた。
まぁ事実その通りになってしまったけれど。

でも過去じゃない、未来が俺には待っているんだ。
何年も何年もそう思い続けた。

いつの間にか眠っていたようで、生温かい風が頬にあたり、遠くに聞こえる廃品回収のマイクの音。

腹ごしらえでもするかと、コンビニに向かった。
刻々と迫る決戦の時間。
軽く緊張をときほぐそうと、いくつかのおにぎりと缶ビールを2缶、籠に入れた。

何を食べても、ビールを飲んでも味気がしなかった。

自分で思うより数段緊張しているに違いなかった。

スーツに袖を通す。
朝のように鏡の前に立って自分を奮い立たせた。
多少強張った自分の顔を見て、
次にここに立つ時はきっと今とは違う緩んだ自分の顔を見るはずだ。
そう思いながら、鏡の自分に背を向けた。

玄関に向かったその時に、肌身離さず持っていた携帯が震えた。
「後３０分で会社を出れるよ。俊平君は大丈夫なの？」
待っていたメールが来た。

「了解。俺はもう行けるから改札で待つ」
用件だけの返事を返した。

丁度良い頃合いだ。
駅へと向かう足は知らないうちに早くなる。
少しでも早く会いたくて。まるで十代の頃のような胸の高鳴りを感じた。

香也の使う駅に降り立つ。
香也の会社からの距離ではそろそろだろう。
少しでも早く香也を視線に収めたくて視線は真直ぐ、香也が来るであろう階段へと向かう。
ところが、待てども香也はやってこなかった。
さっきメールくれたよな。
携帯を取り出して、何度も香也のメールを確認してしまう。
ドタキャンって事はないよな。沈黙を守ったままの携帯を握りしめた。
背中を変な汗が伝いはじめた。

どれくらいたったのだろうか、段々と嫌な緊張が襲ってくる。
別に誕生日とか記念日とかそんな特別な日でもないのだが、今日じゃなきゃいけない、そんな気がして仕方が無かった。
今日しかないと。
落ち着きのなくなった視線の先にさらりとゆれる髪が。
来た。
香也は階段を駆け上がってやってきたみたいだった。
俺を視界にとらえると、少し顔をゆがませて俺に向かって走り寄ってきた。

「ごめん、定時きっかりにタイムカード押したものだから先輩に捕まっちゃって、ほんとごめん」
息を弾ませながら、上気した頬を見せ、両手を合わせて頭を下げる香也。
少しだけ頭をあげて俺の顔を覗きこむ仕草は、そのまま抱きしめたい衝動に駆られる。
思わず上がってしまった腕で香也の頭を軽く小突いた。

「遅せーよ」
言葉とは裏腹に緩んでしまった俺の顔。

香也は俺の顔を見て安心したのだろう、くしゃりと笑ってもう一度
「ごめんね」
と俺の顔を見ていったんだ。
マジ可愛い。やばいってその顔は。

行くか。
そう声を掛けて歩き始める。
俺の隣を歩く香也は、今日あった出来事を笑顔を交えて話している。
俺は、この後の事を考えるとどうしたって余裕がなくなってきて

「あぁ」とか「ふーん」だとかそんな言葉しか出来なかった。
もしかして、上手くいかなかったらこんな風に隣で歩く事も出来ないのかもしれない。
そんな不安な一瞬過った。それは顔に出ていたようで
「俊平君？」
香也に名前を呼ばれて我に帰った。
「悪りぃ、何処行くかって考えてた」
よくまぁ、咄嗟にそんな言葉が出てくるもんだよ、我ながら感心する。
「そっか、何処にしようか？　お酒あった方がいい？」
「無くても構わない。香也の奢りだろ？　店はお前が決めていいぞ」
本当は夜景の見えるホテルの最上階のバーを予約していた。
だけど、何となく迷っている自分もいた。
あからさまな所に連れて行くよりも、もっと砕けた感じの方がいいのかもしれないと。
それに、この前の香也の姿を見ると、酒を飲んでまた覚えてません何て言われた日にはたまったもんじゃない。
香也の好みは知っているつもりだが、香也の好きな店を知るにはそれでいいのかもしれない。
奢られるつもりなんてないけどな。
「うーん、やっぱり俊平君が決めて」
暫し悩んだ末に出た香也の言葉。
計画通りのバーではなく、森山に連れて行かれたレストランが頭に

浮かんだ。
一度だけ来た事のある店。
同期の面々で食事をしたあの店に。
「うわー素敵」
多分香也は店に入った時、そう言ったのだと思う。
俺はというと、何を話したのかも何を聞いたのかも正直全く覚えてなくて……
気がついたら、食後に出されたデザートを満面の笑みで頬張る香也をじっと見つめていた。
俺がこの顔をさせているんだよな、なんて。
香也のデザートが終わり俺は黙って、伝票を手に取ると
「行くぞ」
と会計に向かって歩き出した。
その後ろを慌ててついてくる香也。
「私が」
という香也の言葉を目で遮った。
店を出ると目の前の街路樹がイルミネーションで飾られていた。
うっとりとした表情を見せる香也。
やっぱりここで正解だったかもと一人ほくそ笑んだ。
視線の先には、どうしたって目につく2人組。
手を繋いでいる奴や腕をからませている奴ら。
ほんの少しだけ間を開けて歩く俺達はどう見えるのだろうか。
何となくだけど、香也の視線も俺と似たようなところを見ているよ

うな気がした。

「もしかして、羨ましいとか」

気がついたら、そう口にしていた。

「な、何が」

図星だったのだろうか、ちょっとどもった香也。

今がその時なのかもしれない。

というか、俺が待てなかったんだ。

「どうせ誰もいないんだろ。俺と付き合うか？」

そんな俺の言葉に、大きく頷いた香也。

やったんだよな、これっていいって事だよな。

自信がなかったわけではないが拍子抜けするほどあっさりと頷いた香也に俺は思わずフリーズ状態。

そのうちにじわじわと実感してきた。

数秒間無音だった俺に周りの喧騒が聞こえてきた。

ニヤケそうな顔をぐっと堪えて、目の前の香也の表情をじっと見つめる。

さっきまで、笑っていた香也は耳まで真っ赤にして俺を見ていた。

「お前、犬みたいだな」

何でそう言ってしまったのか。

それは失言かもしれないと思ったのはずっと後の事だった。

これは最初の一歩にしか過ぎないんだ。

俺の本当の目的は、香也に惚れられる事。

しかし、その後の計画が、自分の首を絞める事になるなんてこれっ

ぽちも思っていなかった俺は、イルミネーションの下、ずっと続くだろうと信じて疑わなかった幸せを噛みしめていた。

一番長い日1

「じゃあ」

「あ、うん。気をつけてね」

俺は背を向けて歩き出す。
ほれ、何か言う事あるだろ。
わざと歩みを遅くするけれど、香也の声を聞く事なく今日もまたこの角まで来てしまった。

この角を曲がったあと、塀にもたれてため息をついている俺の事なんて、あいつは考えもしないだろう。
付き合えたことで、浮かれていた俺だが、ひと月も経つと焦りが出てきた。
メールをすれば返ってくるし、無理に誘っても断られる事は無い。
だけど、一度だって香也から誘われた事は無いんだ。

何をやっているんだ。
追いかけるような恋がしたいんだろ、香也。
俺はいつまで経っても空回りのままだった。

そして、そのまま時が過ぎ、香也と付き合い始めて3カ月に経った。
同僚に文句を言われながらも、早めに仕事を切り上げた金曜日。
俺はいつものように、香也にメールを打った。

「飯、行くぞ」
そんなそっけないメール。
香也の好みだというクールな男を演じている。

これがクールなのかは疑問に思うところだが……
甘い言葉もなんもないそのメールに香也はいつも直ぐに返してくるので、今のところ大丈夫なのだろう。

「了解！　後少しで終わるから。出る頃メールするね」
本当は、いつも返事が来るまでドキドキしているなんて、絶対知られてなるものか。

もし断られでもしたら、きっと余計な事を考えてしまうだろう。
誰かと一緒なのか？　俺よりそいつを取るのか？
情けないほど、ヘタレな俺。クールな男なんて何処にもいない。

その日の食事は香也の好きなイタリアンだった。
機嫌良く笑っていたし、良い感じだったと思う。
明日は土曜で休みだ。
今日こそは香也の方から。
でも、そんな俺の願い虚しく、そんな素振りさえ見せない香也。
俺には何が足りないんだ。

そんな事を考えていたら、段々口数が少なくなっていったらしい。
心配そうに俺の顔を覗きこむ香也がいた。
「俊平？」
付き合い初めて直ぐにそう呼ばせる事に成功した。

やっときたか？

誘え、誘ってくれ。
明日どうする？　ってそれだけでいいんだ。

「んっ？」
出来るだけ優しい声を出したつもりだった。
香也の言葉を待つ。
それなのに

「どうかした？　頭痛いの？」
なんて。確かに、お前の事で頭痛いさ、だけど俺はそんな事を聞きたいんじゃねえんだよ。

食事を終えた皿は片づけられて、目の前には飲みかけのコーヒー。
俺は一気に流し込み
「痛くない。そろそろ行くか」
と席を立った。

今日もまたいつもの繰り返し。
香也からの誘いの言葉は聞く事は出来なかった。

後ろ髪を引かれる思いで、香也の家の前で背中を向けた。
そして、ゆっくりと歩みを進める。
今日もまた……
俺だって、もう25過ぎの健康な男だ。いつまでも、こんなママゴトみたいな恋愛なんてしていられない。もう限界だった。

どうにも、寝付けないうちに、朝を迎えた。
カーテンの隙間から零れる朝陽に目を細めた。
いつものように初めに携帯を確認するも、着信はなかった。
こんな天気のいい日に、どうして俺を誘わないんだよ。

朝飯を食いながら、今日の事を考えた。

親父の車でドライブでも行くかな。
今日は強引に夜中まで。
本当はずっと、待っているつもりだった。
香也から何か言ってくれるのを。
けれど、もう限界だ。
いい加減マンションの事も言わなくてはならないだろう。
本当の計画は、もうとっくに向こうに戻っている予定だった。
休日の前の日は香也を呼んで――
今日こそ連れて行こう。
そう思って、香也を呼びだすメールを打った。
１分でも早く会いたいが、女には支度ってもんがあるだろう。
自分が待てる限界の時間に待ち合わせ時間を指定した。
一人ほくそ笑みながら、送信したのだが、いつもは直ぐにくる返信が３０分経っても来る事は無かった。
もしかして、まだ寝ているのか？
初めはそう思おうとしたんだ。
トイレに行くにも携帯を握りしめて、香也からのメールを待っていのだが何時まで経っても香也からの返信はくる事はなかった。

一番長い日2

香也にメールを送ってから1時間経った。

もしかして、未送信だったりしてないか？
携帯を開き確認するも、そんな事はなく、俺の送ったメールには、ちゃんと送信済みのマークがついていた。
心臓が細かく鼓動する。
もう一度、送ってみるか？　何度もそう思ったのだが、もう少し待ってみよう。
その繰り返しで、その間にもどんどん時間は過ぎていく。

動物園の檻に入ったライオンのように、部屋の中をうろつきまわる。
じっとなんてしていられなかった。
緊張と不安ではりついた喉、落ち着けと考えるだけで空回りしてばかり。

コーヒーでも飲むか……

階下に来ると母親と妹がのんびりとくつろいでいるのが目に入り、ヤツ当りをしそうになる自分をグッと堪えた。そんな俺をお構いないしに、大きな口を開けて笑っている2人。
俺に気がつき
「どうかした？」
なんて、のんびりとした母親の口調。まるで俺をからかい、楽しんでいるように思えるのは気のせいだろうか？

「別に」

とアイスコーヒーを一気に飲みほした。

もしかしたら、俺を驚かそうと先に行ってたり何て事はないよな。
この前の待ち合わせで
『今度こそ私の方が早いと思ったのにな』
と呟いた香也を思い出した。ここにいても同じだな。

「俺、ちょっと出掛けてくるから。今日は向こうに帰るから夕飯はいらない」
それだけ言うと俺は、玄関を飛び出した。
駅への道には途中香也の家がある。こんな思いをするのだったら、迎えに行くと言えば良かったのかもしれない。今更ながらに後悔だ。
香也の家の方向を、恨めしい目で見つめながら、待ち合わせに指定した噴水広場へと足を進めた。
土曜の午前中という事もあってか、いつもよりも人が多かった。ベタベタといちゃつく恋人が目に入り、知らぬ間に、拳を握り締めていた。

ざっと見渡しても香也の姿は見られなかった。
携帯を握りしめ、香也のくるであろう方向を見つめる。
いつもハニカンダ笑みを浮かべ走ってくる香也。迎えに行ったんじゃ見れない顔だ。
後１０分。後５分。そして……とうとう１０時になった。
携帯を開き、メールを送る。
「遅い」
本当は時間ぴったりだ、遅いなんて事は全くないっていうのに。
だけどこれ以上、何も書けなかった。情けない俺なんて、見せられないだろ。
香也を待ちわびる事３０分、俺の周りの人々は入れ変わっていた。

右手にはしっかりと携帯を握りしめていた。
噴水に並んで立っている時計が、澄んだ鐘の音で１１時を知らせる。
いっこうにならない携帯を開き、迷いながらもメールを送った。

――連絡しろ――
不安と苛立ちといろいろな想いが交差する。
いつもの言葉回しでメールを送ってしまった事を初めて後悔した。
追われなくたっていいじゃねえか。
香也が隣にいればそれだけで、十分だろ？
弱気な俺が顔を出す。

深く息を吸いこみ、携帯を握りしめる。
もしかして、携帯の電源が入っていなくて、メールに気がつかなかったとか？
ちょっとの期待を持って俺は、香也に電話を掛けた。
しかし、俺の思いとは違い、直ぐに聞こえるコールの音。
そして、香也の声を聞かぬまま、留守番電話の案内へと切り替わってしまった。
聞きたくもないその機械的な声をプツリと切ってもう一度電話を掛け直した。
しかし、また……

調子が悪いとか、そういうんじゃないよな。
そんな考えが過った俺は、今度は香也の自宅に電話をかける。

――はいもしもし――
やけにテンションの高い香也の母親だった。繋がった事に一先ず安堵する。

「こんにちは、徳山です。今日は香也さんは」

香也の母親は、俺の言葉を聞き終える前に、さらに高い声で

――あら俊平君、久し振りね、たまにはうちにも寄っていってね。そうそう、香也ね、今日はいつもよりお洒落して出掛けていったわよ――

いつもよりお洒落して出掛けた？

出掛けた……

――あら、随分前に出たのに、まだ待ち合わせ場所に着いていないのですか？――

尻つぼみになりながら、香也の母親はそう告げたのだ。

動揺する自分を抑え（多分できていなかっただろうが）

「そうですか、解りました。そのうち寄らせて貰います。では失礼致します」

そういうのが精一杯だった。

誰と一緒にいるんだ？

いつもよりお洒落して？

携帯開き勝手に指が動いていた。

――連絡してほしい――

心の底からの本音だった。

一番長い日3

その後も携帯は沈黙を守ったまま――。

全身から力が抜けたようだった。

昨日までの自分を振り返って、今更ながらに自分勝手な行動に情けなる。

噴水の淵に腰かけて、これからどうすればいいのか、考える事が出来ない俺がいた。

鳴らない携帯を握りしめながら、ただ時が過ぎていくだけ。

女にも話しかけられた。

「ずっと、ここにいますよね、もしお暇だったら私と」

残酷な言葉。

お前なんか、俺には用がないんだよ。顔をあげる事さえしなかった。

暫く俺の前に立っていたようだったが、俺が反応しなかった事が気に障ったようで、アスファルトを蹴るようなハイヒールの音が段々と遠ざかっていった。

真上に来た太陽。

緊張や不安、暑さ。

身体中の水分が弾け飛んだようだった。

駅の階段下にある自動販売機はここからだと死角に入っている。

もし、この場を離れた時に香也が来たらと思うと、動けなかった。

それだけはない、足に力が入らず動けなかったという方が正解かもしれない。

香也のくる方向に、顔を向ける事も出来なくなっていた。

周りの喧騒も耳に入ってこなくなった。

もう随分と長い事、座っていたの、そう気づかされたのは鐘の音だった。
音の入ってこなかった俺の耳に、響いた鐘の音。
時間は2時を回っていた。

これで最後にしよう。
徐々に聞こえてきた、周りの音。
目を閉じて、噴水の水音を聞いた。
その柔らかい音に少しだけ、ほんの少しだけ落ち着いたと感じたその時に、携帯のボタンを押した。

1回2回3回……
そしてまた、無情にもアナウンスが聞こえてきた。
俺の声も聞きたくないっていうのか。

携帯を閉じて、ズボンの後ろポケットにねじ込むと、ふらり駅へと歩き始めた。
一歩踏み出す足が重たくて仕方がない。
ゆっくりと歩む足とは反対に早く、激しく波打つ鼓動。
その時に微かに聞こえた携帯の着信音。
香也専用にしてあるメールの着信音だった。

道の真ん中にいるのも構わずに立ち止まって、ポケットに手を入れた。
香也の事だ、メールに気がつかなかった、友達と会っているの。
そんな言葉と共に謝罪の言葉が並んでいるのではないかという微かな期待。
今の俺なら、どんな事だって許せる、そう思って開いたのにそこに書いてあった言葉は残酷なものだった。

――ごめんね――

一言だけのメール。
ごめんねの意味する事は？
メールに気がつかなった事か？
それとも、もう俺とは……
今すぐにでも会って真相を聞き出したいと思う自分。
しかし、香也の口から終止符を告げられるのではないかという恐怖が俺を……

携帯を握りしめながら、更に重たくなった足を引きずるように歩き始める。
今なら、電話繋がるはずだ。
何処にいるかを聞いて、香也に会うんだ。
それがお前だろ？
頭の中で何かが囁く。
一方で、今は時間を置くんだ、冷静になれ。
そう囁く何かもいた。
意識をせずに、向かった先は、俺の住む社宅だった。
目の前にあるコンビニに入り、酒を買いこむ。
沢山買いすぎて、ビニール袋が手にくいこんだが、そんな事は全く気にもならなかった。
久し振りに入った部屋で、真っ先に窓を開け放つと、すぐさまプルトップを引き上げる。
乾ききった身体に、ビールがあっという間に浸みこんでいく。
次から次にと、缶を開けても、ちっとも酒の味なんてしなかった。

黙々と飲んでいながら、何度も香也の名前を呼んでいた。
本当だったら、今日の晩はここに香也を連れてくるはずだったのにと。

気がついたら、目の前に大地が立っていた。
いつの間にか俺が呼びだしたらしい、部屋には無数の空き缶が転がっていた。
大地の話によると、酒を買って部屋に来いと言ったのだと言う。
全く覚えていなかった。
大地は呆れたといいながらも、一緒に酒を呑んでくれた。
鬱積した思いを大地に向かって吐きまくった。
強気な俺なんて、本当は何処にいなかったんだ。本当はいつも不安で仕方がなかったんだ。
付き合えた後は、俺に惚れさせる事で一杯だったが、いつまで経っても他人行儀というか、一歩引いている香也に、いつ愛想をつかれるのではないかという不安は付きまとっていた事。
テンションが上がったり下がったり、それでも、酔ったという感覚は全くなかった。

「もう駄目かもしれない」
口にしたら本当になりそうで、言えなかったその言葉を言ってしまった。
大地が慰めの言葉を言ってくれたけれど、全く気休めにもならなかった。

一番長い日４

酔っているという自覚はなかったのだが、身体は正直だったのだろう。
いつの間にかソファに横になっていたようで、ぼんやりと見えた視界の先には無数の酒の残骸が転がっていた。

大地は……
しーんと静まった部屋に明りだけが煌々と灯っていた。
帰ったのか？　そう思ったのだが目の端に見えた大地のジャケット。
あれを置いては帰らないだろうと思いなおす。
おおかた、飲みつくしてしまった酒でも買いにいったのだろうと、
重たくなった瞼を再び閉じた。
香也の事なんか忘れてしまいたかった。そんな事出来るはずもないのに。

身体がふーっと軽くなった感じがした。
ふわふわと浮いているような、そう夢を見ているようなそんな感じ。

そのうち人の気配がした、大地が帰ってきたのだろう。
今日はいくら飲んでも飲み足りない。初めっから何を飲んでも水にしか思えなかったのだから。
酔って酔って、現実から遠ざかりたい。
何度もフラッシュバックするあのメール。

ごめんね、ごめんね、ごめんね……

エンドレスで巡るごめんねの文字。
近づいてきた足音に俺は手を伸ばした。

「大地、遅せーよ。何処まで酒買いに行ってんだって」
強がりだったのかもしれない。大地にヤツ当りしているのは分かっていた。
だけどそうでもないとやっていられなかったんだ。
伸ばした手に、いくら待っても酒が渡る事は無かった。
とうとう、大地にまで呆れられたってか？

ずどーんと体が重たくなった。
そんな俺に

「俊平」

それは紛れもない香也の声であって……
とうとう俺も壊れたか、それとも夢を見ているのか？
香也に会いたいと思う俺に幻聴を聞かせたのか？
夢でも、幻聴でも何でもいいさ、もっと俺の名前を呼んでくれよ。

「俊平」

意識を持って声の方をみると
そこには、顔を少し顰めた香也がいた。

「マジやべーって。今度は幻覚だよ、どんだけ重傷なんだよ俺」

何が現実で、何が夢かなんてどうでもよかった。
香也がいるならば。

「俊平、一つ聞いていい？」
まぼろしだろう香也の声は震えていた。

何でも聞けばいいさ、否聞いてくれ。
お前の声を聞かせてくれ。

「なんなりと」
どうしてなのだろう、後悔したつもりなのに、こんな話方が身についてしまった事に我ながら呆れちまうよ。
せめて、夢の中だけも優しくしてやればいいものを……俺って馬鹿だ。

「私って犬みたい？」

香也の言葉にドキッとした。きっと忘れているだろうあの日記の事。
今なら言える。
俺の本当の気持ちを。

「あぁ、いつも言ってるだろ、犬みたいだよ。本当に香也は犬みたいだ……」
そうお前は俺の――
屈託なく笑うその顔も、困ったように顰める顔もお前の全てが愛おしいんだ。
愛してるなんて言葉じゃ足りないんだよ。
夢の中の香也相手だったけれど、そこまで言うと、少しだけ胸のつかえが取れたような感じがした。
香也の声を聞いて、こんなにも落ち着くなんて。
もう、目は開けていられなかった。
目の前に感じる香也の幻覚が消えてしまうのをみるなんて、堪えられなかったのかもしれない。俺はそのまま意識が遠くなっていくのを感じた。

複雑な夢をみた。
現実には、いなくなりそうな香也が、俺に話かけながら髪を撫でつけているそんな夢。
俺の隣には、香也がいて。
目覚めたくない、そう強く願った。また目を開ければ、俺には言い表せない程の過酷な現実が待っている。
ソファで眠ってしまった事は気がついていた。
起き上がる気力も無い俺は寝がえりを打とうとして、腕を動かそうとすると何かを感じた。

何度か、腕を持ち上げようとすれど、動かない。
大地か？

ゆっくりと瞼を開けると、俺に、もたれる香也の頭が。

香也の頭？

見間違えるはずが無い。
間違いなく、香也だ。まだ夢を見ているのか？

一瞬目の前の香也の足が動いた。
俺は反射的に

「うっうぉー」っつと情けない声をあげてしまった。
人間、思いもしない出来事に遭遇すると身体が固まってしまう事を初めて知った。

そんな俺を尻目に

「おはよう、俊平」
なんて、爽やかな顔をして、すくっと立ちあげる香也。
俺はなすすべも無く、そんな香也を見つめる事しか出来なかった。
今頃になって、昨日の酒が一気に俺を襲っているのか？
だけど、目の前でスカートの皺を払う姿は幻覚何かじゃねえよな。

未だ、ぼーっとした俺に、香也の指先が伸びてきた。
まるで人形のように固まった俺の頬に香也の人差し指が触れた。

夢じゃねえよな。
今、頬に触れたよな。

香也は何事も無かったかのように、すーっと歩き出した。
待ってくれ。何処に行くんだ。
そう言いたいのに、俺の頭は全くこの現実についていかない。
目を開けて、香也の姿を追うのが精一杯なのだ。

すぐに戻ってきた香也は、手にコップを持っていた。
これが本当に夢じゃなかったら……
手渡されたコップの水を一気に飲み干した。
こんなリアルな夢があるわけないよな。
だけど、未だ半信半疑の俺は

「夢？」
なんて情け無い事を。

「夢の方が良かった？」
そうほほ笑みながら俺に問う香也。
その言葉と同時に身体じゅうに一気に漲った力。

香也だ。香也がいる。
無意識だった。
香也が痛がるじゃないかって程、香也を抱きしめた。
もう、何処へも行かせない。

「俊平」
くぐもった香也の声。

「香也が、香也がどんな気持ちでここまできたか考えたくないけど、俺もう無理だから。俺もうお前の事、……離せないから……」
香也を抱く手に更に力が入った。

夢中で香也をかき抱く俺に微かな声が聞こえた。

「俊平、大好きだよ」
と。

一番長い日４（後書き）

ここまでお読み下さりありがとうございました。次回最終回になります。

贅沢な願い事

デスクに置いてある携帯からカノンが静かに流れた。
香也からの着信音。隣の席の相馬が、ニヤリと笑いやがった。
「おっ、愛しの彼女からか」
俺はこれみよがしにニヤリと笑い、携帯に手を伸ばした。
――俊平、お疲れ様～今週の休みなんだけど、水族館希望！　宜しくね――
にやける顔を抑える間も無く
――了解、朝一出発な。という訳で金曜の夕飯宜しく――
送信っと。
あれから、俺達の関係は変わったんだ。
俺も変わったし、香也も。
俺は待つ事を止めた、強引なところは変わらないかもしれないが、素直に気持ちを出す事にしたんだ。
そして、香也はこうやって、俺を誘うようになった。
勿論多少の駆け引きもあるけどな。
初めっからこんな付き合い方をすれば良かったのかもしれない。
だけど、きっとあれも必要な事だったんだよな。
あの日、お互いの気持ちをぶつけあった事。
これから、ずっと一緒に居る為に必要な事だったと今はそう思って

いる。

「徳山”顔”戻ってねえよ」
相馬の突っ込みで我に返った。

「うるせぇーよ」

「おっ照れてるー」
調子に乗った相馬が大きな声で俺をからかいやがった。

「ふーん、そんな事があったんだ」
俺に背を向け、夕食の準備をしている香也。
リビングには煮物の香りが漂い始めてきた。
醤油の甘辛い食欲をそそる匂い。

「相馬の奴、調子に乗って声でかすぎだっつうの」
ソファに座り、香也の後姿をじっと見つめる。
俺のずっと思い描いていた光景。自然と頬が緩んでくる。

「それで俊平は否定しなかったんだ」
即席で作ったきゅうりの漬物をテーブルに置きながら、俺を見る香也。

「否定って、何を？」

「ん～愛しのってとこかな？」
自分で言いながら恥ずかしくなったのか、くるりと背を向けキッチ

ンへと足を踏み出した。

「かーやっ」

「んっ？」

煮物の鍋に菜箸を入れながら顔だけをこちらに向ける香也。

マジ可愛い。

俺は、空いたビールの缶を片手に持って、香也の後ろに立った。

「解らない？　愛されてないとでも？」

そう耳元で囁いた。

「俊平、そんな耳元で……危ないよ」

香也の耳の後ろが真っ赤に染まった。

マジ可愛い。

「そんな事は聞いてない、まだ足りない俺の愛情？」

もう一度耳元で囁いて、ふーっと耳たぶに息を吹きかけてみた。

「俊平！」

頬をふくらませながら、こちらを向いた香也。思い通りの行動。俺はすかさず香也の頬に唇を落とす。

ゆでだこのような香也の出来あがりだ。

こんなところで欲情してしまう俺も何なのだが、折角の香也の手料理を無駄にする訳にはいかないからな。

菜箸を持ったまま固まってしまった香也の後ろを通り過ぎ、２本目のビールを冷蔵庫から取り出した。今日は金曜。まだまだ時間はあるからな。

「全くも～」という香也の嘆きを背中に受けて、ゆっくりとソファに沈んだ。
明日水族館に行けるか？　きっと今夜も手加減出来そうにもない。
そんな自信がしっかりとあたりして。プルトップを引きあげながら、今日何度か目か分からない自嘲。

妊娠させたら怒るかな？　そんな不埒な考えもちらほら。
そんな時に目に入ったカレンダー。
月末の土曜日にアンダーラインが引いてある。

大安吉日。
その日が俺の勝負の日。
一番の強敵である香也の父親に……
まだ早いと言い張る香也を説き伏せて、予定を立てて貰ったんだ。
一日も早く、この香也がいる空間を日常に変える為に。

俺の贅沢な願い事。
それは、香也と一緒に過ごす日常。

カーテンの向こうに見える星空に、ずっと一緒にいられるようにとそっと願いを込めた。

贅沢な願い事（後書き）

ここまでお読み下さりありがとうございました！

番外編・「恋したい　1」

思ったより仕事が長引いてしまった。
香也との約束の時間から既に一時間以上経っている。
待ち合わせ場所はいつもの駅前の喫茶店。
マスターとも顔見知りのその店だったら、香也が一人でいても安心だ。

怒ってるだろうな。
プクっと頬を膨らませた香也を想像して、跳ねるように歩幅が広がった。
そんな顔も好きだと言ったら、香也は何と言うだろう。

喫茶店が見えてきて、歩幅を狭め息を落ち着かせる。
うっすらと掻いた額の汗をポケットから取り出したハンカチで拭った。
先週の土曜香也がアイロンを掛けてくれたハンカチだった。

駅前通りにあるその喫茶店はガラス張りになっていて、俺はこっそり中を覗いてみた。
勿論香也を見る為に。
お気に入りの場所はカウンターの端っこ。
やっぱり今日もその場所に香也の後姿を見つけた。
大抵香也はマスターと談笑しているんだ。
そして待たせているのは自分な癖にそれを棚に上げて、マスターに嫉妬する。
そんな構図があったのだけど。
今日に限って香也は一人で俯いていた。
一歩踏み出し、香也の横顔を盗みみると、プクッとした顔は何処へ

やら嬉しそうに顔を緩めているじゃないか。
手には携帯が握られている。

そんな嬉しそうな顔をして誰とメールをしているんだ？

誰とも知らない相手に殺意を覚えるほど、香也にそんな顔をさせるのは俺だけで十分だ。
走ってきたからではない、小刻みになった鼓動を抑えるように胸に手を置いた。
ガラスに映った自分の顔が引きつっているのが解る。
平常心平常心。
何度かそう呟いて、自動ドアの前に足を踏み出した。
視線は香也をじっと追っていた。

マスターが香也に俺が来た事を促すと、香也は慌てて携帯を鞄に突っ込んだ。
これって怪しくないか？
そんな急いでしまうもんじゃないだろ？

自分が待たせた癖に、その事は綺麗さっぱりすっ飛びモヤモヤとした気持ちが膨れ上がっていく。

不機嫌最高潮な俺に香也は笑って

「お疲れ様、忙しそうだね」
なんて。何で笑っているんだ？
笑っているのは喜ばしい事なのに、変に勘ぐってしまう。

「マスター。ブレンド宜しく」
思ったより低い声が出て自分でも驚いた。

「何かあった？」
心配そうに俺の顔を覗きこむ香也。
何だか香也は嬉しそうだな。そう言いたいのをグッと堪えた。

メールの相手は美佐あたりだろうか。
そう思いながら、香也の質問には答えずに逆に香也に問い掛けた。

「香也は？　何か良い事でもあった？」
これで美佐からの情報源とでも言って楽しい話しの一つでも聞かせてくれたら、俺の鼓動は鎮まるのじゃないだろうか。

「べ、別に良い事なんて特に無いよ」
どもりながらそういう香也の顔が少し赤らんだように見えるのは気のせいなのだろうか。

早急に問いただしたい気持ちをグッと堪え、淹れたてのコーヒーを口にした。
いつもよりも苦く感じたのは気のせいじゃないだろう。

外で食事する予定だったが、平日だからと渋る香也を無理やり部屋まで連れてきた。
香也の着替えもクローゼットに並んでいる。
泊まったところで何の問題も無いはずだ。

幸い冷蔵庫の中にはいくらか食材がある。
肉を焼いて、サラダを作って味噌汁があればいいだろう。
初めに米を研ぐと、イラついている頭を冷やす為シャワーを浴びる事にした。

「キッチン適当にやってるね」
香也の言葉を聞いて少しだけ安堵して、浴室へと続くドアを開くと香也の携帯が鳴り思わず足をひそめた。
「うん、大丈夫。今俊平の部屋だけど、シャワー浴びに行ったところだから」
盗み聞きなんて性に合わないがそんな事を言ってる場合じゃないのはその後の香也の言葉を聞いたからだ。
「中々進展しないよ。やっと映画に漕ぎつけたけどデートって言う感じじゃ無かったな。でも手を繋げたから進歩ありかも」
一瞬何を言っているのか解らず、何度もその言葉を頭の中で繰り返した。
映画、デート、手を繋ぐ？
香也が浮気するなんて、そんな事考えたくもないけれど。
さっきの喫茶店で嬉しそうな顔をして携帯を見つめる香也の顔をみたら……
そんな俺の事なんて考えもしない香也は飛んでもない事を言いだした。
「告白なんてまだ無理だよ。振られちゃったら立ち直れないよ」
頭の中が真っ白になった。

番外編・「恋したい　1」（後書き）

久し振りに俊平と香也を書いてみました。３話完結になります。楽しんでくれたら嬉しいです。

番外編・「恋したい？　2」

浴室の壁にシャワーヘッドを掛けたまま、冷たすぎる水を全身に浴びた。
収めようとしていたはずなのに、細かく振動する鼓動は更に勢いを付ける。
香也の言葉を空耳だと自分に言い聞かせるも、あの楽しそうな声は消えてはくれない。
誰と話しているのかなんてどうでも良かった。

香也が映画を見て、手を繋いだのは誰なんだ。
告白？　告白なんかさせるものか。
そう意気込んでみるものの――。

香也は本気でそいつがいいのか？

先週の土曜だって、そんな素振りは見せなかったじゃないか。
いや、素振りはあったかもしれない。
普段は見もしない携帯を気にしていたような。

誰にも隙を入れさせていないつもりだった。
香也だって俺の事……

クソっ。
別れてなんかやるものか。

シャワーを止め、顔を叩き気合を入れた。
誰にも渡すつもりは無いから、と。

バスタオルを腰に巻き、リビングへ出ると香也はキッチンで味噌汁を作っているところだった。
ふと目に入るテーブルに置かれた香也の携帯。
これを見れば、相手が解るのか？
やってはいけない事だと思うのは重々承知だが、思わず手が伸びそうになる。

香也の携帯はメールの着信を告げている。
ただそれだけの事にこれほど動揺するなんて。

「香也の携帯、メール着てるぞ」
俺の声は柄にもなく震えていた。

「ああ、きっと大した事ないよ。あとちょっとでこれ終わるから」
少しだけ頬を赤らめてそう言う香也に、どうしようもない不安が襲ってくる。
伸ばし掛けた手を再び出して、香也の携帯を掴むとそのままキッチンにいる香也の元へと向かった。

「もしかしたら、仕事かもよ」
今日は平日だ。そうじゃないとも言い切れないだろうと尤もらしい言葉で香也に携帯を差し出す。
もしかして……そう思ってしまう気持ちを抑えるのに必死だった。
伸ばした手が震えていた。

「後でいいって言ったのに」
そう言って手を出した香也は俺の手に触れると

「冷たいっ。俊平冷たすぎるよ。震えてるじゃない。早く服着てきなよ」

一度手に渡った携帯をシンクの脇に置くと俺の背中に手を当てて、部屋へと促そうとする。
もしかして俺がいると見れないとでもいうのか？
一度疑心が浮かんでしまった俺はどうしてもその気持ちが消えてくれなかった。

香也に背中を向けたまま

「誰からだった？」
我慢が出来ず、そう言ってしまった。
冷静で落ち着いて大人の男なんて出来っこない。
まるで子どものようだと自分でも解っていた。
どうしようもなく醜い独占欲。
香也は呆れたようにため息をつき携帯を手に取ると、メールの画面を開いて

「回転すしの広告メールです」
と皿の上に怪しいまでのテカリを帯びたまぐろの写真を突きだされた。

だけどまだ、疑惑が晴れた訳ではない。
さっきの電話は紛れもない現実の事なのだから。

「ほらほら、本当に風邪引くよ」
子どもじみた事を言った俺に優しく諭す香也は、本心からだよな。
もう訳が解らなくなっていた。

香也が誰と付き合っても指を咥えて我慢していたあの頃の俺はもういないんだ。
寝室に入り嫉妬で狂いそうになりながら、寝巻替わりのスエットに

袖を通した。

何からどう聞けばいいのか、解らないままリビングに戻ると、食事の支度を終えた香也がにっこり微笑みながら俺を見て言った。

「今週末、映画に行かない？　最近行ってないよね」

最近行ってないだと？

俺が知らないと思ってそう言っているのか？

香也はそんな事する奴じゃないのは自分が一番良く知っているはずなのに、全身の血が逆流してかーっとなった俺は思っていた事をぶちまけてしまった。

「最近行ってない？　俺が知らないとでも？　誰と手を繋いだって？　告白はまだ出来ないってどういう事だ。俺は絶対別れないから。香也は俺のものだ。誰にも渡さない」

言い終えた直後に後悔した。こんな風に感情的に言うつもりなんか無かったのに。

香也を責めるように言い放った言葉。

言ってしまった言葉を取り消す事なんて出来ないのに、怖くて香也の顔が見れなかった。

俯いた俺に届く香也の焦った声。

やっぱり……

項垂れたままの俺に小さな尻つぼみの声が届いた。

「俊平。それ誤解だから」

「言い訳か？」

誤解と言った香也の言葉が信じられずにまた責めるような言葉を言ってしまった。
そんな事言いたい訳じゃないのに。
だけど、誤解だと言った事にほんの少しの安堵もありやっと香也の顔を見る事が出来た。
香也は薄くほほ笑むと、携帯を手を持ち
「ゲームなんだ。まだ開発中のアプリなんだけど。モニター頼まれてね。恋愛シミュレーションのゲームだよ」
香也の言っている言葉を理解するまで少し時間が掛ってしまった。
んじゃ何だ？　俺はゲーム相手にこんだけ苦しんだのか？
気が抜け過ぎて、ソファにどさっと座りこんだ。

本当に、もうやってらんね。
自分がアホ過ぎて笑えねえ。
まだ渇ききってきない髪に両手を突っ込むと
「ダーっ」と訳の解らない雄たけびを上げた。

すると、ゆっくりと沈むソファ。
香也がそっと俺の手に手を添えて
「凄く嬉しかったよ。私だって別れてやらないんだから」
と寄り添ってきた。

香也の背中に手を回し、抱きしめようとした瞬間。
香也はすっと立ち上がり、何事も無かったかのように

「ご飯冷めちゃうから」
とテーブルに行ってしまった。
寸でのところで香也の背中に届かなかった手が宙を彷徨う。

「ほら、早く」
とせかす香也に降参とばかりに、俺も立ち上がった。

番外編・「恋したい！？　3」

「香也にお願いがあるんだけど」

そう言って美佐に呼び出されたのは先月の事だった。
神妙な顔でお願いされるとちょっと怖かったのだけど、それは願ってもみないお願いだった。

「モニターになって欲しいの」
美佐は携帯を取りだして、何やら親指を忙しなく動かしている。
美佐の会社に持ち込まれた携帯ゲームのアプリ企画。
一般の人に公開する前段階という今流行りの恋愛系のゲームだった。

「私そういうのやった事ないし、どちらかと言ったら嵌らない方だから不向きだと思うよ」
俊平の存在が大きすぎて、ゲームと言えど他の男の子の事を気に掛ける余裕ないよ。
やりたくないという訳じゃなくて、他に適任がいそうじゃない。
感想とか言われてもあんまりやってないと役に立てないだろうし。
何だか美佐に申し訳なくて小声で呟いていると。

美佐の眼がキラリと光った。

「それは十分承知の上、ほら、このアプリが凄いのはね」
ジャジャーンとでも効果音がつきそうな勢いで私の前に突き出された美佐の携帯。

その画面には、学生服を着た俊平が映っていたのだ。

何これ――
わたしは美佐の手から携帯を取り上げてまじまじと画面を凝視してしまう。
紛れも無い、高校生の俊平がそこにいた。

「興味あるでしょ」
美佐の携帯を食い入るように見つめてしまう。
そんな私をお構いなしに美佐は説明を始めたんだ。

「これの一番のお勧め機能はね、写真を携帯に取りこんで架空でない実在の人物とバーチャル恋愛が出来るところなの」
興味が無いなんて言ったのに、今は美佐の言葉に釘付けだ。

「それでね、ちょっと貸して」
両手で包んだ携帯をひょいと持ち上げられて、画面を操作すると

――こんにちは――

携帯の中の俊平が喋った。

「この声もね、調節出来るんだよ」
初めに3つの声があって、一番近いだろう声を選ぶとそれを微調整まで出来るんだ。
もう、感心しきりってこの事だよ。

「モニターやってくれるよね」

美佐の言葉と同時に大きく首を何度も動かす私がいた。
パスワードを教えて貰って自分の携帯で高校生の俊平を呼びだすと、もうお菓子やビールどころの話しじゃなかった。

高校生の頃は一度も会った事なかったからな。
小さい画面に映しだされた俊平を見て、もう頬は緩みっぱなし。
肝心なゲームはただの同級生からのスタートだ。
話し掛けてもそっけなくて、何だか付き合い始めの俊平を思い起こしてしまう。
ゲームだとは解っているけど、ライバルなんかも現れたりで、ちょっと気が気じゃないかも。
それこそ、美佐の事を忘れて私はゲームに夢中になっていた。
そう、電源が無くなるまで。
はっと気が付くと、美佐は床にごろんと寝っ転がっていた。

そして、ふと気がついた。
夢中でしていたゲームの最中、メールが何度が来ていた事を。
サーっと血の気が引いていく。
俊平だったりしないだろうか、と。

確か、夕方「後でメールするから」と言ったのは私の方だ。
美佐と一緒の時間を邪魔されたくないとばかりに、今日美佐のアパートに来る事を内緒にしていたから。
きっとそれが解ったら、大地を連れてここに乱入してくるに違いない。
そして、ガールズトークも中途半端のまま、俊平の部屋に連れて行かれるのは目に見えていたから。
嫌じゃないけど、たまには美佐と一緒にゆっくり話したい……と言いつつ、美佐を放って携帯と睨めっこしていた訳だけど。
取り敢えず、充電だ。
テーブルの上に無造作に置かれたこのアパートの鍵を掴むと、美佐にタオルケットを掛け上着を羽織ってコンビニに向かった。

いらしゃいませと声と、ありがとうございましたと言われたまでの時間、きっと一分も経っていなかったと思う。
ビニール袋を断って、店先で包装を破ると直ぐにお目当ての物を携帯にセットした。
真っ黒い画面が明るくなって、私の親指は速効着信メールを開いた。
全身の力が一気に抜けていく。
俊平からのメールではなく、家電量販店の広告メールとレストランのクーポンメールだった。
美佐のアパートまで歩きながら俊平にメールを打った。
――ごめんね、メールするって言ってったのに。美佐と盛りあがってしまったよ。今日はこのまま美佐の部屋に泊まります。明日の朝起きたら連絡するね――
送信完了。
ほっとしたら、またゲームの続きが気になったけど……
きっと機嫌が悪いだろう俊平。明日の私の為にとグッと堪えた。
携帯を両手で包み、ライバルが俊平に近づきませんように、と願って携帯を畳みアパートへと足を速めたのだった。
それから――
嵌りすぎるなんてもんじゃない、もう私はアプリに夢中になっていた。
暇さえあれば、携帯を気にしてしまう。
本物の俊平が一番好きなのには変わりがないけれど……
いくらゲームだとはいえ、他の女の子が俊平に約束を取り付けようとするのは許せないって思っちゃう。

まだあどけなさの残る俊平の姿も愛おしくて堪らないんだ。

そんなある日恐れていた事態に陥ったのだ。

いつもの喫茶店で待ち合わせをして、軽く飲みに行く予定だったその日。

平日にも関わらず部屋に誘われた。

いつもだったら、次の日大変な事になるのが解り過ぎるほど解っているので遠慮したいとこだけど、アプリのゲームで中々なびいてくれない俊平とリンクしたせいか、渋りながらも了解してしまった。

美佐から電話が掛ってきたのは、タイミングよく俊平がお風呂に向かった直後でゲームの進行状態を報告していたのだけど、まさかその話を俊平に聞かれていたとは。

でもそのお陰で、凄い告白をされたんだ。

勘違いをさせてしまった俊平には悪いけど、それがどんなに嬉しい言葉だったか。

俊平には解らないだろうな。

食事中、いくらゲームとはいえ私が他の男と恋愛をするのは嫌だ、と何度も言われたけれどこれだけはバレたくないとしらをきり通すのがどんなに大変な事か。

そのせいで、夜は――恐ろしい事になってしまった。

三日後美佐からの電話でそのゲームは呆気なく終わってしまった。

何でも、精巧過ぎて、リアルとバーチャルの区別が出来なくなってしまう人が続出したらしい。

同感だ。

顔も声も本物みたいだったら錯覚を起こしてしまう。

私もそうだから。

そして私の携帯から、アプリが削除されてしまった。
とても寂しいって思ったのは内緒の話。
美佐からお詫びにと、ゲームを始める前に携帯に取りこんだ時の学生時代の俊平の写真を一枚貰った。
手帳に挟んで私の秘密の宝物だ。

あと、もうちょっとで落とせそうだったのになぁ。
なんて、時々思い出しちゃうのは恋愛をしたいのじゃなくて、あの頃の俊平にも恋をしたいと思った願望。
出来る事なら、中学生に戻って俊平に近づく女の子を全員追い払いたいなんて。
欲張りなのかな。

心密かにアプリの復活を願っている事は俊平には内緒の話。
つくづく俊平の事が好きなんだと思い知ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4494f/

贅沢な願い事

2010年12月9日09時25分発行